

日本の海運

SHIPPING NOW

2020-2021



はじめに

鉄道、トラック、バスなどによる「陸上輸送」、飛行機などによる「航空輸送」は、ふだん私たちが直接利用したり目にしたりする機会が多いのでよく知られていますが、船などによる「海上輸送(海運)」はあまり知られていません。しかし、船もほかの輸送機関と同じように活躍しており、「海運」は日本に必要不可欠な産業です。

このパンフレットの基本編では、外航海運(飛行機でいう国際線)と内航海運(同じく国内線)の概要、安全な航行のための取り組み、運航する船員、さらには「海事クラスター」という概念について説明し、データ編では、重要な統計などを収録しています。これらを通して「海運」について理解を深めていただければ幸いです。



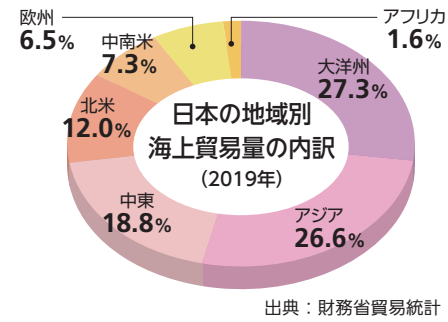
目次

世界を結ぶ海上物流ルート	4
個性豊かな船たち	6
基本編	
外航海運Ⅰ	12
外航海運Ⅱ	14
内航海運	16
海事クラスター	18

データ編

外航海運Ⅰ	20
外航海運Ⅱ	43
内航海運	46
海事クラスター	51
日本の外航海運の歴史	52

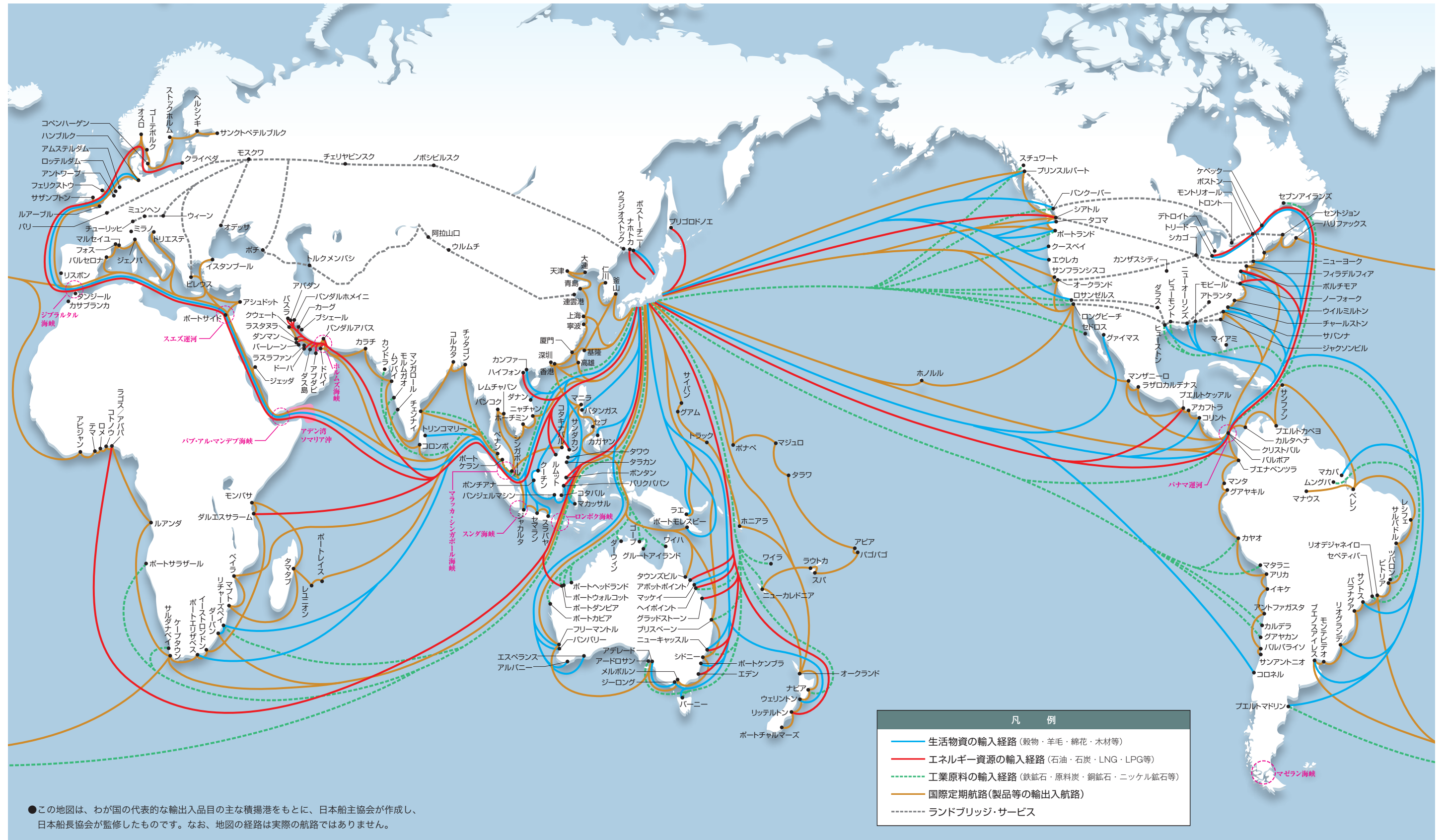
世界を結ぶ海上物流ルート



四面を海に囲まれた日本は、海で世界中とつながっています。

産業に欠くことのできない原油や天然ガスなどのエネルギー資源、暮らしに欠くことのできない穀物や衣料品をはじめとする生活物資が、今日もまた目に見えない「ライフライン」としての海上物流ルートで運ばれてきます。

また、原材料や部品の調達、生産や販売、さらには在庫保管やデリバリーまでの企業ニーズに応えるため、日本の海運は陸運や空運とともに総合的な物流ネットワークを形成して、暮らしや産業の維持発展に寄与すべく、日々努力を続けているのです。



個性豊かな船たち

船はさまざまな貨物を運んでいます。原油、LNG（液化天然ガス）、鉄鉱石、穀物、自動車、雑貨など、液体があれば固体もあり、その形や大きさも千差万別。それぞれの貨物の特徴に合わせて、もっとも安全で効率的な輸送方法を追求した結果、多彩な専用船が生まれました。また、大量

輸送を効率的に行うための大型化も進んでいます。

今の時代のニーズに応えながら、暮らしや産業を支え続ける海上輸送のエキスパート。ここにご紹介したのは、そんな個性豊かな船のプロフィールです。

■ 水を積むバラストタンク※1
■ 積荷スペース ■ 荷役装置※2

※1 バラストタンク：船体の安定を確保するために、海水を積載する船内のタンク。

※2 荷役：船の貨物の積み込みや荷揚げをすること。

※3 TEU：長さ20フィートのコンテナを1単位とした換算個数。

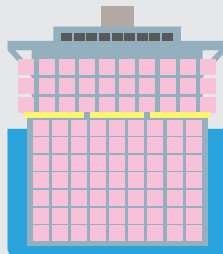
※4 総トン：船の大きさ（容積）を表す単位。

※5 重量トン（正式には載貨重量トン）：貨物を積載したときの全重量から船自体の重量を差し引いたトン数。

暮らしを運ぶ船（外国航路）

コンテナ船

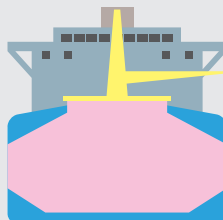
貨物船の中では最速を誇る雑貨輸送の専用船。衣類や電気製品などの生活雑貨から危険品まで多種多様な貨物を国際規格のコンテナに収納して運ぶ。コンテナ化された貨物はトラックや鉄道などへの積み替えが容易なため、荷役の迅速化とともに海陸一貫によるドア・ツー・ドアの輸送を実現。国際定期輸送に画期的な変化をもたらした。



ONE MINATO (13,900 TEU※3)
152,180総トン※4／146,696重量トン※5／全長366m

ばら積み船（穀物船）

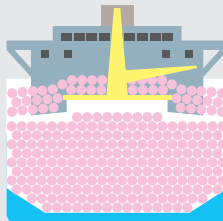
小麦などの穀物をそのままの状態で運ぶ。貨物の流動を防ぐため、船倉上部に傾斜をつけ、トップサイドタンクという三角形のバラストタンクを設置している。本船自体に荷役装置を持つものと持たないものがあるが、穀物の揚げ荷役には、通常、陸上に設けられたニューマチックアンローダーというバキューム方式の荷役装置が使われる。



DYNA CRANE
31,482総トン／55,702重量トン／全長190m

木材専用船

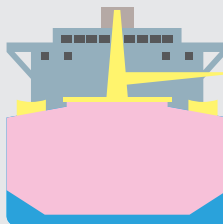
木材を専門に運ぶ船。貨物は船倉内だけでなく甲板上面にも積まれ、甲板積みの木材は両舷に建てられたスタンプションと呼ばれる支柱で左右を押さえ、丈夫なワイヤーで固定される。荷役施設の不備な積み地が多いため、ほとんどの船がクレーンを装備する。積み荷役は、いかにに組んで運ばれた木材を沖合いで積み取る方法が一般的である。



CACTUS K
19,817総トン／31,893重量トン／全長176m

チップ専用船

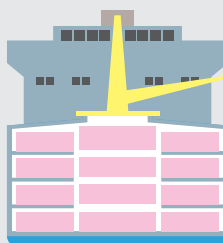
製紙原料となるチップ（木材を砕いた小片）を専門に運ぶ。チップは比重がきわめて小さいため、船倉容積を最大限にして大量に積み込むとともに、バラストスペースを船底部に設けている。積み荷役は、陸上のニューマー（空気圧送式荷役装置）で行われ、揚げ荷役には、本船装備のベルトコンベヤーとバケットクレーンが使用される。



HOKUETSU ACE II
43,591総トン／54,334重量トン／全長210m

冷凍運搬船

野菜や果物、冷凍肉、鮮魚などの生鮮食品を低温輸送する。野菜や果物のように常温に近いものからマイナス50℃という超低温が必要な冷凍マグロまで、さまざまな条件に対応できるよう船倉内の温度と湿度は、適切にコントロールできる。船倉は中甲板で何層かに仕切られ、輸送温度の異なる貨物を積み分けて運べる。

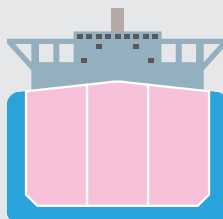


LADY ROSEBAY

9,603総トン／10,601重量トン／全長143m

原油タンカー

原油を運ぶ専用船。複数の区画に仕切られたタンク状の船倉を持ち、事故時の原油流出を最小限に抑えるため船側と船底を二重構造化している。荷役用のパイプラインとポンプを持ち、積み荷役には陸側のポンプを、揚げ荷役には本船装備のポンプを使う。かつては50万重量トンを超す大型の船も出現したが、現在は30万重量トン級のVLCC(大型タンカー)が主力。

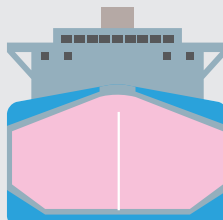


ENEOS SPIRIT

159,585総トン／312,247重量トン／全長339m

LPG船

プロパンやブタンなどを液化したLPG(液化石油ガス)を運ぶ。輸送方式には常温で加圧して液化する加圧式、常圧で冷却して液化する冷却式及び半冷加圧式があるが、大型LPG船はすべて冷却式。ばら積み船のような船倉内に防熱を施した低温LPGタンクを設置している。輸送中に気化したガスを液化する再液化装置も備えている。

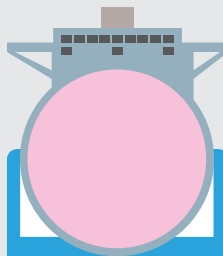


ASTOMOS VENUS

47,963総トン／55,209重量トン／全長230m

LNG船

天然ガスをマイナス162℃の超低温で液化したLNG(液化天然ガス)を運ぶ。超低温輸送のための特殊な材質のタンク、荷役時の事故を防ぐ緊急遮断装置、輸送中に気化した天然ガスを燃料として使うタービンエンジンなど、先端技術を駆使したハイテク船。タンクの形状には、独立球形タンクを船体に固定した構造のモス方式や、メンブレンと呼ばれる金属の薄膜でタンクを覆ったメンブレン方式などがある。



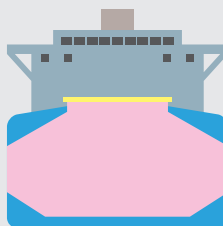
GRACE DAHLIA

141,671総トン／86,512重量トン／全長300m

ばら積み船(石炭専用船)

石油代替エネルギーとして近年比重が高まる電力用石炭の効率輸送に活躍する専用船。国内の石炭専焼発電所の専用バースサイズに合わせた船型や喫水※、バースに備え付けられた揚炭機の可動範囲に合わせたハッチ構成など、日本の発電所・一般需要家向けの石炭輸送に最適な船として設計されている。現在、日本とオーストラリアなどを結んでいる。

※船体のうち、水面下に沈んでいる深さ。



CENTURY WAVE

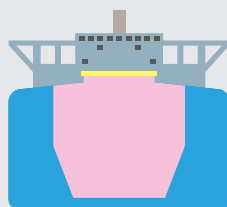
50,888総トン／91,686重量トン／全長235m

個性豊かな船たち

原料を運ぶ船（外国航路）

ばら積み船（鉱石専用船）

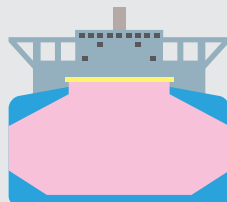
鉄鉱石を専門に運ぶ船。比重の大きい鉄鉱石を満載した時に必要な浮力を確保するために、舷側に大きなバラストスペースを取り、船体中央部のみを貨物スペースとしている。戦後、日本の製鉄業の発展にともなって登場し、スケールメリットの追求からタンカーに次いで大型化した船種。最大級のものでは40万重量トンに及ぶものもある。



NSU CARAJAS
197,453総トン／399,688重量トン／全長361m

ばら積み船（鉱炭兼用船）

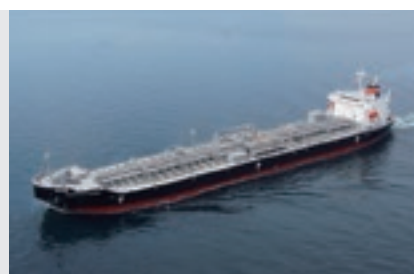
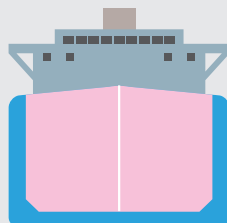
製鉄原料の鉄鉱石と石炭を運ぶ。鉱石専用船同様、大型化が進んだ船種で、最近は製鉄原料輸送の主力。鉄鉱石と比べてはるかに比重の小さい石炭も運ぶため、鉱石専用船より積荷スペースは広い。石炭の場合は全船倉に満載されるが、比重の大きい鉄鉱石の場合は船倉1つおきに積み込むジャンピングロードという方法を採用する場合もある。



KASHIMA MARU
93,630総トン／182,503重量トン／全長288m

ケミカルタンカー

プラスチックや化学繊維の原料となる石油化学品やリン酸、硫酸など液状の化学品を運ぶ。多種類の貨物を積み合わせるため、数多くのタンクを持ち、タンクごとに独立したポンプとカーゴラインを備えている場合が多い。腐食や貨物同士の汚染を防ぐため、ステンレスを用いたり、特殊なコーティングを施すなど、タンク内も工夫されている。

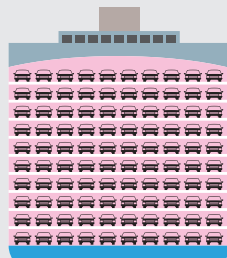


CHEMROAD QUEEN
21,255総トン／35,847重量トン／全長179m

製品を運ぶ船（外国航路）

自動車専用船

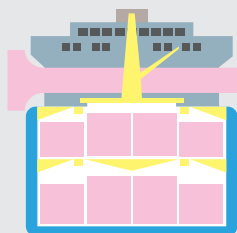
自動車を専門に運ぶ船。貨物となる自動車を専門のドライバーが運転し、船のランプウェイ（船と岸壁とを橋渡しする設備）から船内に積み込む。船内は何層ものデッキに分かれ、バスなど大型車両を積むためのデッキは車高に合わせて上下する。全体に屋内駐車場のよう構造をしている。最大級のものでは13層ものデッキを持つ8,000台積みの大型船もある。



APOLLON HIGHWAY
76,299総トン／20,321重量トン／全長200m

重量物船

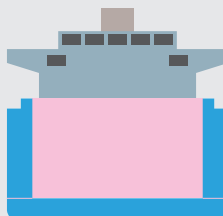
プラント部品や大型建設機械など重量物を専門に運ぶ。構造は一般貨物船に似ているが、重い貨物を自力で積み降ろせるよう、強力な荷役装置を備えている。船倉内に入らない大きな貨物は甲板上に積んで運ぶので、甲板は強固に建造されている。重量物の荷役中に船体が大きく傾斜するのを防ぐため、大容量のバラストタンクを両舷に設置している。



KAMO
8,145総トン／9,433重量トン／全長120m

一般貨物船

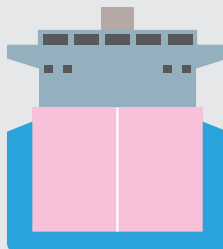
鋼材、機械、家具、食料、衣類などを運ぶ、最もオーソドックスな内航貨物船。船倉内に雑貨を混載し、さまざまな貨物に対応できるよう汎用性のある構造になっている。以前は199総トン型が主流であったが、現在では699総トン型や499総トン型が輸送効率の高い船型として多く建造されている。



鐵翔丸
499総トン／1,670重量トン／全長76m

油タンカー

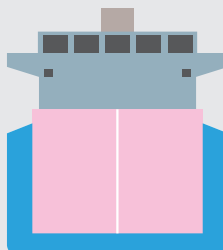
石油製品を運ぶ油送船。重油用の黒油船(ダーティー・タンカー)とガソリン、ナフサ、灯油、軽油用の白油船(クリーン・タンカー)に分類される。黒油船はタンク内が鉄板のままなのに対し、白油船はコーティングされているのが特徴。タンク内は壁で仕切られ、船体が揺れても、油が片側に移動しないようバランスが保たれている。



鶴宝丸
3,869総トン／4,999重量トン／全長105m

ケミカルタンカー

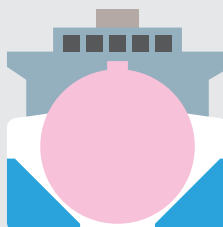
合成樹脂やポリウレタンなどの原料となる石油化学品をはじめ、液体化学品を専門に運ぶ船。油タンカーの構造と似ているが、タンク内を細かく区切っているのが特徴である。有害な液体物質を運ぶことが多いため、タンク内をコーティングしたり、ステンレス製のタンクを用いるなど、腐食や汚染防止、環境保全が考慮されている。



のじぎく
499総トン／1,199重量トン／全長65m

LPG船

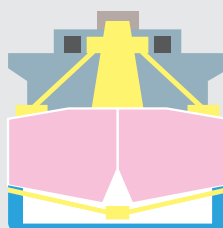
LPG（液化石油ガス）を国内輸送するための専用船。冷却式の外航LPG船に対して、内航LPG船は常温で加圧して液化する加圧式を採用。球形または円筒形の圧力タンクを持つ。常温で輸送できるので断熱材は持たない。加圧式はタンクの大型化に限界があるため、小型船に限られるが、貨物の取り扱いが冷却式よりはるかに容易である。



第三十二雄豊丸
749総トン／960重量トン／全長68m

セメント専用船

工場で作られたセメントをばら荷の状態での流通基地まで運ぶ。軽い粉末であるセメントの特徴を利用し、積み降ろしには空気圧で搬送する方式がとられ、そのための荷役装置を装備している。流通基地で荷揚げされたセメントはセメントサイロに格納され、その後、袋詰めまたはばら荷のままタンクローリーに積まれて搬送される。



第六芙蓉丸
3,610総トン／5,477重量トン／全長98m

個性豊かな船たち

国内貨物を運ぶ船

石灰石専用船

鉄鋼やセメントのメーカー向けの石灰石を専門に運ぶ。最近ではセルフアンローダーと呼ばれるベルトコンベヤー方式の自動荷役装置を持つ船が増えている。これは、ホッパー状の船倉から落とされた石灰石をそのまま陸上に運び出す方式で、荷役に人手がほとんどかからないという特徴を持つ。

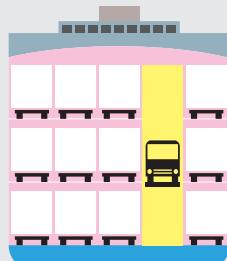


名友丸
5,589総トン／7,500重量トン／全長106m

RORO船

船の前後のランプウェイからトラックやトレーラー、フォークリフトによって直接貨物を積み降ろしするRORO(ロールオン/ロールオフ)方式の貨物船。クレーンで荷役する方式はLOLO(リフトオン/リフトオフ)方式と呼ばれる。主に定期航路に就航し、雑貨輸送に活躍。荷役の迅速化とともにモーダルシフト※の受け皿としても注目される。

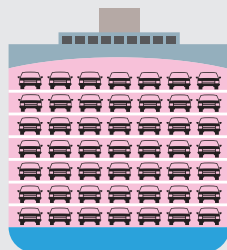
※貨物輸送における効率的輸送機関への転換。一般的にはトラックによる貨物輸送から鉄道・海運への切替。



ほっかいどう丸
12,265総トン／7,100重量トン／全長180m

自動車専用船

自動車を専門に運ぶ船。専門のドライバーが自動車を運転して船内に積み込む。船内は床を広くとり、5層以上の多層構造になっている。バスやトラックなど車高の高さに合わせて床の一部を上下することもできる。海上雑貨輸送の需要増加にともない、トレーラーなどの大型車両を同時に運べる構造の船も増えている。



きぬうら丸
12,691総トン／5,820重量トン／全長162m

プッシャーバージ

貨物を積むバージ(はしけ)とそれを押すプッシャー(押船)を組み合わせた水上輸送システム。バージの船尾に造られたノッチ(切り欠き部)にプッシャーの船首部分をはめ込んで連結し、プッシャーの推進力でバージを運航する。波やうねりのある沿岸でもある程度活動できるように改良が加えられ、近年、大型化も進んでいる。



プッシャー：ツーナス | バージ：ツーナス
全長20m／幅12m | 全長64m／幅14m

外航客船

レジャークルーズのための客船。4～12DKの9層に分かれたデッキには、客室やレストラン、ラウンジ、シアターなど贅沢な設備が整えられ、航海中はショーやイベントなどが開催される。単なる移動手段を超えて、船旅そのものを楽しむための設備をそなえ、サービスを提供している。



飛鳥II
50,444総トン／全長241m

レジャーを楽しむ船

SHIPPING NOW

基本編

外航海運Ⅰ P12～13

- 1 成長産業である海運
- 2 世界経済に貢献
- 3 海外物資に頼るわが国の生活と産業
- 4 輸出入のほとんどが海上輸送
- 5 輸出入貨物の約6割を輸送
- 6 海外の日本企業をバックアップ
- 7 約90%が外国籍の船

外航海運Ⅱ P14～15

- 1 頻発する海賊
- 2 混雑する海域
- 3 外航船の運航体制
- 4 日本経済を支える外航船員の数
- 5 エコへの取り組み

内航海運 P16～17

- 1 国内貨物の約4割を担う内航海運
- 2 生活や産業に必要な物資を輸送
- 3 高まる内航海運への期待
- 4 内航船員
- 5 環境にやさしい内航海運

海事クラスター P18



外航海運 I

外航海運は世界経済が発展し続けるために不可欠な産業です。海上輸送量は年々増加し、それに伴い船腹量(船の輸送力)も増加しています。日本商船隊(日本の船会社※が運航する船)は世界の船腹量の約1割を占め世界経済に貢献しています。

四面を海に囲まれ資源の乏しい日本は、原材料の多くを輸入に頼っており、一方、加工した製品を輸出しています。ほとんどが海上輸送で、うち6割が日本商船隊により運ばれています。また、国内の製造業等の海外進出に伴い、三国

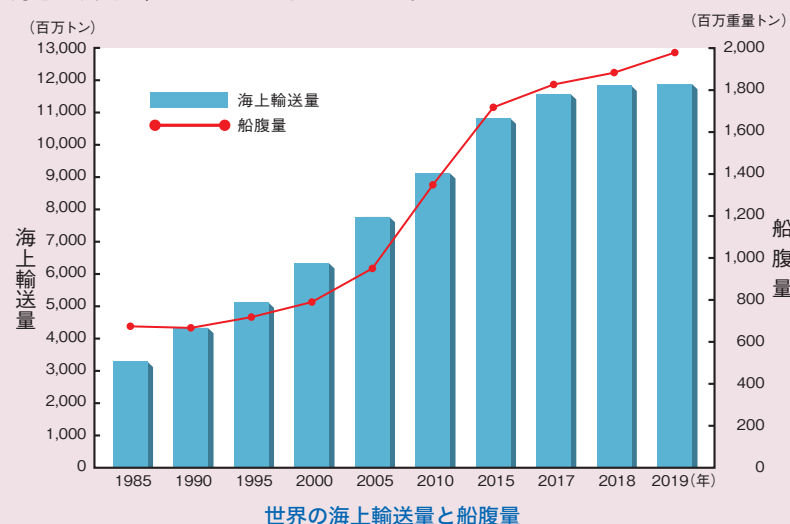
間輸送(日本を経由しない海外から海外への輸送)も増えています。

外航海運は世界単一市場の中で熾烈な国際競争を行っています。世界の船会社は国際競争に勝ち抜くため、船の国籍を維持費用の安い国にするなどの努力を行っています。日本商船隊も日本籍はわずか11.3%で、残りはパナマなどの外国籍です。各国政府においても、自国の外航海運(船会社)が国にとって不可欠な産業であるとの認識のもと、国際競争力向上のためのさまざまな措置を講じています。

※川崎汽船、商船三井、日本郵船の定期コンテナ船事業統合会社(オーシャン ネットワーク エクスプレス)を含む。

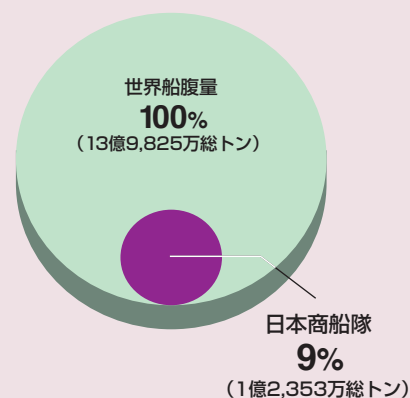
1 成長産業である海運

世界の海上輸送量は右肩上がり増加。船腹量も海上輸送量に比例し増加しており、海運が成長産業であることを示しています。



2 世界経済に貢献

日本商船隊の船腹量は世界全体の約9%。日本は海運国として世界経済に貢献しています。

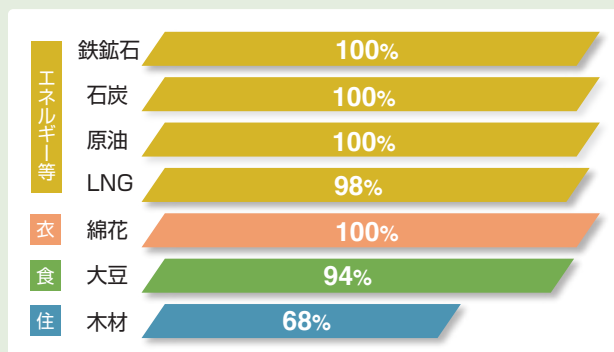


世界船腹量に占める日本商船隊の割合



3 海外物資に頼るわが国の生活と産業

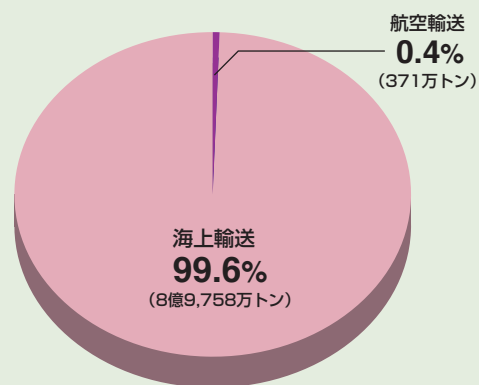
資源に乏しい日本は、「衣食住」のもととなる原材料のほとんどを海外から船で輸入しています。



主な資源の対外依存度

4 輸出入のほとんどが海上輸送

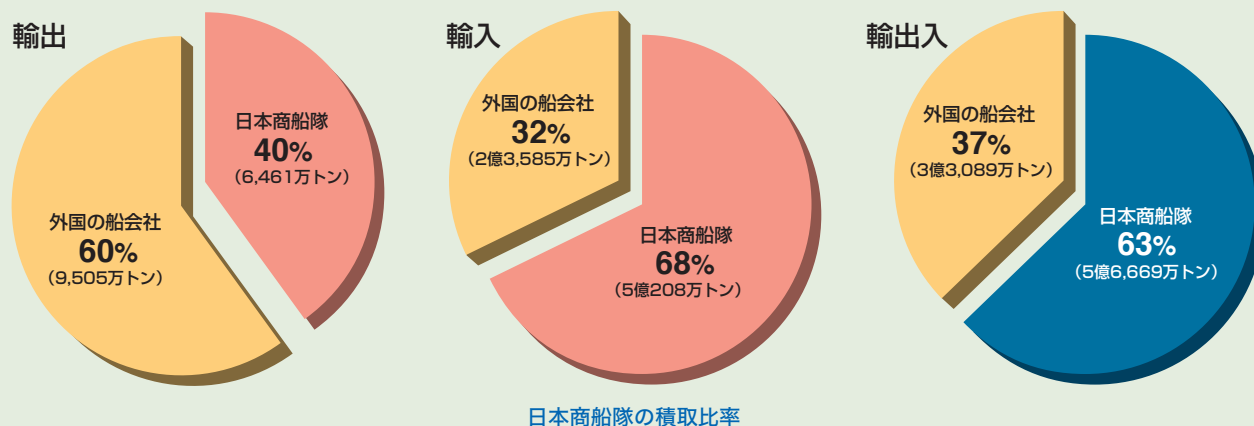
日本の輸出入のほぼ 100% を海上輸送が担っています。



日本の貿易量における海上輸送の割合

5 輸出入貨物の約6割を輸送

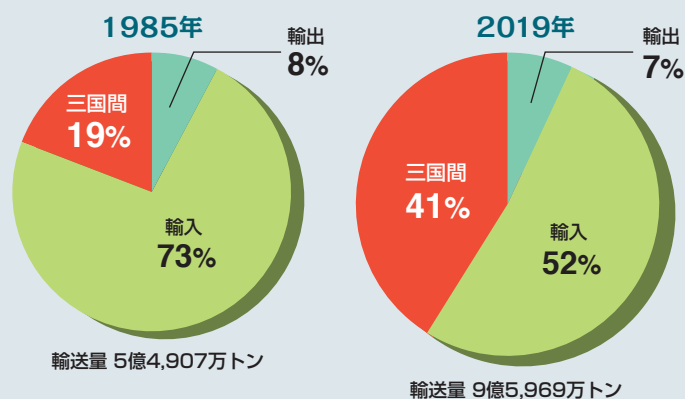
日本の輸出入貨物の約6割を日本商船隊が輸送。この割合は「積取比率」と呼ばれています。



日本商船隊の積取比率

6 海外の日本企業をバックアップ

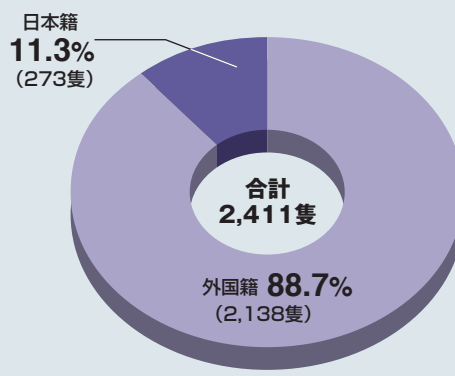
日本商船隊による三国間輸送の割合が増加。海外進出している日本企業をバックアップしているのです。



日本商船隊の輸送割合

7 約90%が外国籍の船

日本商船隊は2,411隻。その国籍は、パナマなどの外国籍がほとんどで、日本籍はわずか11.3%です。



日本商船隊の国籍

外航海運Ⅱ

船は世界中の海を航行します。台風などの悪天候にあうこともあれば、武装した海賊に襲われる危険もあります。しかし船会社にとって船舶と船員の安全は絶対です。船会社は航行安全のためのさまざまな取り組みを行っています。

船を運航する船員は専門技術が必要な職業です。船長、機関長をはじめさまざまな役割を担った船員が協力し、24時間365日、安全運航に努めています。

船は航行する際、他の輸送モードと同様、環境に悪影響を与える物質を排出します。また、いったん事故が起これば甚大な海洋汚染を引き起こす可能性もあります。このため海洋・地球環境保全あるいは、航行安全や船員の資格などの国際ルールがIMOという国連の機関において決められています。船会社でも独自に省エネなどの最新技術を取り入れるため造船会社などと協力して開発に取り組んでいます。

航行安全

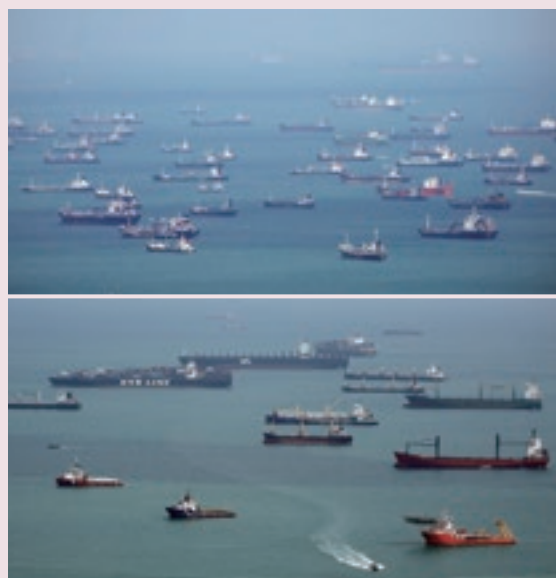
1 頻発する海賊

東南アジアやアフリカなどの海で海賊が発生しています。このため世界各国が協力して、船を海賊から守るための対策を進めています。日本の自衛隊や海上保安庁も活躍しています。



2 混雑する海域

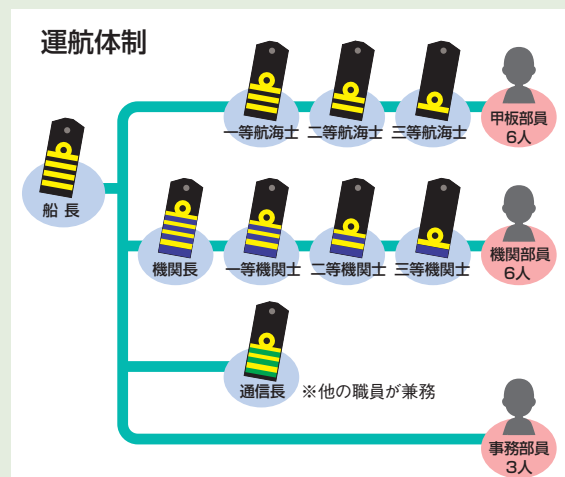
マラッカ・シンガポール海峡はさまざまな貨物船が行き交う国際的な海上交通路で、日本に向かう原油タンカーの9割近くが通過していることから“日本の生命線”とも言われています。しかし、狭くて浅いため航行可能な場所が限られるという難点があり、常に混雑しています。船会社はこのような海域でも安全に航行できるよう、さまざまな対策に取り組んでいます。



外航船員

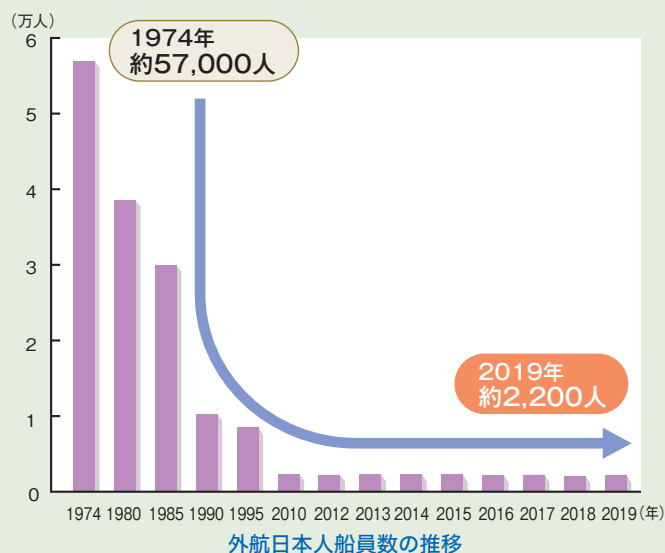
3 外航船の運航体制

外航船は、船長、機関長をはじめとする「職員」と呼ばれる船員と、職員をサポートする「部員」と呼ばれる船員が協力して24時間体制(4時間ごとの3交代制)で運航されています。全長400mにもなる大型コンテナ船でも乗組員はわずか22～24人程度です。



4 日本経済を支える外航船員の数

外航船に乗り組む日本人船員は1974年をピークに減少しています。現在、日本の船会社が運航する船(日本商船隊)の乗組員は推定6万人ですが、ほとんどが外国人で一番多いのはフィリピン人船員です。



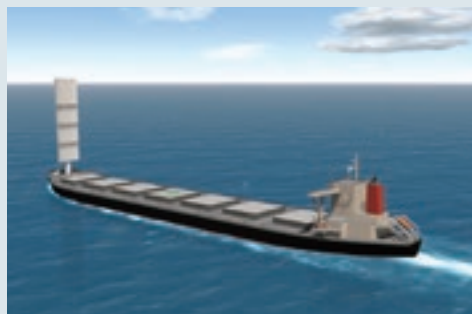
環境保全

5 エコへの取り組み

日本の船会社では、船からのCO₂排出量を一層削減するために、最先端の省エネ技術を取り入れたエコシップと呼ばれる船の導入などに取り組んでいます。



自動カイトシステムを本船船首部に搭載し、一定条件の風力・風向の下、ブリッジ(船橋)からの操作で展張し、風力を利用して本船の推進力を補助。同船型において20%以上のCO₂排出量削減効果があり、1隻あたり年間5,200トンものCO₂削減が期待。



巨大な硬翼帆を開発し風力エネルギーを最大限に取り込むことによって、大型商船の燃料消費を大幅に低減させ、船舶からのCO₂排出削減と将来の燃料費の高騰に対処するための次世代帆船。2022年の運航開始を目指す。



LNG(液化天然ガス)を主燃料とする自動車専用船。
従来の重油焚き機関と比べ硫黄酸化物(SOx)は約99%、窒素酸化物(NOx)は約86%の排出削減が見込まれる。
1隻目は2020年秋の運航開始予定。

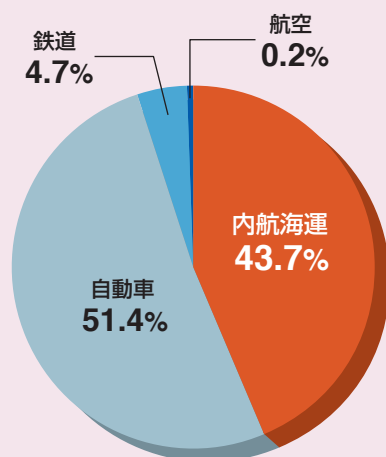
内航海運

国内の貨物輸送というとトラックや鉄道が思い浮かぶと思いますが、島国である日本では古くから船が使われています。内航海運は、国内貨物輸送の約4割、特に石油製品、鉄鋼、セメントなど産業に不可欠な物資については8割以上を輸送し、国内における大量・長距離輸送の担い手として活躍しています。

近年、少子高齢化によるトラックドライバー不足が、わが国の産業活動に影響を及ぼしつつあり、内航海運の更なる活躍も期待されています。

1 国内貨物の約4割を担う内航海運

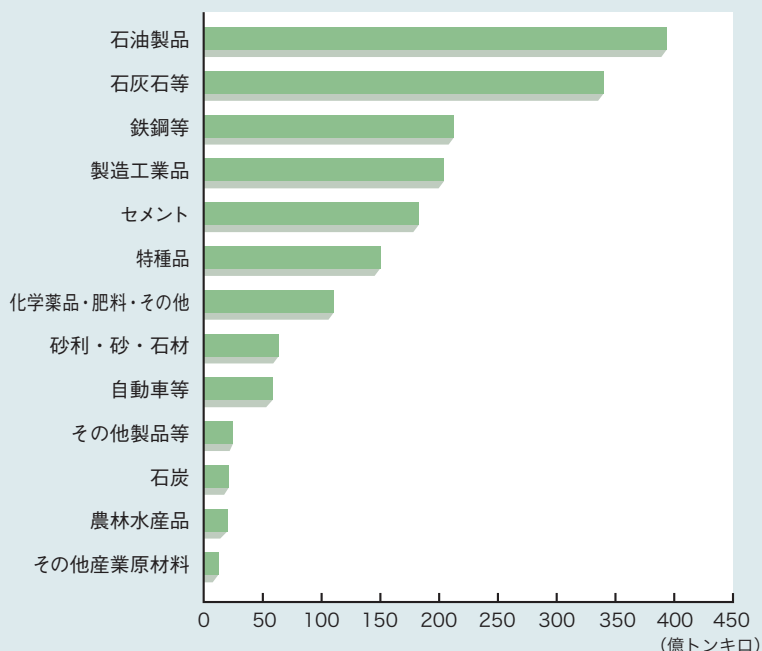
船(内航海運)のシェアは、輸送活動量(輸送量に移動距離をかけたもの。輸送トンキロと呼ばれる)では44%にも及んでいます。



輸送機関別の輸送割合

2 生活や産業に必要な物資を輸送

船(内航海運)が輸送している貨物は、多い順に石油製品、石灰石等、鉄鋼等、製造工業品、セメントなどとなっています。



船の品目別輸送活動量



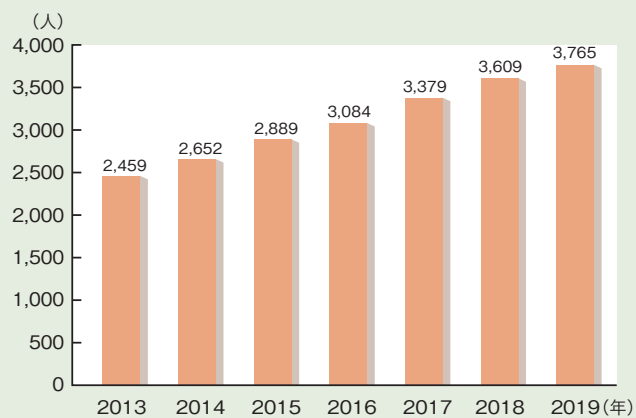
3 高まる内航海運への期待

東日本大震災では、鉄道やトラック輸送に障害が出る中、タンカーやRORO船などの内航船が、緊急・支援物資を被災地に輸送しました。こうした内航海運の活躍が評価され、災害時などの物流インフラとして再認識されるとともに、内航海運の重要性に対する国民の認識も広がっています。

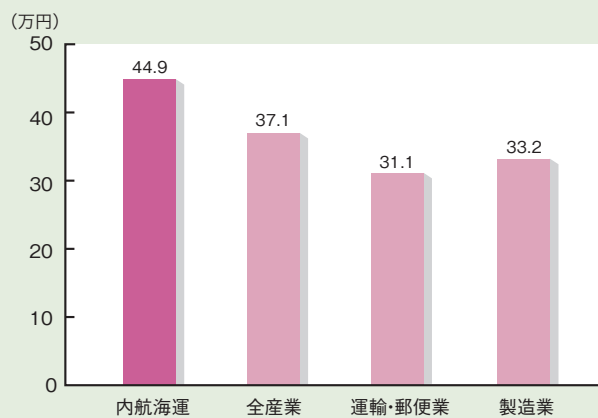


4 内航船員

内航海運は若い人を求めています。この5年間で30歳未満の船員が3割以上増えています。さらに、賃金も陸上産業に比べ2割程度高く、魅力ある職場環境づくりに努めています。



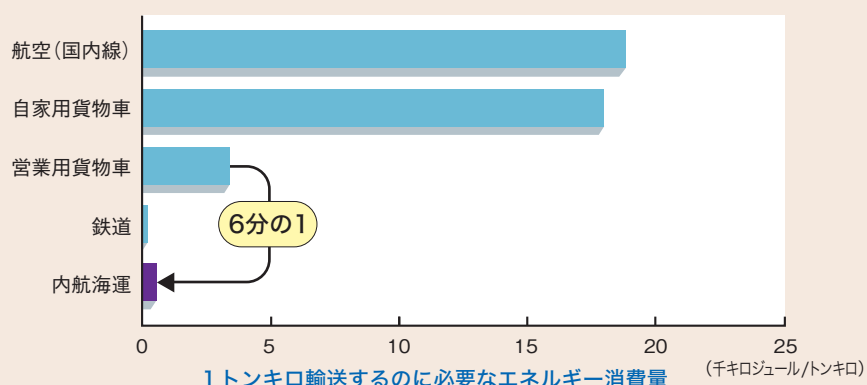
30歳未満の船員数の推移



賃金の比較

5 環境にやさしい内航海運

内航海運の船は1トンの貨物を1km運ぶのに必要なエネルギー消費量が他の輸送機関より少なく、エネルギー効率のよい輸送機関として期待されています。



1トンキロ輸送するのに必要なエネルギー消費量

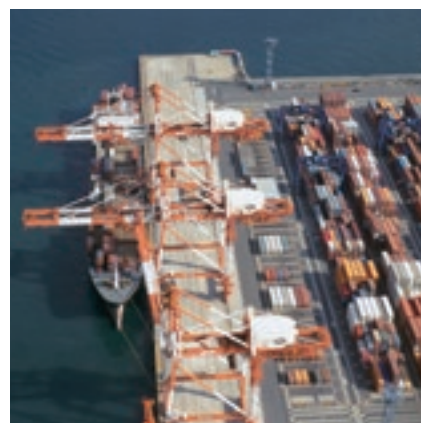


海事クラスター

船会社が船を建造し運航すると、造船会社をはじめさまざまな産業が直接、間接的に関係します。このように関係する産業群のことを、ぶどうの房(クラスター)が隣り合って密集していることになぞらえて産業クラスターといい、特に

船会社関連の産業群は「海事クラスター」と呼ばれています。

海運大国であり造船大国でもあるわが国の海事クラスターの売上高や従業員の規模は大きく、日本全体に与える影響が大きいことがわかっています。



世界各国からの物資を輸出入する船を運航する船会社とその玄関口の港湾は海事クラスターの中核的産業

■ 海事産業 (中核的産業) ■ 海事産業 (中核的海事産業以外) ■ 海事産業の隣接産業



最新鋭の技術力を持つわが国の造船会社もその一つ



高品質の船の機器を開発・製造し、わが国の海事産業を支える船用工業

海事クラスターに関するデータ P51

出典

外航海運Ⅰ ① 船腹量：IHS「WORLD FLEET STATISTICS」(1995年以降)・Lloyd's Register of Shipping「STATISTICAL TABLES」各年版(1990年以前)、海上輸送量：Clarksons「SHIPPING REVIEW DATABASE」(1990年以降)・Fearnleys「REVIEW」各年版(1985年) ② IHS「WORLD FLEET STATISTICS」、国土交通省海事局(2019年の数値) ③ 平成30年度「食料需給表」、平成30年「木材需給表」、「エネルギー白書2020」、「鉄鋼統計要覧」2019年版、帝国書院HP統計資料(石炭・原油・LNGは2018年度、木材は2018年、鉄鉱石は2017年、大豆は2018年度、綿花は2014年の数値) ④ 国土交通省海事局、財務省貿易統計(2019年の数値) ⑤、⑥、⑦ 国土交通省海事局(2019年の数値)

外航海運Ⅱ ④ 国土交通省海事局

内航海運 ① 国土交通省海事局(2018年度の数値) ② 国土交通省「内航船舶輸送統計年報」(2018年度の数値) ④ 国土交通省海事局、国土交通省「船員労働統計」 ⑤ 国土交通省海事局(2018年度の数値)

(注)各グラフの数値は、端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

画像提供 (50音順)

海上自衛隊、海上保安庁、川崎汽船(株)、(株)神田造船所、近海郵船(株)、栗林商船(株)、(株)商船三井、日鉄物流(株)、トヨフジ海運(株)、ナカシマプロペラ(株)、日本財団、日本郵船(株)

SHIPPING NOW

データ編

外航海運Ⅰ

～世界の海運～

- ① 世界の主要品目別海上輸送量と船腹量の推移 P20
- ② 世界の国別・船種別船腹量 P21
- ③ アジア各国の支配船腹量 P21
- ④ 世界の商船建造量 P22
- ⑤ 世界の船舶解撤量 P22
- ⑥ 海運市況 P23

～わが国の暮らしと輸入依存率～

- ① 主な資源の対外依存度 P24
- ② 食料自給率の推移 P25
- ③ 国産材・外材別の木材需要（供給）量（丸太換算） P25

～日本の海運～

- ① 世界の国別保有船腹量 P26
- ② わが国の貿易に占める海上貨物の割合 P26
- ③ わが国の品目別海上貿易量及び貿易額 P27
- ④ 世界におけるわが国の荷動き量、GDPシェアの推移 P27
- ⑤ 日本商船隊の積取比率の推移 P28
- ⑥ 日本商船隊の輸送量推移 P29
- ⑦ 日本商船隊の運賃収入の推移 P29
- ⑧ 日本商船隊の構成の変化 P30
- ⑨ 日本商船隊の船籍国 P31
- ⑩ 日本商船隊の保有形態 P31
- ⑪ 外航海運のドル建て比率と
他産業の海外売上比率の比較 P32
- ⑫ 対米ドルレート為替相場の推移 P32
- ⑬ わが国外航海運大手企業の再編の流れ P33

～定期航路～

- ① 世界主要港2018年コンテナ取扱量 P34
- ② 世界主要港コンテナ取扱量の推移 P34
- ③ 世界のコンテナの荷動き（推計） P35
- ④ わが国の海上貿易量の内訳 P35
- ⑤ フルコンテナ船運航船腹量上位20社 P36～37
- ⑥ 大手コンテナ船社の主なM&A等の動き（暦年順） P36～37
- ⑦ 大手コンテナ船社の主なM&A等の動き
（企業グループ別フローチャート） P38～39
- ⑧ コンテナ船社のアライアンスの変遷 P40～41
- ⑨ アジア各国の世界に占めるコンテナ取扱量のシェア P42
- ⑩ コンテナ取扱量の上位を占めるアジアの港湾 P42

外航海運Ⅱ

～航行安全と環境保全～

- ① 最近の海賊等事案の発生状況 P43
- ② 世界全体のCO₂排出量に占める
外航海運によるCO₂排出量の割合 P43
- ③ 国際海運における環境規制の動向 P44
- ④ わが国海運の環境問題とSDGs P44

～外航船員～

- ① 外航日本人船員数の推移 P45

内航海運

～内航海運の活動～

- ① 輸送機関別国内貨物輸送量及び輸送分担率の推移 P46
- ② 主要品目別内航貨物輸送量の推移 P46
- ③ 船種別内航船腹量の推移 P47
- ④ 内航船の隻数の推移と船舶の大型化の傾向 P47
- ⑤ 船型別状況 P48
- ⑥ 船齢別状況 P48
- ⑦ 内航海運事業者数 P49
- ⑧ 登録事業者数の推移 P49

～内航船員～

- ① 内航船員数の推移 P50
- ② 内航船員の年齢構成 P50

海事クラスター

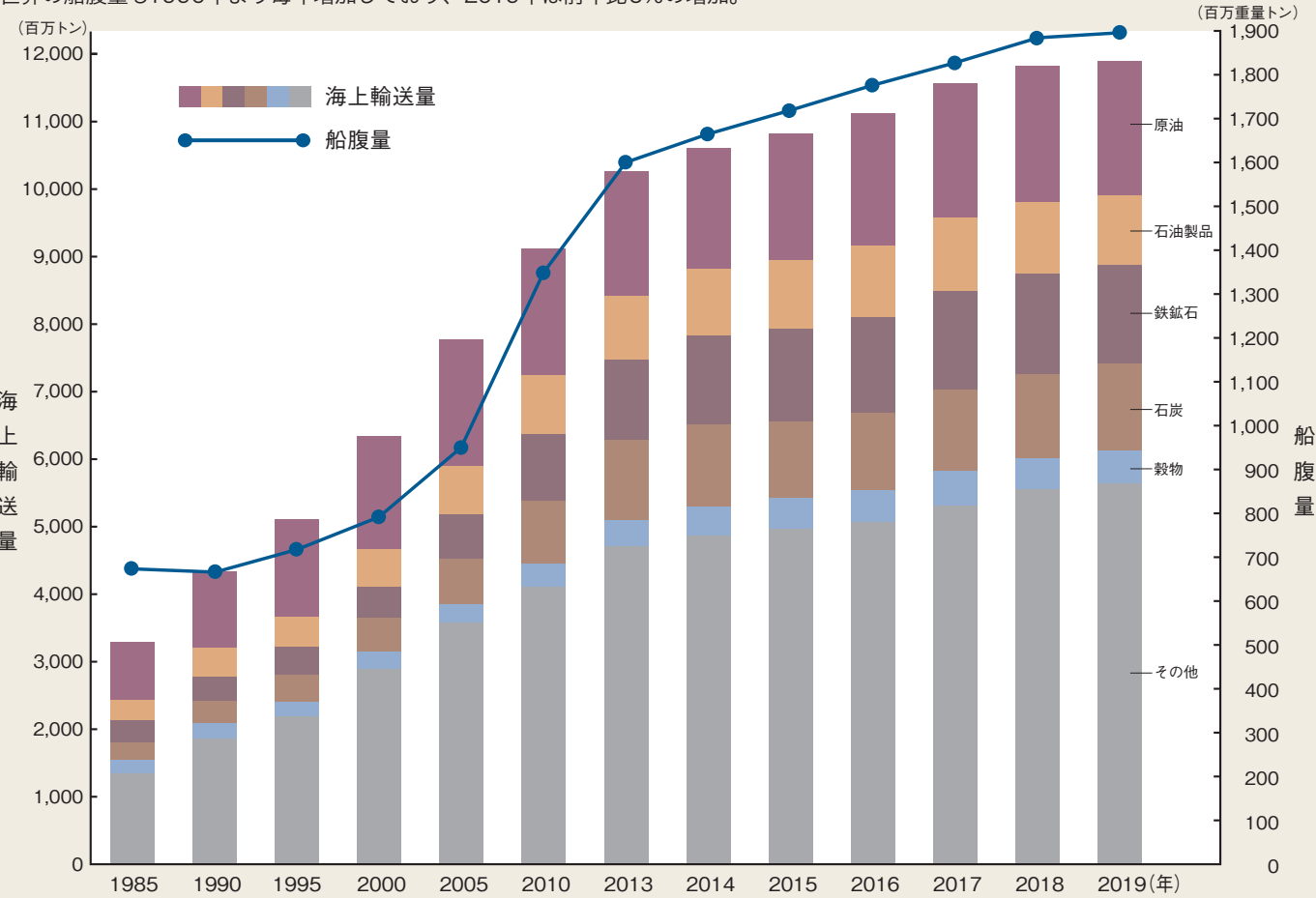
- ① わが国海事クラスターの構成 P51
- ② わが国海事クラスターの規模 P51

日本の外航海運の歴史 P52～59



1 世界の主要品目別海上輸送量と船腹量の推移

世界の海上輸送量は、1985年より右肩上がりが続いており、2019年は前年比0.6%の増加。
世界の船腹量も1990年より毎年増加しており、2019年は前年比5%の増加。



2019年において世界の主要品目別海上輸送量は、石油25.4%を占め、鉄鉱石12.2%、石炭10.9%、穀物4%となっている。
近年ではコンテナ貨物を含むその他貨物の割合が増加し、2019年では47.5%を占める。

出典：Clarksons「SHIPPING REVIEW DATABASE」、IHS「WORLD FLEET STATISTICS」、
Lloyd's Register of Shipping「STATISTICAL TABLES」、Fearnleys「REVIEW」

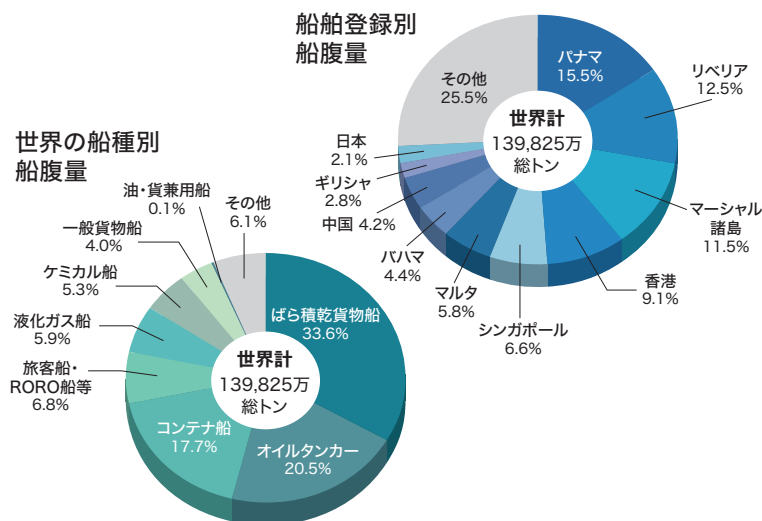
世界の主要品目別海上輸送量 (百万トン)									船腹量 (百万重量トン)
年	石 油			鉄 鉱 石	石 炭	穀 物	その他	合 計	合 計
	原 油	石油製品	計						
1985	871	288	1,159	321	272	181	1,360	3,293	674
1990	1,133	415	1,548	356	331	195	1,855	4,286	667
1995	1,455	445	1,900	404	402	193	2,198	5,097	718
2000	1,676	562	2,238	447	509	230	2,881	6,305	792
2005	1,880	706	2,586	660	671	248	3,557	7,722	951
2010	1,876	868	2,744	990	926	319	4,087	9,066	1,349
2013	1,824	944	2,767	1,188	1,183	363	4,649	10,150	1,607
2014	1,793	935	2,728	1,340	1,217	409	4,798	10,492	1,665
2015	1,858	1,002	2,860	1,364	1,137	430	4,921	10,712	1,718
2016	1,938	1,048	2,987	1,418	1,141	450	5,044	11,040	1,772
2017	2,004	1,061	3,065	1,473	1,201	476	5,284	11,499	1,828
2018	2,014	1,073	3,087	1,477	1,263	475	5,512	11,814	1,883
2019	1,995	1,024	3,019	1,455	1,291	477	5,645	11,887	1,979

(注) ①海上輸送量について1985年はFearnleys「REVIEW」各年版。 ②1990年までの船腹量については、Lloyd's Register of Shipping「STATISTICAL TABLES」各年版による
年央値であり、1995年以降はIHS「WORLD FLEET STATISTICS」による年末値である。 ③1995年以降の船腹量は、漁船等を除いた値である。 ④端数処理のため、末尾の
数字が合わない場合がある。

2 世界の国別・船種別船腹量

世界の船舶登録国別船腹量はパナマ、リベリア、マーシャル諸島等が上位を占める。船種別では、ばら積乾貨物船、オイルタンカー、コンテナ船の順となっている。

出典：IHS「WORLD FLEET STATISTICS」



世界の船種別船腹量（順位）（注）2019年末の数値。

順位	船種別	万総トン	構成比 (%)
	世界合計	139,825	100.0
1	ばら積乾貨物船	47,039	33.6
2	オイルタンカー	28,689	20.5
3	コンテナ船	24,690	17.7
4	旅客船・RORO船等	9,549	6.8
5	液化ガス船	8,229	5.9
6	ケミカル船	7,391	5.3
7	一般貨物船	5,566	4.0
8	油・貨兼用船	100	0.1
	その他	8,572	6.1

船舶登録別船腹量（順位）

順位	国別	隻数	万総トン	国別保有割合 (%)
	世界合計	121,368	139,825	100.0
1	パナマ	8,089	21,619	15.5
2	リベリア	3,754	17,484	12.5
3	マーシャル諸島	3,710	16,127	11.5
4	香港	2,590	12,760	9.1
5	シンガポール	3,267	9,249	6.6
6	マルタ	2,197	8,091	5.8
7	バハマ	1,336	6,092	4.4
8	中国	6,541	5,840	4.2
9	ギリシャ	1,356	3,958	2.8
10	日本	5,346	2,959	2.1
11	キプロス	1,053	2,330	1.7
12	デンマーク	629	2,131	1.5
13	インドネシア	9,547	1,908	1.4
14	ノルウェー	674	1,702	1.2
15	ポルトガル	542	1,553	1.1
16	イタリア	1,461	1,467	1.0
17	マン島	341	1,443	1.0
18	米国	5,747	1,212	0.9
19	韓国	3,036	1,166	0.8
20	イラン	1,072	1,110	0.8
	その他	59,080	19,624	14.0

（注）①中国には、香港及び台湾を含まない。
 ②各国の海外自治領、第二船籍制度については本国の船籍に含めた。
 ③2019年末の数値。
 ④端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

3 アジア各国の支配船腹量

アジア主要国の船会社が運航する船の船腹量が世界の43.4%を占め、その中でも、日本、中国の割合が50.7%を占める。

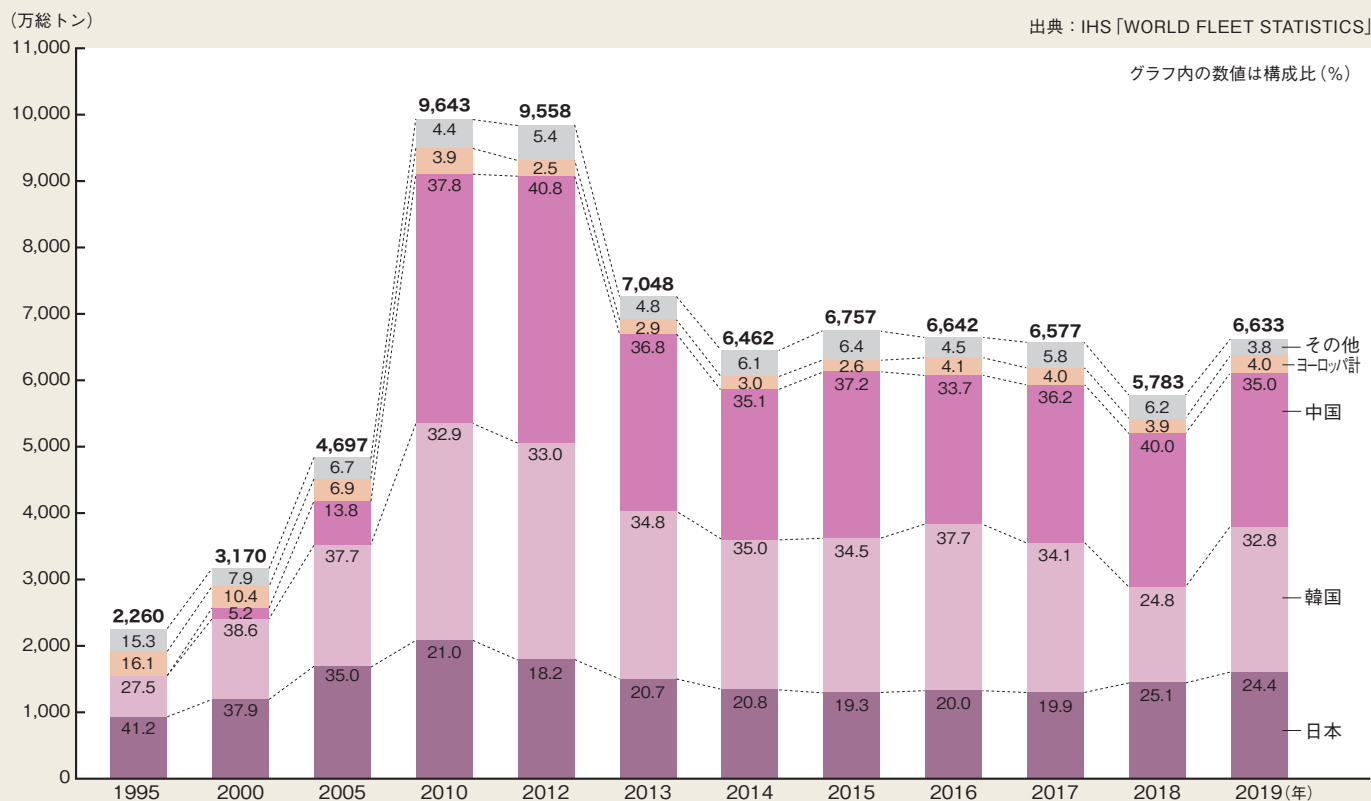
出典：UNCTAD「REVIEW OF MARITIME TRANSPORT」（注）2019年1月の数値。

		隻 数	船腹量 (千載貨重量トン)			外国籍船割合 (%)	世界シェア (%)	アジア主要国 シェア (%)
			自国籍船	外国籍船	合 計			
アジア主要国	日本	3,822	35,532	189,589	225,121	84.22	11.5	50.7
	中国	6,125	90,930	115,371	206,301	55.92	10.5	
	韓国	1,647	12,419	64,283	76,702	83.81	3.9	49.3
	香港	1,628	72,311	25,817	98,128	26.31	5.0	
	シンガポール	2,727	71,287	50,199	121,486	41.32	6.2	
	台湾	1,005	5,651	45,440	51,091	88.94	2.6	
	マレーシア	599	6,284	2,449	8,732	28.05	0.4	
	インド	1,019	16,602	8,257	24,859	33.22	1.3	
	インドネシア	2,145	20,768	1,527	22,295	6.85	1.1	
	ベトナム	1,020	7,737	1,897	9,633	19.69	0.5	
	タイ	406	5,037	1,827	6,864	26.62	0.3	
	アジア主要国合計		22,143	344,558	506,656	851,212	59.52	43.4
アジア主要国以外		29,541	197,540	913,828	1,111,370	82.23	56.6	
世界合計		51,684	542,098	1,420,484	1,962,582	72.38	100.0	

（注）対象船舶は千総トン以上の船舶である。

4 世界の商船建造量

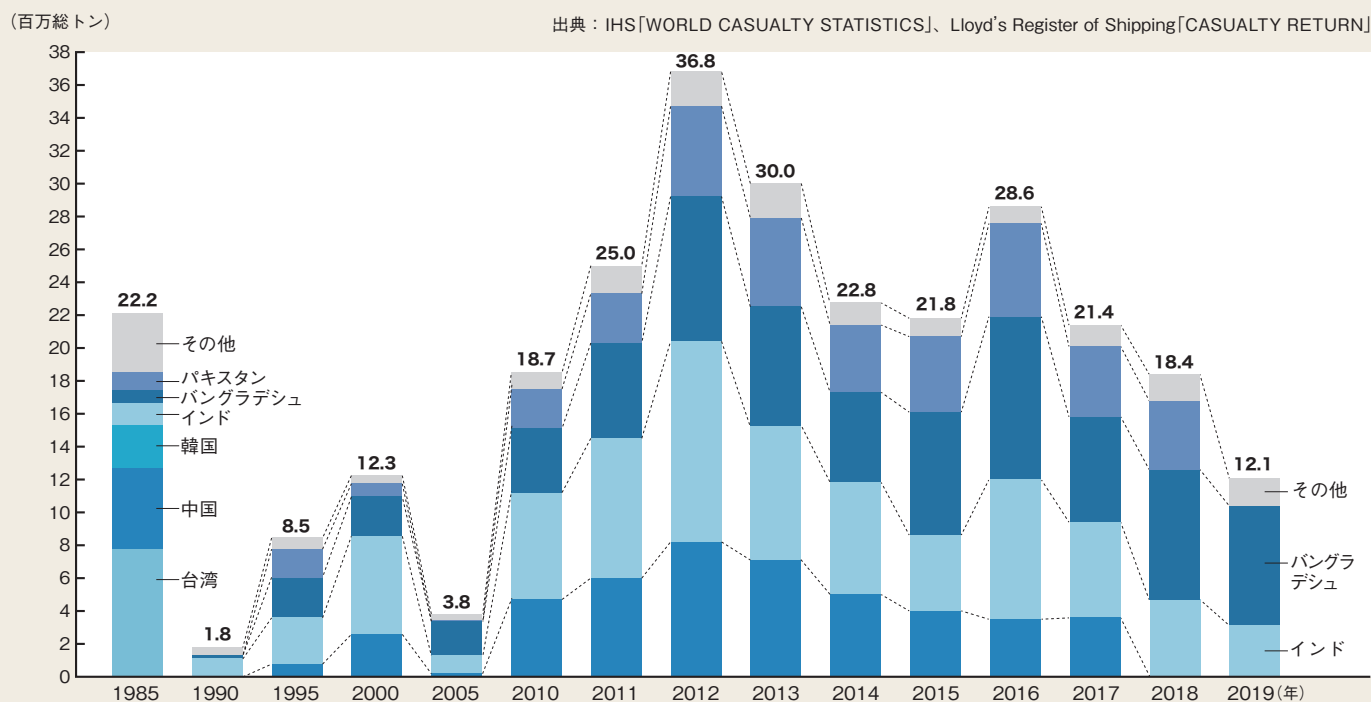
2019年の日本の商船建造量は1,621万総トン。日本と韓国、中国が世界の約9割を占める三大造船国となっている。



(注) ① ヨーロッパ内の主要造船国は、ルーマニア、ドイツ、フランス、イタリア等。2011年以降、ヨーロッパは34カ国で算出。
 ② その他に含まれる主要造船国は、台湾、インド等。
 ③ 1995年の中国建造量は、その他に含む。

5 世界の船舶解撤量

2019年の世界の船舶解撤量は1,212万総トン。国別では、インド、バングラデシュが多く、この2カ国で86%を占めている。



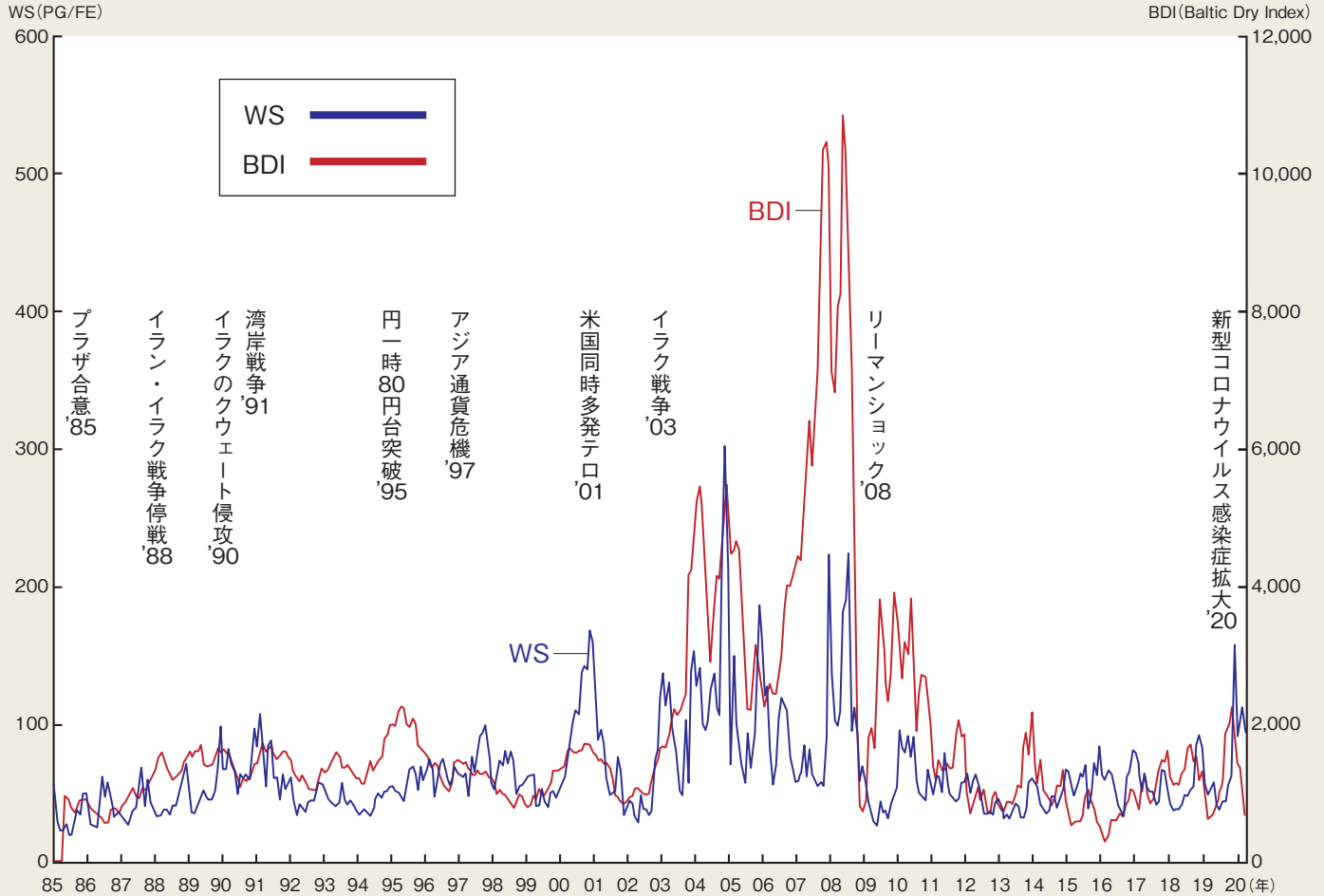
(注) データについて「CASUALTY RETURN」各年版(1993年以前)、「WORLD CASUALTY STATISTICS」(1994年以降)の数値。

6 海運市況

不定期船市況は2017年から18年にかけて回復基調にあったが、18年秋以降はケープサイズ市況の不安定化もあり、19年初めまで下落傾向がみられた。その後19年秋にかけて市況は改善し、9月にはBDIが約9年ぶりに2,500を超えたものの、20年に入ると新型コロナウイルス感染症の拡大の影響により411まで急落した。2018年におけるBDIの平均は1,348であったが、2019年は1,341であった。一方、2019年のタンカー市況は中東情勢の緊迫等で、乱高下を繰り返した。

出典：TRAMP Data Service「WORLD MARITIME ANALYSIS」

作成：(公財)日本海事センター



(注) ①BDI (The Baltic Exchange) 及びWS (中東／極東) は、TRAMP Data Service集積資料による。

②BDI (Baltic Dry Index) : 乾貨物の海上輸送運賃指数 (総合指数、1985年1月を基準 (=1,000))

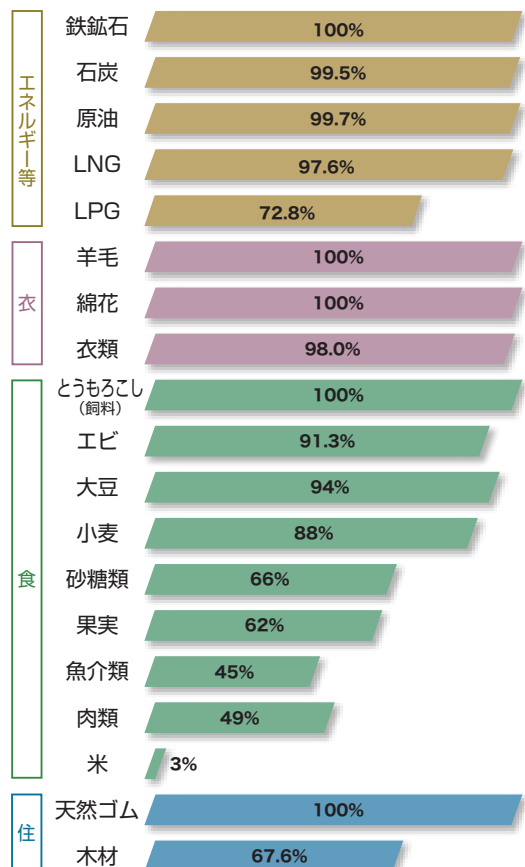
The Baltic Exchangeが毎営業日に、ドライマーケットの成約情報を1985年以来、一定の基準で継続発表している指数であり、乾貨物運賃の変動推移を示している。

③WS (World Scale Rate) はVLCC (24万D/W)、積地は中東、揚地は極東。

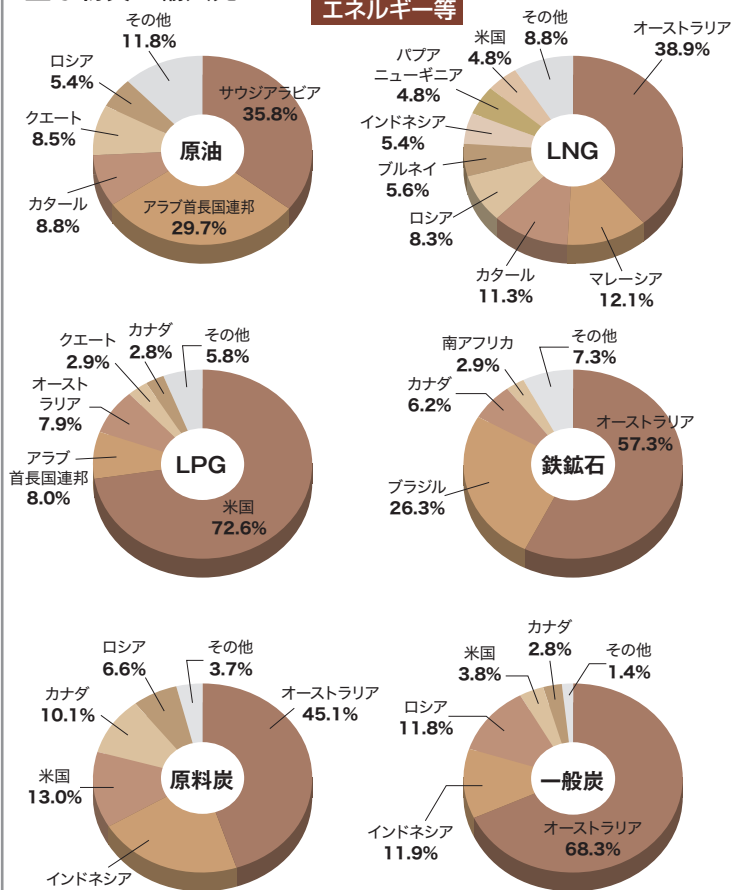
1 主な資源の対外依存度

わが国は衣食住の面で欠くことのできない多くの資源を輸入に頼っている。エネルギー資源である原油は中東諸国から(8割以上)、石炭はオーストラリアから(約7割)、LNGはオーストラリア、マレーシア、カタールからの輸入が多い。工業原料である鉄鉱石、原料炭はオーストラリアからの輸入が多い。

主な物資の対外依存度



主な物資の輸入先

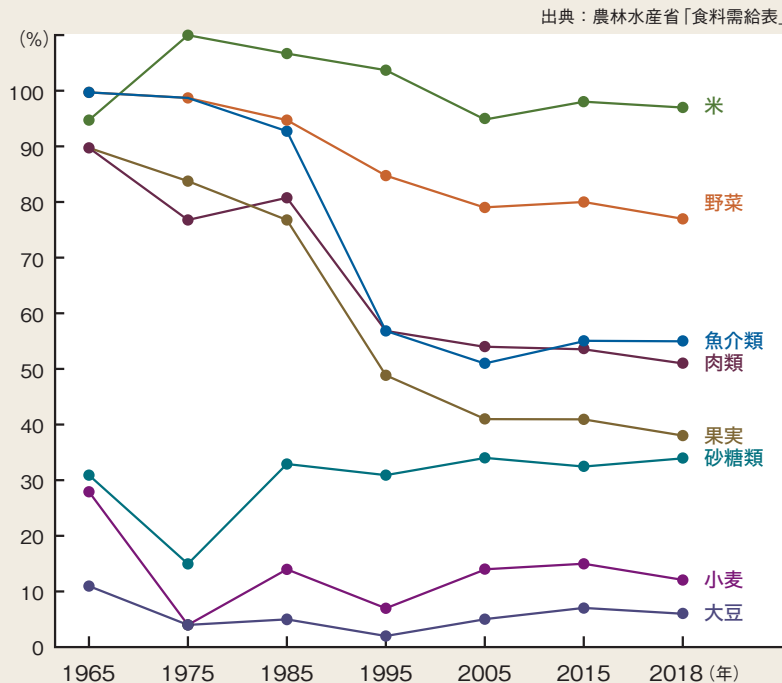


出典：平成30年度「食料需給表」、平成30年「木材需給表」、
「エネルギー白書2020」、「鉄鋼統計要覧」2019年版、
帝国書院HP統計資料、「日本のアパレル市場と輸入品概況2020」
(以上、対外依存度)
財務省貿易統計、「森林・林業白書」令和元年版(以上、輸入先)

(注) ①とうもろこし(飼料)・大豆・小麦・砂糖類・果実・魚介類・肉類・米・木材については
2018年度の数値(概算)。
②原油・LNG・LPG・石炭は2018年度、鉄鉱石・エビ・天然ゴムは2017年、羊毛・綿花は
2014年の数値。
③衣類は2019年の輸入浸透率。
④輸入先について、木材は2018年のデータ。他は2019年のデータ。

2 食料自給率の推移

米を始めとする主食用穀物を除き、食料自給率は1960年代より減少傾向だったが、近年では横ばい傾向である。



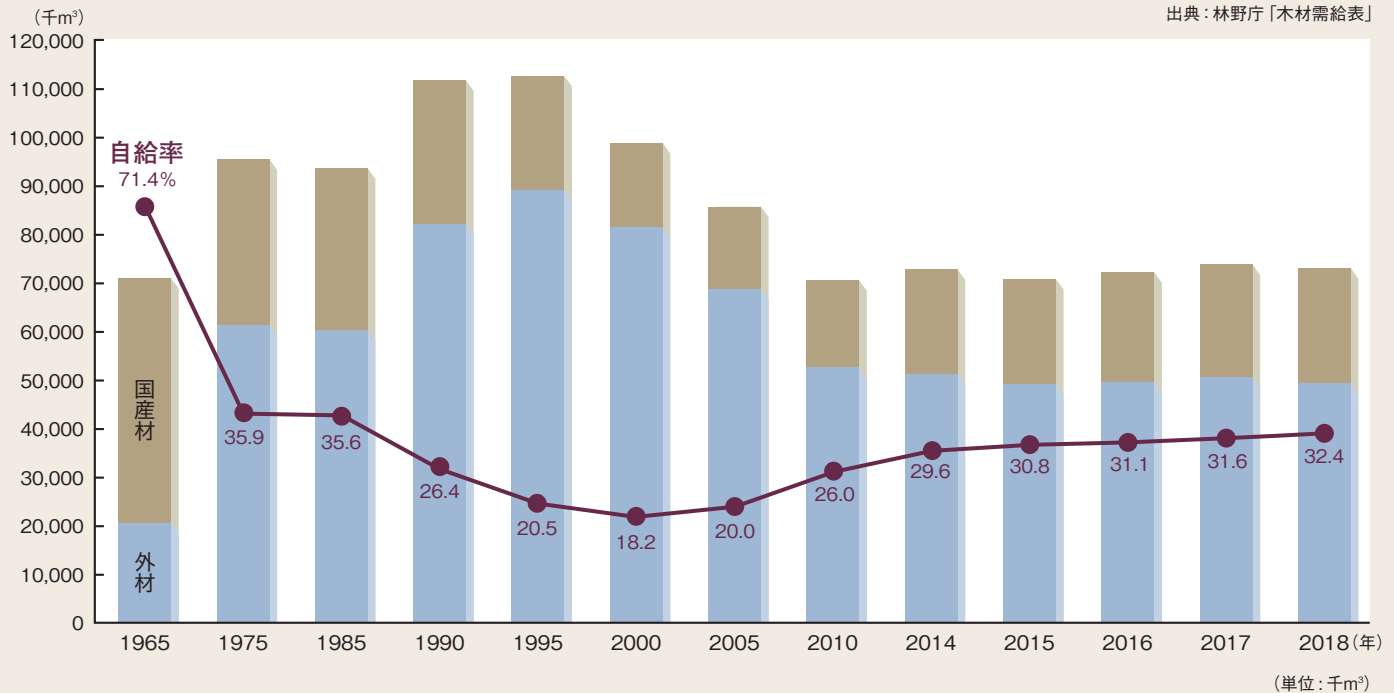
(単位：%)

年度	1965	1975	1985	1995	2005	2015	2018
米	95	110	107	104	95	98	97
小麦	28	4	14	7	14	15	12
大豆	11	4	5	2	5	7	6
野菜	100	99	95	85	79	80	77
果実	90	84	77	49	41	41	38
肉類	90	77	81	57	54	54	51
魚介類	100	99	93	57	51	55	55
砂糖類	31	15	33	31	34	33	34

(注)2018年度数値は概算値。

3 国産材・外材別の木材需要(供給)量(丸太換算)

木材自給率は、1965年には71.4%であったが、1975年までに大きく減少し、2000年には18.2%にまで落ち込んだ。2000年以降は緩やかに増加し、2018年には32.4%となった。



(単位：千m³)

年	1965	1975	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2014	2015	2016	2017	2018
合計	70,530	96,369	92,901	111,162	111,922	99,263	85,857	70,253	72,547	70,883	71,941	73,742	73,184
国産材	50,375	34,577	33,074	29,369	22,916	18,022	17,176	18,236	21,492	21,797	22,355	23,312	23,680
外材	20,155	61,792	59,827	81,793	89,006	81,241	68,681	52,018	51,054	49,086	49,586	50,430	49,505
自給率(%)	71.4	35.9	35.6	26.4	20.5	18.2	20.0	26.0	29.6	30.8	31.1	31.6	32.4

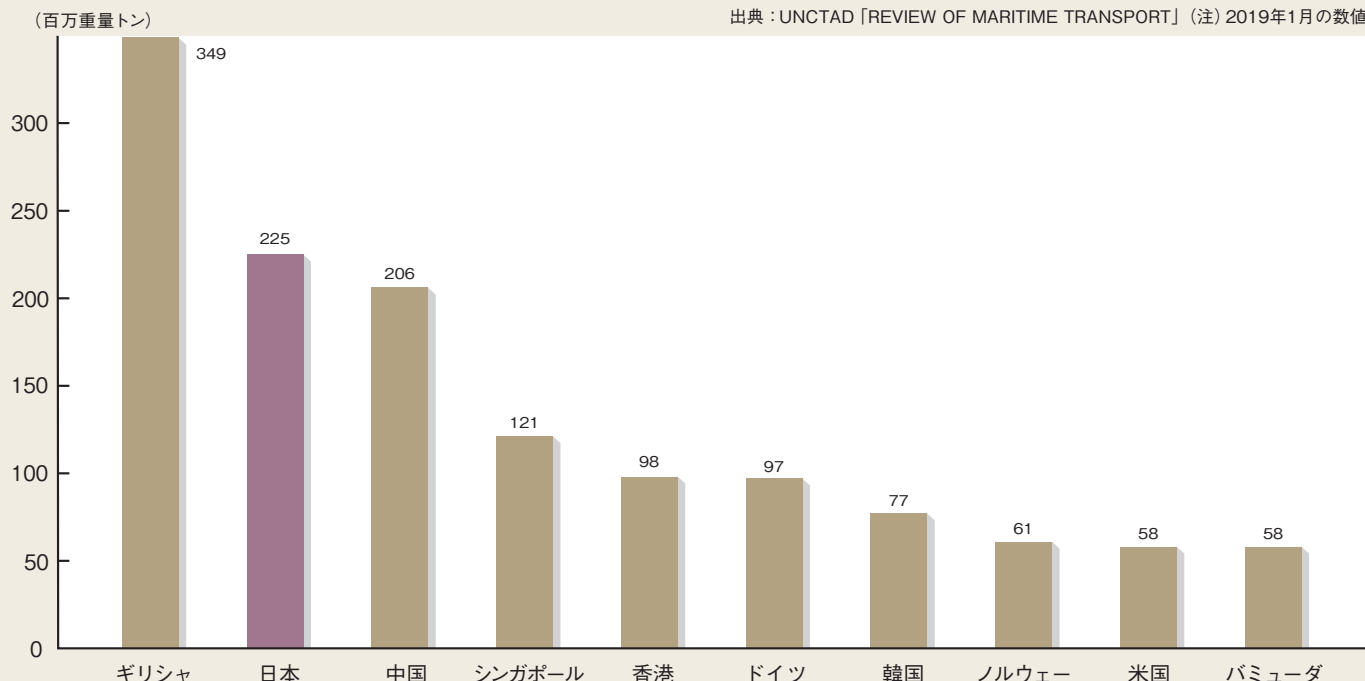
(注) 端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

1 世界の国別保有船腹量

日本の船会社が実質保有する船腹量は、ギリシャに次いで世界第2位の規模である。中国は2017年と比べると約25%増加している。

※日本の船会社が保有する日本籍船及び海外子会社が保有する外国籍船の合計。

出典：UNCTAD「REVIEW OF MARITIME TRANSPORT」(注) 2019年1月の数値。

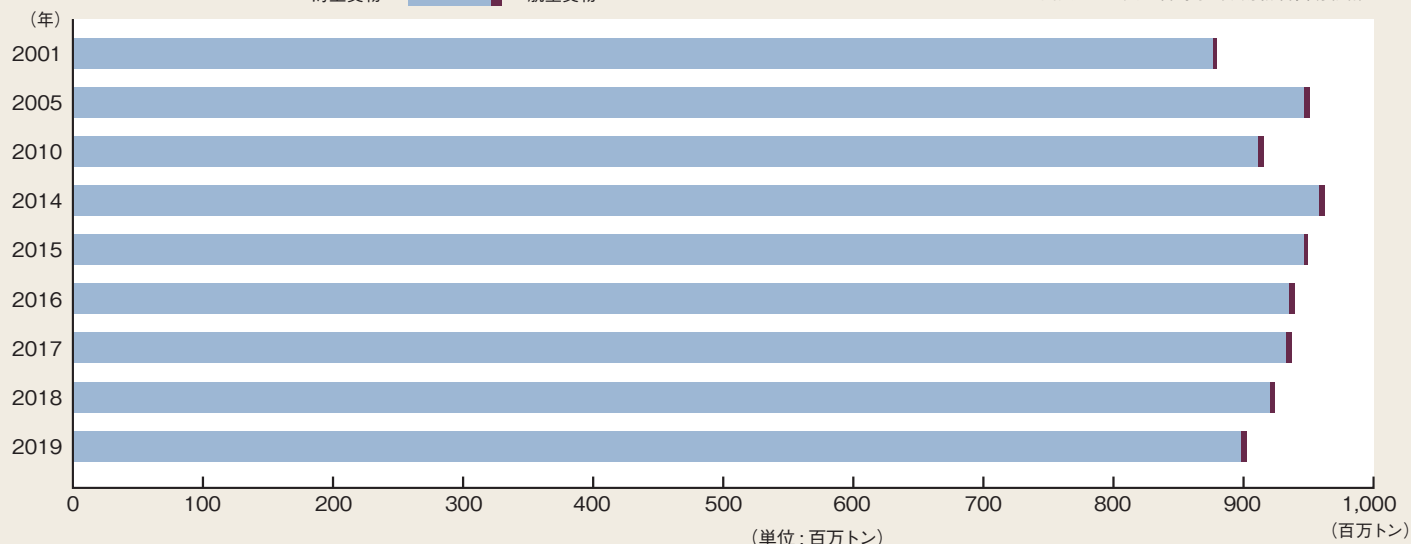


2 わが国の貿易に占める海上貨物の割合

わが国の貿易に占める海上貨物(海運)の割合(トン数ベース)は輸出入合計で2019年時点で99.6%。海運はわが国の貿易に不可欠な輸送手段となっている。

海上貨物 — 航空貨物

出典：国土交通省海事局、財務省貿易統計



年	輸 出		輸 入		輸出入合計	
	総量	海上貨物量 (%)	総量	海上貨物量 (%)	総量	海上貨物量 (%)
2001	108	107 (99.0)	775	773 (99.8)	883	880 (99.7)
2005	136	134 (98.8)	817	816 (99.8)	953	950 (99.6)
2010	158	156 (99.0)	761	759 (99.8)	919	915 (99.6)
2014	165	163 (99.0)	797	795 (99.8)	962	959 (99.6)
2015	171	169 (99.0)	780	778 (99.8)	950	947 (99.6)
2016	169	168 (99.0)	769	768 (99.8)	939	935 (99.6)
2017	167	165 (98.8)	770	768 (99.7)	937	933 (99.6)
2018	164	162 (98.8)	760	758 (99.7)	924	920 (99.6)
2019	161	160 (98.9)	740	738 (99.7)	901	898 (99.6)

(注) ①国土交通省「海事レポート」各年版、財務省貿易統計を基に作成。

②端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

3 わが国の品目別 海上貿易量及び貿易額

わが国の貿易は原材料やエネルギー資源に加え、白物家電や衣類などの消費財を輸入し、機械や自動車といった付加価値の高い製品を輸出する構造となっている。
重量ベースでは、輸入が82.2%を占め、このうち3/4以上を液体貨物、石炭、鉄鉱石が占めている。一方、金額ベースでは輸出の割合が48.9%にのぼっている。

出典：国土交通省海事局

(注)端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

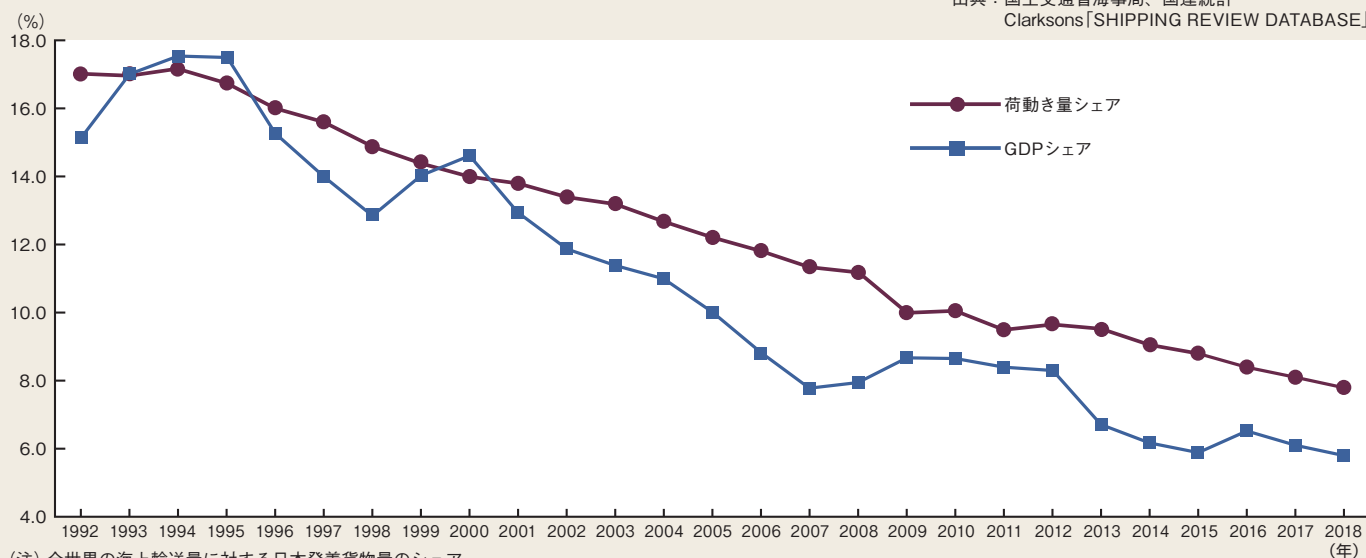
(単位：千トン、億円)

品 目		2018年		2019年		対前年比(%) (数量ベース)
		数 量	金 額	数 量	金 額	
輸出入合計		919,843	1,174,616	897,581	1,112,487	▲ 2.4
輸 出	総計	161,637	574,323	159,656	544,506	▲ 1.2
	鉄鋼	36,113	34,167	33,410	30,543	▲ 7.5
	セメント	10,653	361	10,322	372	▲ 3.1
	機械類	13,621	197,062	12,746	180,226	▲ 6.4
	乗用自動車	6,201	109,329	6,205	106,763	0.1
	電気製品	1,494	53,778	1,332	50,881	▲ 10.9
	肥料	476	120	507	123	6.4
	その他	93,079	179,506	95,135	175,598	2.2
	輸 入	総計	758,206	600,293	737,925	567,981
乾貨物計		488,294	437,405	479,897	425,151	▲ 1.7
鉄鉱石		123,852	10,296	119,561	11,883	▲ 3.5
石炭		189,320	28,121	186,178	25,282	▲ 1.7
燐鉱石		219	47	194	43	▲ 11.2
塩		7,301	308	7,583	350	3.9
銅鉱		5,248	10,407	4,788	8,931	▲ 8.8
ニッケル鉱		3,661	240	3,844	239	5.0
ボーキサイト		43	21	50	25	18.2
木材		6,425	4,072	6,042	3,566	▲ 6.0
パルプ		1,713	1,702	1,717	1,468	0.3
チップ		12,449	2,520	12,171	2,600	▲ 2.2
小麦		5,652	1,811	5,331	1,606	▲ 5.7
米		672	543	679	534	1.0
大麦・裸麦		1,264	385	1,148	352	▲ 9.2
トウモロコシ		15,802	3,721	15,983	3,841	1.1
大豆		3,236	1,701	3,392	1,673	4.8
その他		111,361	371,470	111,235	362,759	▲ 0.1
液体貨物計		269,912	162,888	258,028	142,830	▲ 4.4
原油		148,957	89,036	146,588	79,667	▲ 1.6
LNG		82,852	47,389	77,327	43,498	▲ 6.7
LPG		10,734	6,908	10,519	5,327	▲ 2.0
重油		2,536	1,423	1,084	599	▲ 57.3
その他		24,834	18,131	22,510	13,740	▲ 9.4

4 世界におけるわが国の荷動き量、GDPシェアの推移

わが国の荷動き量のシェアは、1992年時点では17.1%であったが、それ以降低下傾向が続き、2018年は7.8%。
GDPシェアについても、1995年は17.5%で、以降は低下傾向にあったが、2014年からほぼ横ばい傾向となり2018年は5.8%になった。

出典：国土交通省海事局、国連統計
Clarksons「SHIPPING REVIEW DATABASE」

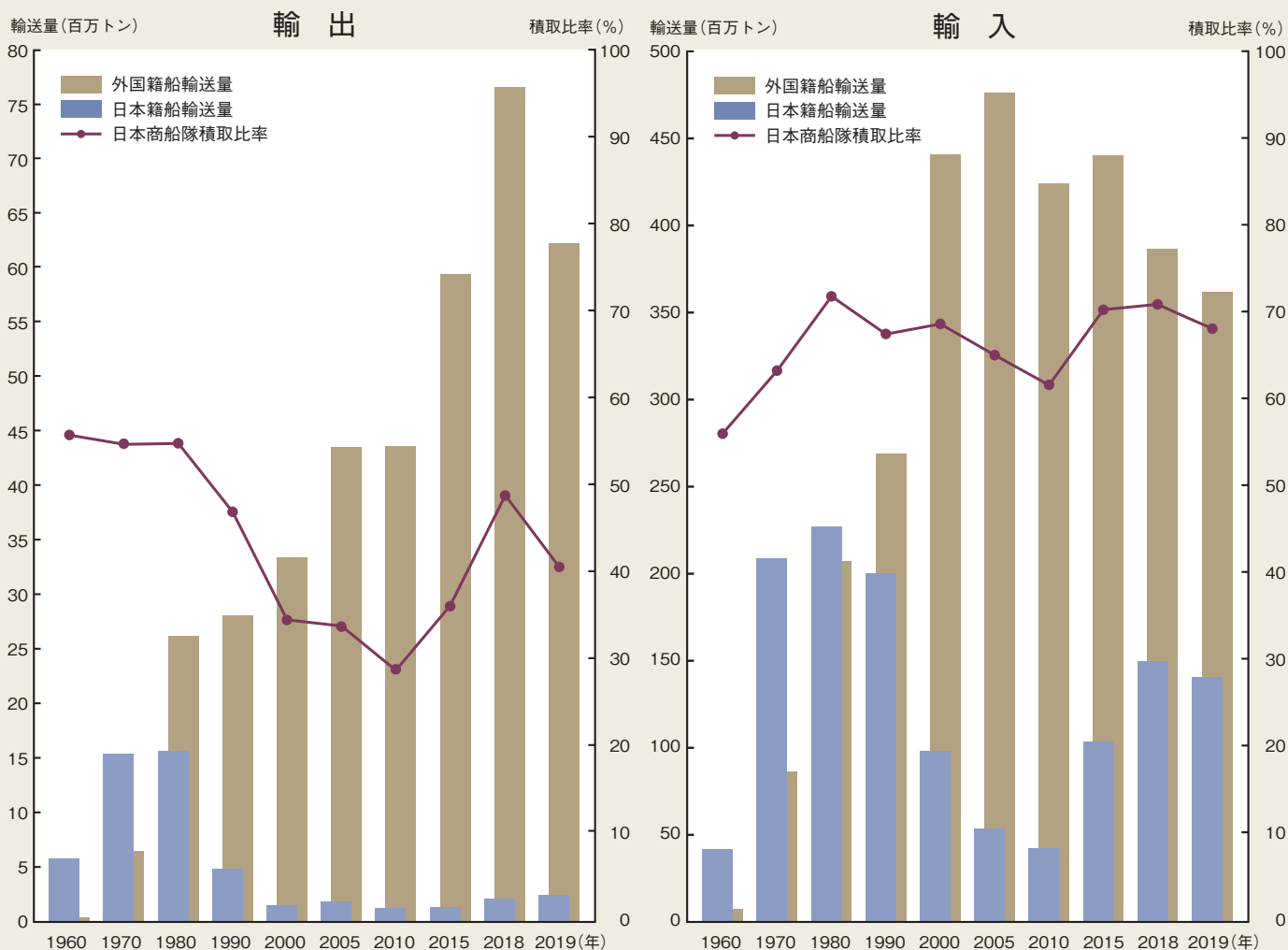


(注) 全世界の海上輸送量に対する日本発着貨物量のシェア。

5 日本商船隊の積取比率の推移

わが国貿易量に占める日本商船隊の積取比率は、輸出では2014年以降は増加傾向だったが、2019年時点では40.5%と減少した。輸入では1970年より60~70%周辺で増減を繰り返し、2019年時点では68.0%。

出典：国土交通省海事局



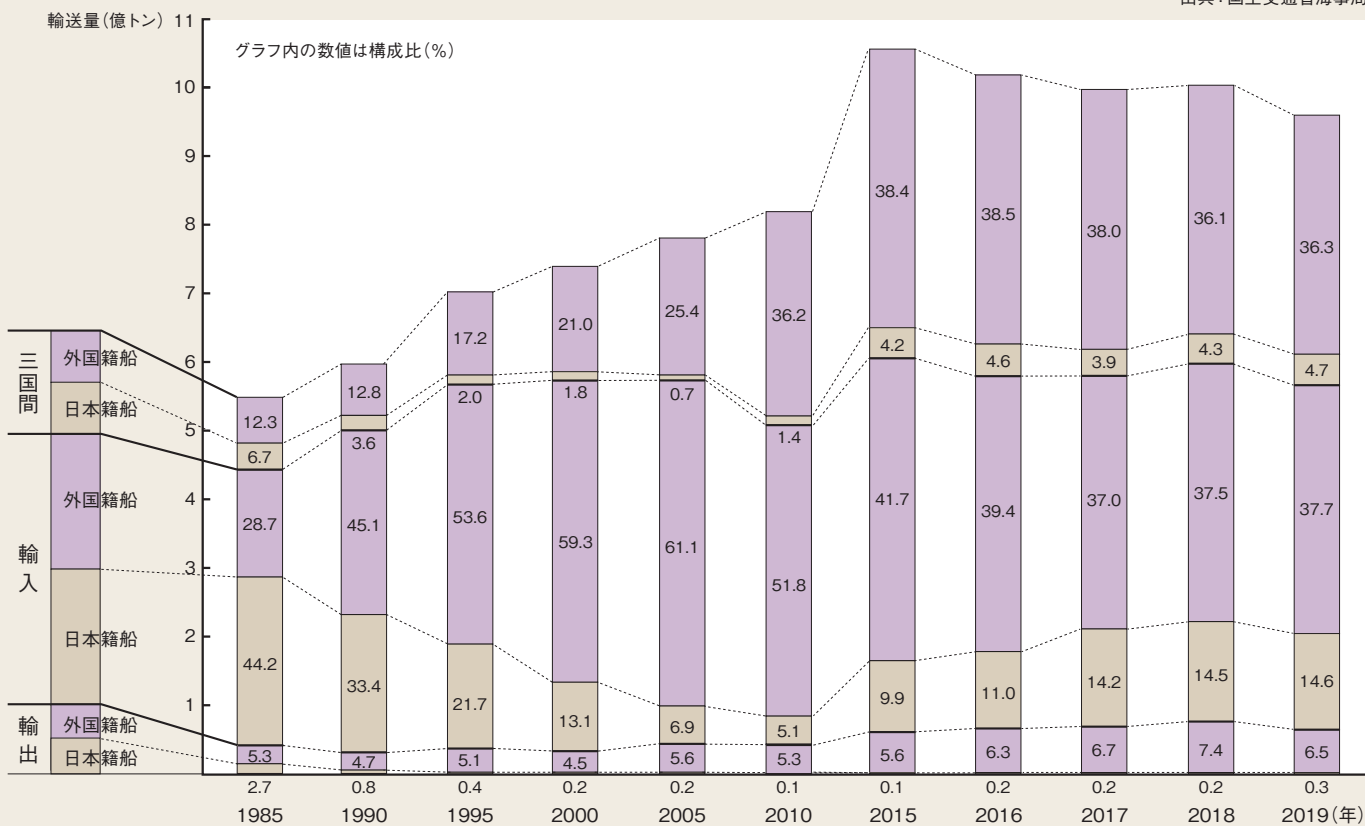
年	輸 出				輸 入			
	総輸送量 (万トン)	日本商船隊			総輸送量 (万トン)	日本商船隊		
		日本籍船	外国籍船	積取比率 (%)		日本籍船	外国籍船	積取比率 (%)
1930	762	451	—	—	2,202	1,168	—	—
1940	1,464	1,054	—	—	3,322	2,161	—	—
1950	313	54	—	—	1,050	281	—	—
1960	1,105	579	43	56.3	8,762	4,158	736	55.9
1970	4,004	1,544	644	54.6	46,783	20,850	8,635	63.0
1980	7,649	1,569	2,616	54.7	60,564	22,664	20,723	71.6
1990	7,042	485	2,812	46.8	69,931	19,994	26,967	67.2
2000	10,174	151	3,345	34.4	78,800	9,814	44,073	68.4
2005	13,437	180	4,360	33.8	81,563	5,346	47,578	64.9
2010	15,641	119	4,357	28.6	75,904	4,196	42,394	61.4
2015	16,898	142	5,938	36.0	77,774	10,414	44,056	70.0
2018	16,164	209	7,663	48.7	75,821	14,949	38,668	70.7
2019	15,966	247	6,214	40.5	73,793	14,056	36,152	68.0

(注) 2019年の数値は暫定値。

6 日本商船隊の輸送量推移

日本商船隊の輸送量の内訳は、三国間輸送の割合が近年40%前後に推移している。

出典：国土交通省海事局



(注) ①端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。②2019年の数値は暫定値。

7 日本商船隊の運賃収入の推移

日本商船隊の運賃収入は、対前年比7.3%減の2兆9,964億円。

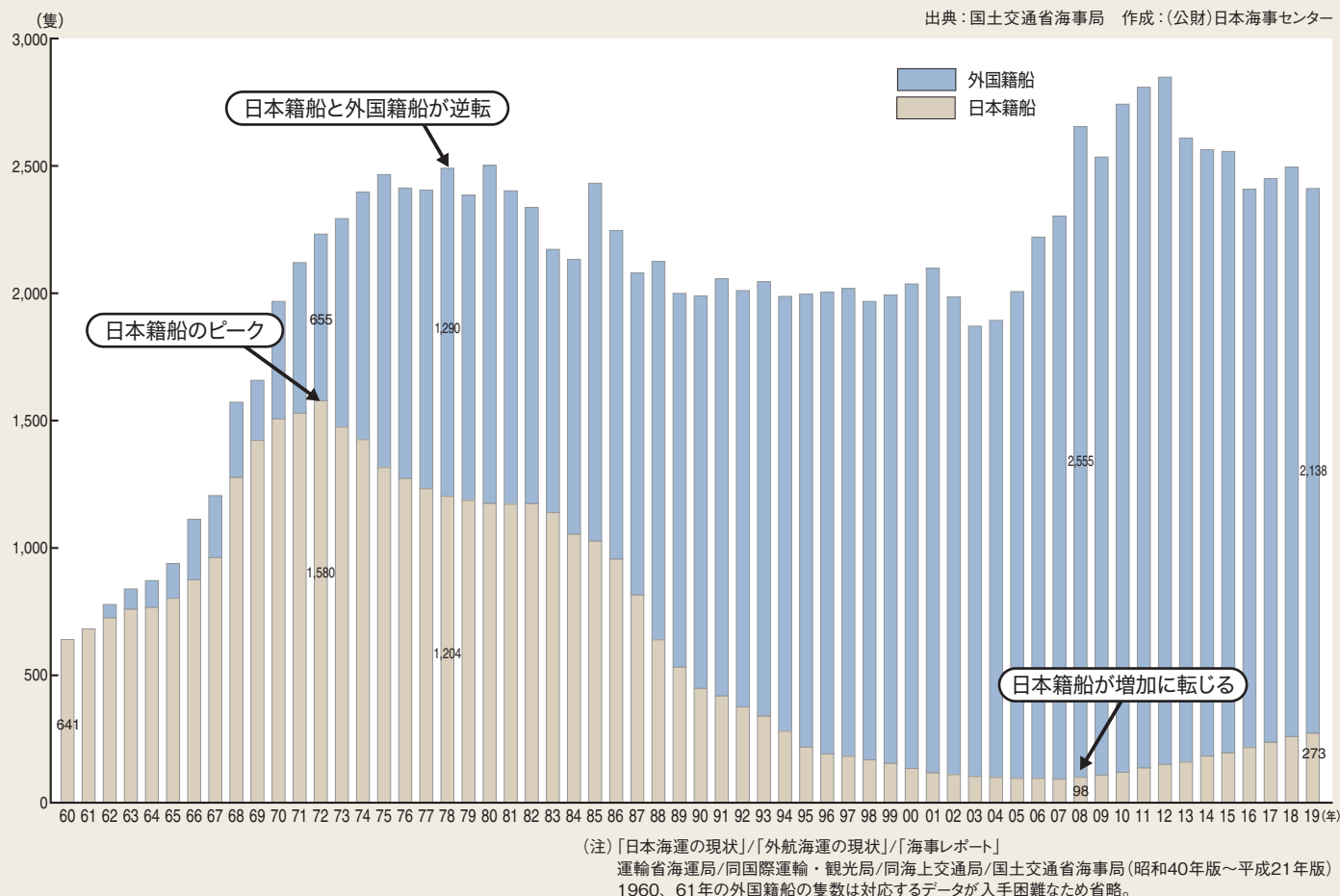
出典：国土交通省海事局



(注) ①端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。②2019年の数値は暫定値。

8 日本商船隊の構成の変化

日本商船隊は、隻数は2,500隻前後で推移しているが、船の大型化により総トン数は1980年比で2倍近くになっている。
このうち日本籍船は1972年をピークに減少が続いていたが、2008年から増加に転じている。



出典：国土交通省海事局

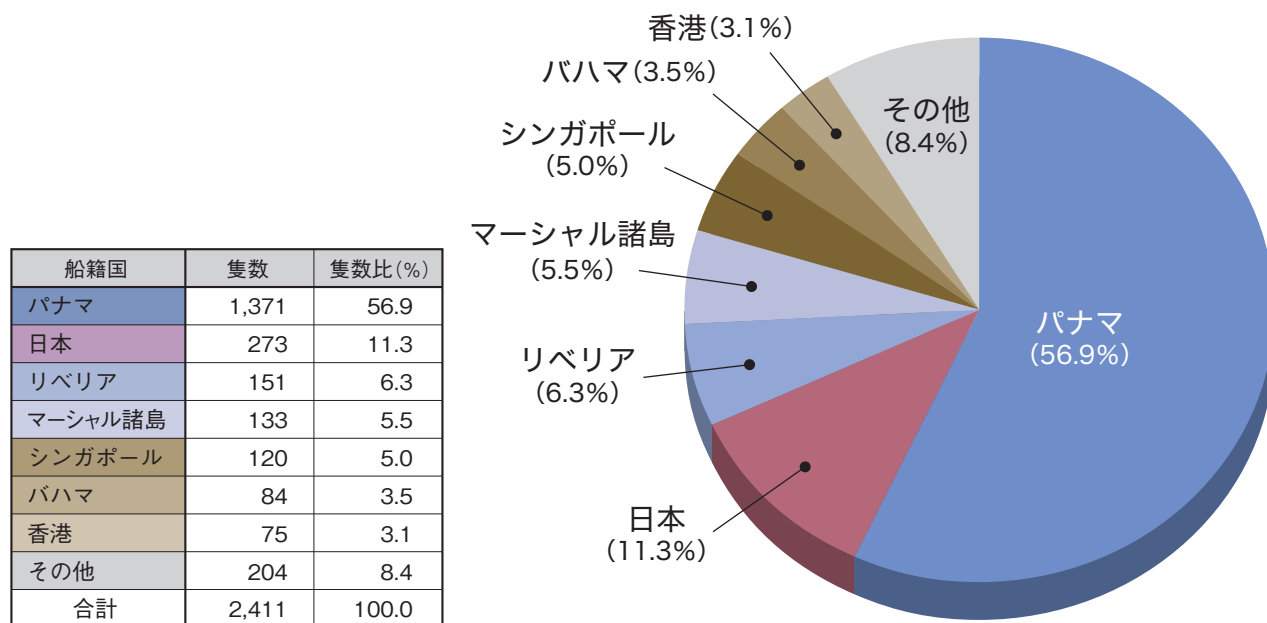
年	日本籍船				外国籍船				合 計		
	隻数	構成比(%)	千総トン	千重量トン	隻数	構成比(%)	千総トン	千重量トン	隻数	千総トン	千重量トン
1980	1,176	46.9	34,240	59,073	1,329	53.1	30,987	56,132	2,505	65,227	115,205
1985	1,028	42.2	33,740	55,512	1,407	57.8	28,691	50,140	2,435	62,431	105,652
1990	449	22.5	20,406	33,163	1,543	77.5	36,910	58,036	1,992	57,316	91,200
1995	218	10.9	13,849	21,682	1,781	89.1	50,514	77,056	1,999	64,363	98,738
2000	134	6.6	10,098	14,384	1,905	93.4	59,040	88,144	2,039	69,138	102,527
2005	95	4.7	7,460	9,577	1,914	95.3	73,215	108,085	2,009	80,675	117,662
2009	107	4.2	7,876	9,635	2,428	95.8	100,921	140,682	2,535	108,797	150,318
2010	119	4.3	10,110	13,403	2,623	95.7	108,289	153,396	2,742	118,399	166,799
2011	136	4.8	11,188	16,428	2,672	95.2	109,150	162,138	2,808	120,338	178,565
2012	150	5.3	12,859	18,608	2,698	94.7	116,294	172,177	2,848	129,153	190,785
2013	159	6.1	13,702	20,232	2,450	93.9	104,992	151,701	2,609	118,694	171,934
2014	184	7.2	15,462	23,628	2,382	92.8	104,437	150,067	2,566	119,899	173,695
2015	197	7.7	16,506	24,906	2,364	92.3	105,492	151,059	2,561	121,998	175,965
2016	219	9.1	18,283	26,990	2,192	90.9	99,121	140,600	2,411	117,403	167,590
2017	237	9.6	20,002	31,717	2,221	90.4	99,422	141,568	2,458	119,425	173,285
2018	261	10.5	21,893	33,701	2,235	89.5	102,608	146,553	2,496	124,501	180,254
2019	273	11.3	23,526	33,419	2,138	88.7	100,006	141,032	2,411	123,533	174,451

(注) ①対象船舶は、2,000総トン以上の外航海船舶である。②構成比は隻数による。③年央の値である。④四捨五入の関係で合計が合わない場合がある。

9 日本商船隊の船籍国

日本商船隊を船籍国(船の登録国)別にみると、日本籍船は11.3%。外国籍船のうちパナマ籍が最も多く56.9%のシェアを占める。

出典：国土交通省海事局

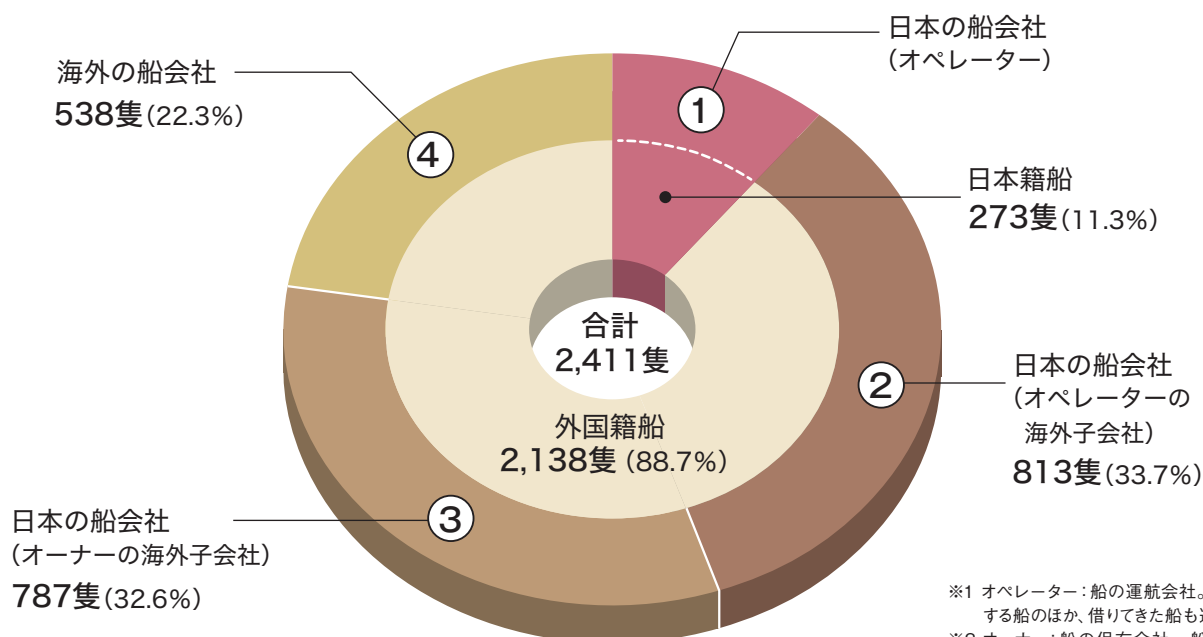


(注) 端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

10 日本商船隊の保有形態

日本商船隊を保有形態別にみると、①日本の船会社(オペレーター※1)が保有する日本籍船、②日本の船会社(オペレーター)の海外子会社が保有する外国籍船、③日本の船会社(オーナー※2)の海外子会社が保有する外国籍船、④その他海外の船会社が保有する外国籍船の4つに分けられる。

出典：国土交通省海事局

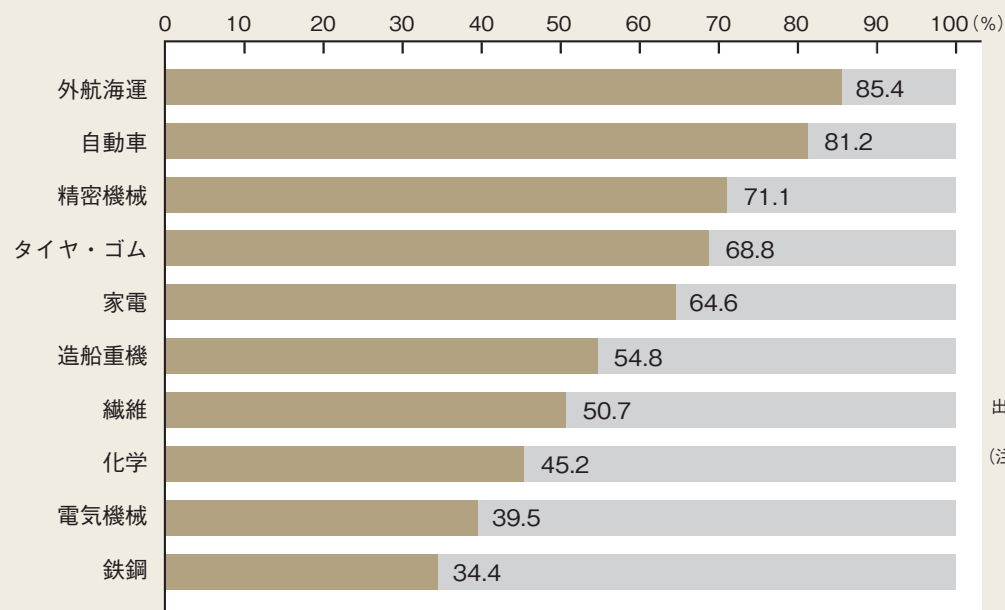


※1 オペレーター：船の運航会社。自ら保有する船のほか、借りてきた船も運航する。
 ※2 オーナー：船の保有会社。船の保有・整備および船員の配乗を行いオペレーターに貸し出す。

(注) 端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

11 外航海運のドル建て比率と他産業の海外売上比率の比較

わが国外航海運の全売上高に占めるドル建て金額の比率は85.4%であり、他産業と比較して為替レートの影響を非常に受けやすい収支構造となっている。



出典：国土交通省海事局、有価証券報告書

(注) ①外航海運業は、国土交通省「海事レポート」2019年版による。他産業は主要各社の有価証券報告書により作成。(2018年度の数値)
 ②海外売上比率=(海外売上高÷連結売上高)×100とした。
 ③外航海運業はドル建て収入分。ただし、CAF等によりカバーされている分等は除く。

12 対米ドルレート為替相場の推移

上記⑪のとおり、外航海運は収入の多くがドル建てのため、その業績は自国通貨の対米ドルレート為替相場に大きく左右される。各国通貨の対米ドルレートの変動を指数でみると、1980年を100とした場合、2019年の日本円は48.09。円換算した運賃水準が5割近くまで目減りしたことになる。

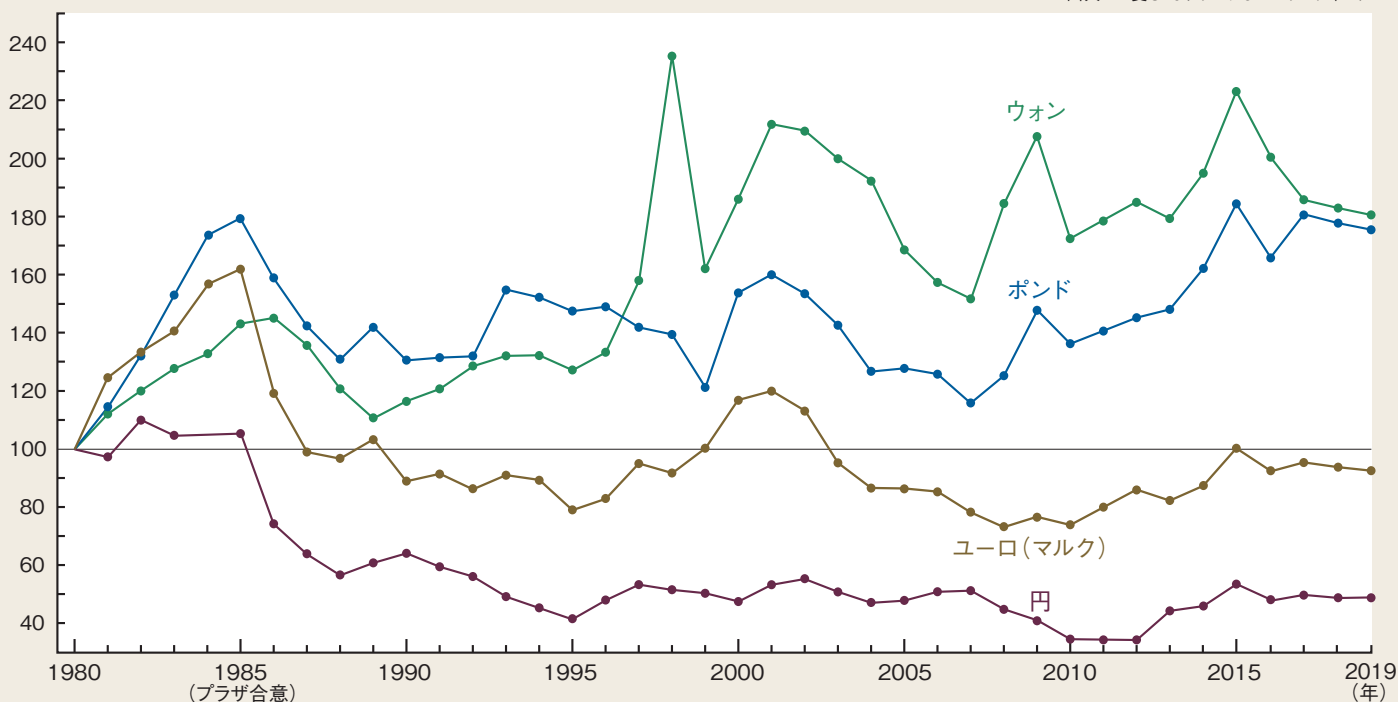
1980年との比較

国名	1980年		2019年	
	対米ドルレート	指数	対米ドルレート	指数
日本(円)	226.74	100.0	109.05	48.09
英国(ポンド)	0.43	100.0	0.75	175.49
ドイツ(ユーロ)	0.93	100.0	0.86	92.57
韓国(ウォン)	607.43	100.0	1,097.08	180.61

(注) ①1995年までは、IMF「International Financial Statistics」による。
 ②ユーロは1998年までドイツマルク。

(指数)

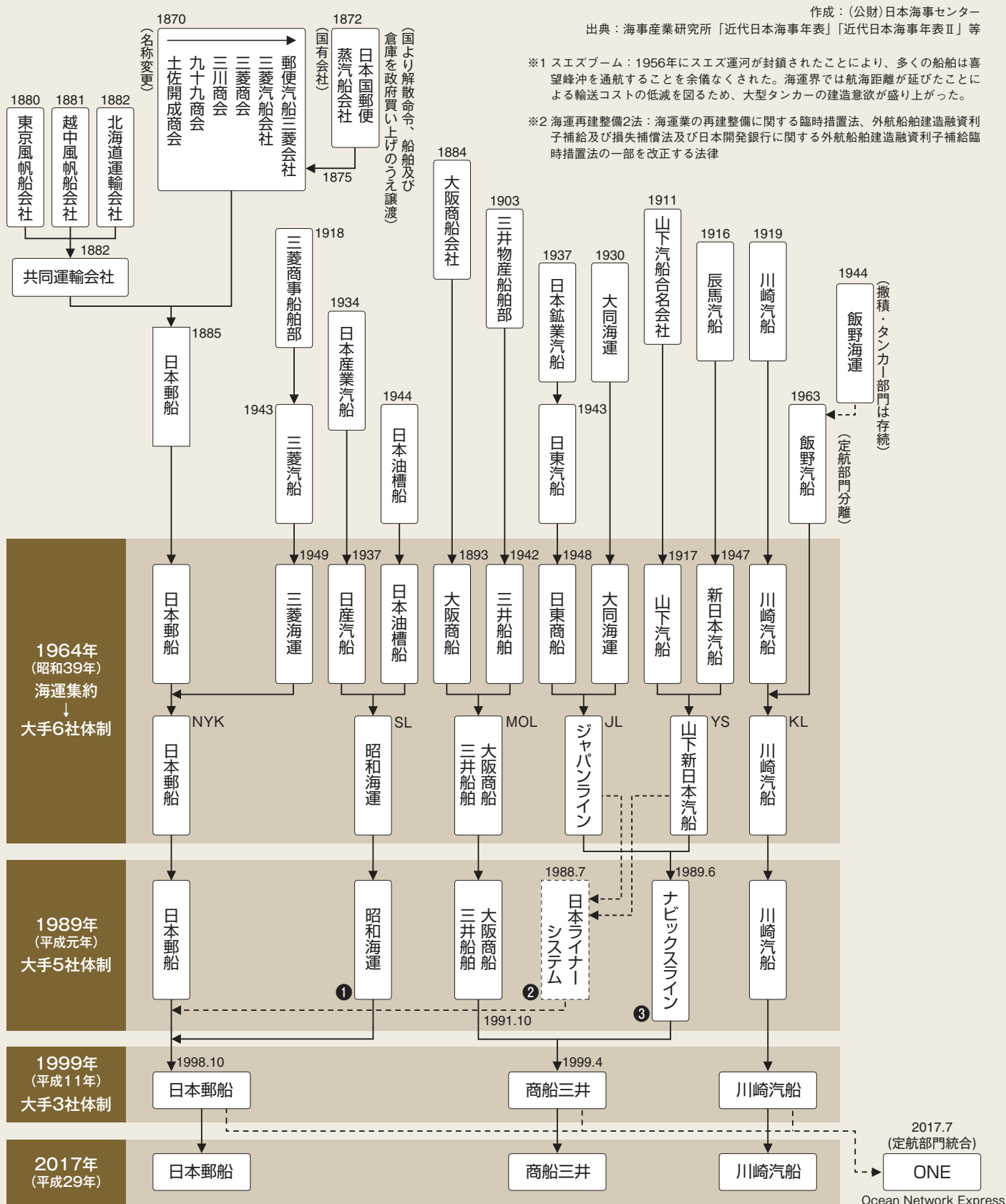
出典：三菱UFJリサーチ&コンサルティング



13 わが国外航海運大手企業の再編の流れ

下図は明治以降、現代までの外航海運大手企業の主な再編の流れを示したもの。1956年のスエズブーム^{※1}後の長期海運不況はわが国外航海運企業の経営基盤を脆弱にした。政府は海運企業の経営基盤を強化し、外航船舶を整備する方策として海運再建整備2法^{※2}を制定し、海運企業の集約を図るとともに財政上

の優遇措置を講ずることとした。この集約には、当時の外航海運企業のほとんどである95社が参加し、6グループの中心である中核会社を軸に88社となった(1964年、海運集約)。その後、さらに船社の統合が進み、1999年以降は大手3社体制となつていく。2017年には大手3社の定期コンテナ船事業が統合された。



1 世界主要港2018年コンテナ取扱量

世界主要港の1、2位は昨年に引き続き上海、シンガポール。

上位10位港のうち、シンガポール、釜山、ドバイを除く7港を中国の港湾が占める。

順位	17年順位	港	国	取扱量	前年比
1	1	上海	中国	42,010	4.4
2	2	シンガポール	シンガポール	36,599	8.7
3	4	寧波	中国	26,351	7.1
4	3	深圳 ※1	中国	25,740	2.1
5	7	広州	中国	21,922	7.6
6	6	釜山	韓国	21,663	5.7
7	5	香港	中国	19,596	▲5.7
8	8	青島	中国	19,315	5.8
9	10	天津	中国	15,972	6.2
10	9	ドバイ	アラブ首長国連邦	14,954	▲2.7
11	11	ロッテルダム	オランダ	14,513	5.7
12	12	ポートクラン	マレーシア	12,316	2.8
13	13	アントワープ	ベルギー	11,100	6.2
14	14	廈門	中国	10,702	3.1
15	15	高雄	台湾	10,446	1.7
16	16	大連	中国	9,770	0.6
17	17	ロサンゼルス	米国	9,459	1.2
18	19	PTP（タンジュンペラバス）	マレーシア	8,961	8.5
19	18	ハンブルグ	ドイツ	8,730	▲1.0
20	21	ロングビーチ	米国	8,091	7.2
21	20	レムチャパン	タイ	8,070	5.2
22	26	タンジュンプリオク	インドネシア	7,800	12.7
23	22	NY・NJ ※2	米国	7,180	7.0
24	24	コロombo	スリランカ	7,000	12.7
25	25	ホーチミン	ベトナム	6,586	7.0
26	23	營口	中国	6,487	3.3
27	27	ブレーメルハーヘン	ドイツ	5,450	▲1.1
28	28	ジャワハルラル・ネルー	インド	5,133	6.2
29	29	バレンシア	スペイン	5,129	7.3
30	30	マニラ	フィリピン	5,085	6.3

出典：Lloyd's List One Hundred Ports 2019

(注)確定値。

取扱量単位は千TEU。

※1 深圳 (Shenzhen)は、赤湾 (Chiwan)、蛇口 (Shekou)、塩田 (Yantian)の3港の合計。

※2 NY・NJは、ニューヨーク・ニュージャージーの略。

2 世界主要港コンテナ取扱量の推移 (1980、2001、2018年経年比較)

わが国港湾は、1980年には神戸港(4位)、横浜港(12位)及び東京港(18位)が20位以内に入っていた。2018年時点では東京港が35位だったが、神戸港、横浜港とも50位以下となった。世界の中でわが国港湾の位置づけは低下している。

1980年				2001年				2018年			
順位	港	国	取扱量	順位	港	国	取扱量	順位	港	国	取扱量
1	NY・NJ ※1	米国	1,947	1	香港	中国	18,000	1	上海	中国	42,010
2	ロッテルダム	オランダ	1,901	2	シンガポール	シンガポール	15,520	2	シンガポール	シンガポール	36,599
3	香港	香港	1,465	3	釜山	韓国	7,906	3	寧波	中国	26,351
4	神戸	日本	1,456	4	高雄	台湾	7,540	4	深圳 ※2	中国	25,740
5	高雄	台湾	979	5	上海	中国	6,334	5	広州	中国	21,922
6	シンガポール	シンガポール	917	6	ロッテルダム	オランダ	5,944	6	釜山	韓国	21,663
7	サン・ファン	米国	852	7	ロサンゼルス	米国	5,183	7	香港	中国	19,596
8	ロングビーチ	米国	825	8	深圳	中国	5,076	8	青島	中国	19,315
9	ハンブルク	ドイツ	783	9	ハンブルク	ドイツ	4,689	9	天津	中国	15,972
10	オークランド	米国	782	10	ロングビーチ	米国	4,462	10	ドバイ	アラブ首長国連邦	14,954
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
12	横浜	日本	722	...	...	...	...	...	...	...	...
16	釜山	韓国	634	...	...	...	...	...	...	...	...
18	東京	日本	632	18	東京	日本	2,770	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	21	横浜	日本	2,400	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	25	神戸	日本	2,100	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...	...
...	...	...	...	...	...	...	...	35	東京	日本	4,570

出典：Lloyd's List One Hundred Ports 2019

(注) 2018年取扱量は確定値。取扱量単位は千TEU。

※1 NY・NJは、ニューヨーク・ニュージャージーの略。

※2 深圳 (Shenzhen)は、赤湾 (Chiwan)、蛇口 (Shekou)、塩田 (Yantian)の3港の合計。

3 世界のコンテナの荷動き (推計)

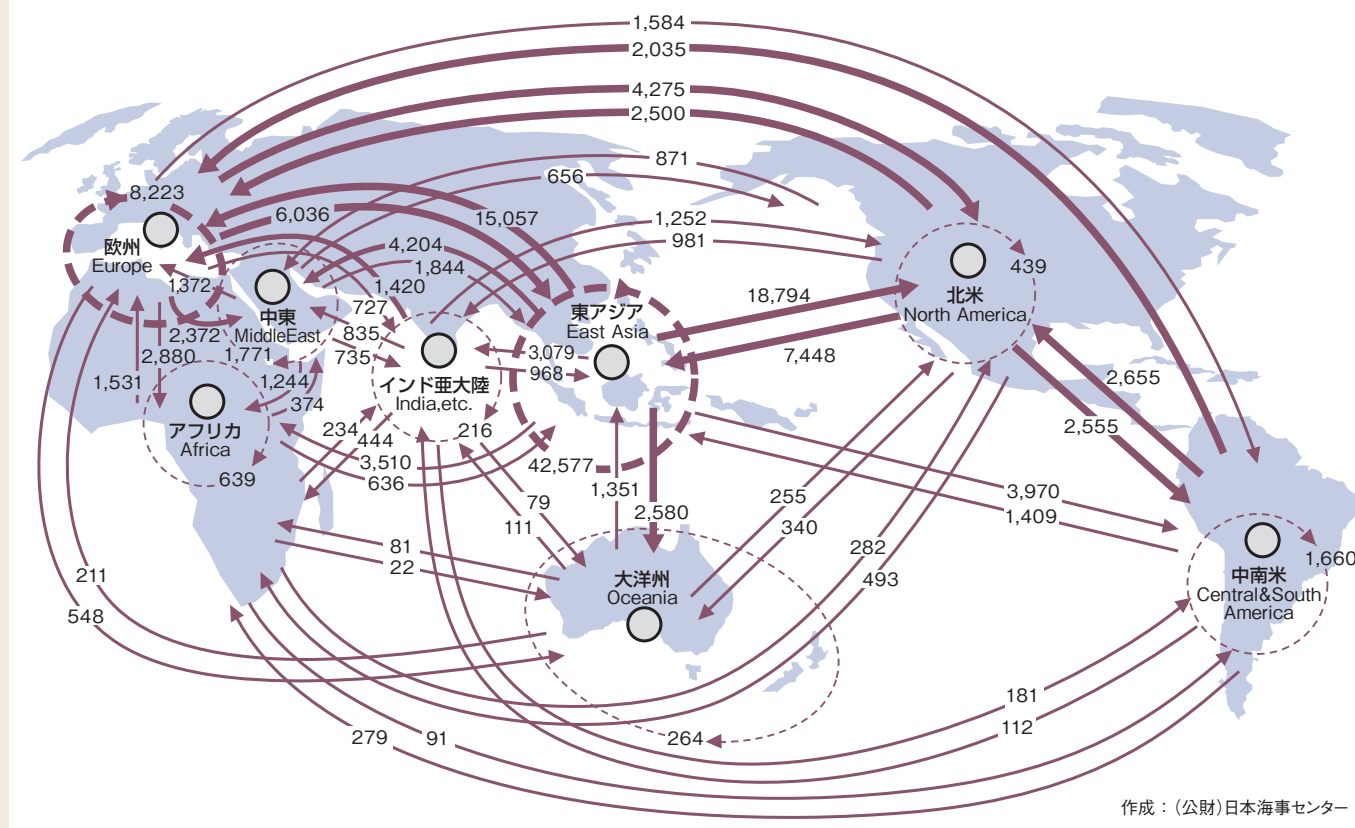
2019年の世界のコンテナ荷動き量は、164,184,628TEUで前年比0.4%減少した。東アジア域内だけで見ると、前年比2.6%の減少である。現在の世界のコンテナ荷動きは、アジア／北米、アジア／欧州の基幹航路よりも東アジア域内の方が圧倒的に多くなっている。

World Container Estimated Movement in 2019

Total:164,184,628 TEU

前年比0.4%減

単位：千TEU

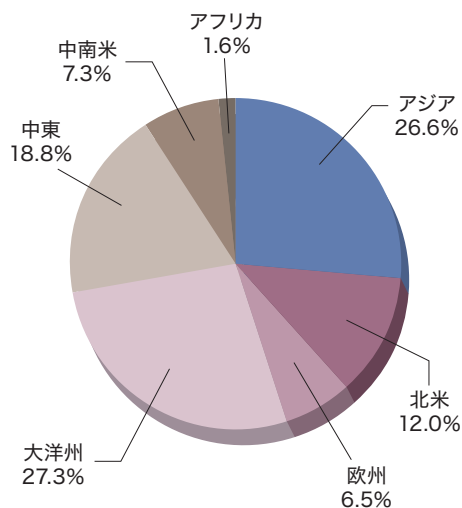


4 わが国の海上貿易量の内訳

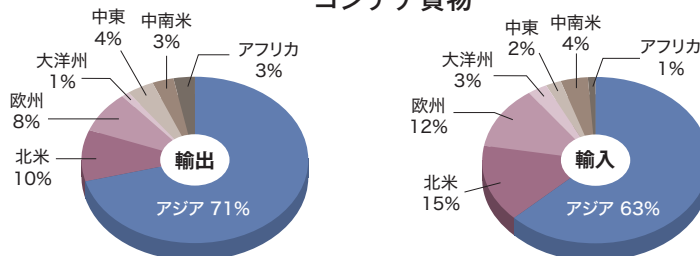
わが国の海上貿易をみると、コンテナ貨物では、輸出入ともにアジア地域内との貿易が6割以上を占めている。

不定期船貨物については、輸出ではアジア域内が約7割、輸入では大洋州や中東等の資源保有国からの輸入がシェアの半分以上を占める。

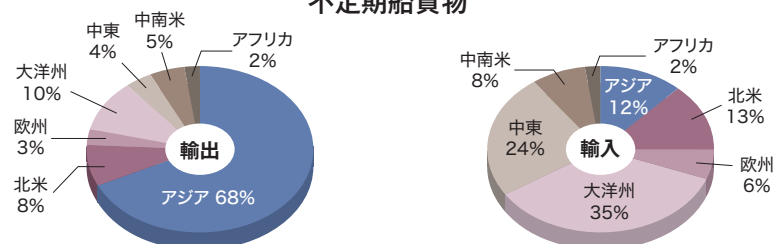
日本の地域別海上貿易量の内訳



コンテナ貨物



不定期船貨物



出典：財務省貿易統計

(注) ①2019年の数値。②コンテナ貨物と不定期船貨物のデータについては「財務省貿易統計」を基に海事局作成。③端数処理のため、末尾の数字が合わない場合がある。

5 フルコンテナ船運航船腹量上位20社

近年、コンテナ業界では上位船社への集中度が高まっている。1995年では上位3船社のシェアは17.3%であったが、2020年には46%まで上昇している。

1995年		
順位	運航会社	TEU
1	Maersk Line(デンマーク)	180,831
2	Sea-Land(米国)	180,000
3	China Ocean Shipping(Group) Company：COSCO(中国)	153,253
4	Evergreen(台湾)	146,557
5	日本郵船	115,626
6	韓進海運(韓国)	97,176
7	大阪商船三井船舶	96,775
8	American President Line：APL(米国)	96,326
9	P&O Containers(英国)	92,083
10	Nedlloyd Line(オランダ)	90,714
11	川崎汽船	70,193
12	Orient Overseas Container Line：OOCL(香港)	69,311
13	Hapag-Lloyd Container Line(ドイツ)	69,180
14	DSR Senator(ドイツ)	68,915
15	陽明海運(台湾)	68,513
16	Neptune Orient Lines：NOL(シンガポール)	67,935
17	現代商船(韓国)	59,526
18	Zim Integrated Shipping(イスラエル)	59,247
19	Mediterranean Shipping Company：MSC(スイス)	53,566
20	Compagnie Maritime d'Affretement：CMA(フランス)	48,878
全世界		2,969,315

2001年		
順位	運航会社	TEU
1	Maersk Line(デンマーク)/Safmarine(デンマーク)	596,442
2	P&O Nedlloyd(英国/オランダ)	345,055
3	Evergreen(台湾)/Lloyd Triestino(イタリア)/Uniglor(台湾)	324,874
4	韓進海運(韓国)/DSR Senator(ドイツ)	281,781
5	MSC(スイス)	229,629
6	NOL/APL(シンガポール)	209,245
7	COSCO(中国)	200,656
8	CP Ships(英国)	171,035
9	日本郵船	158,230
10	CMA-CGM(フランス)/ANL(オーストラリア)	141,770
11	商船三井	141,731
12	OOCL(香港)	138,949
13	川崎汽船	135,120
14	Zim Integrated Shipping Services(イスラエル)	127,101
15	Hapag-Lloyd Container Line(ドイツ)	119,028
16	現代商船(韓国)	116,472
17	Compania Sud Americana de Vapores：CSAV(チリ)	109,580
18	陽明海運(台湾)	109,058
19	China Shipping Container Line：CSCL(中国)	100,888
20	Hamburg-Sud(ドイツ)	77,135
全世界		4,788,319

出典：Alphaliner、日本郵船調査グループ「世界のコンテナ輸送と就航状況」 作成：(公財)日本海事センター

2020年4月現在		
順位	運航会社	TEU
1	Maersk Line(デンマーク)	4,167,255
2	MSC(スイス)	3,813,010
3	COSCO(中国)	2,924,927
4	CMA-CGM(フランス)	2,646,212
5	Hapag-Lloyd(ドイツ)	1,760,701
6	Ocean Network Express：ONE(シンガポール)	1,568,179
7	Evergreen(台湾)	1,231,809
8	陽明海運(台湾)	599,538
9	HMM(旧現代商船)(韓国)	414,600
10	Pacific International Lines(シンガポール)	371,748
11	Wan Hai Lines(台湾)	276,190
12	Zim Integrated Shipping Services(イスラエル)	270,876
13	KMTC(韓国)	162,498
14	中谷物流股份有限公司(中国)	160,368
15	Islamic Republic of Iran Shipping Lines(イラン)	152,419
16	安通控股(中国)	145,772
17	SITC(中国)	120,111
18	X-Press Feeders Group(シンガポール)	110,576
19	UniFeeder(デンマーク)	92,355
20	長錦商船(韓国)	90,919
全世界		23,674,945

6 大手コンテナ船社の主なM&A等の動き(暦年順)

作成：(公財)日本海事センター

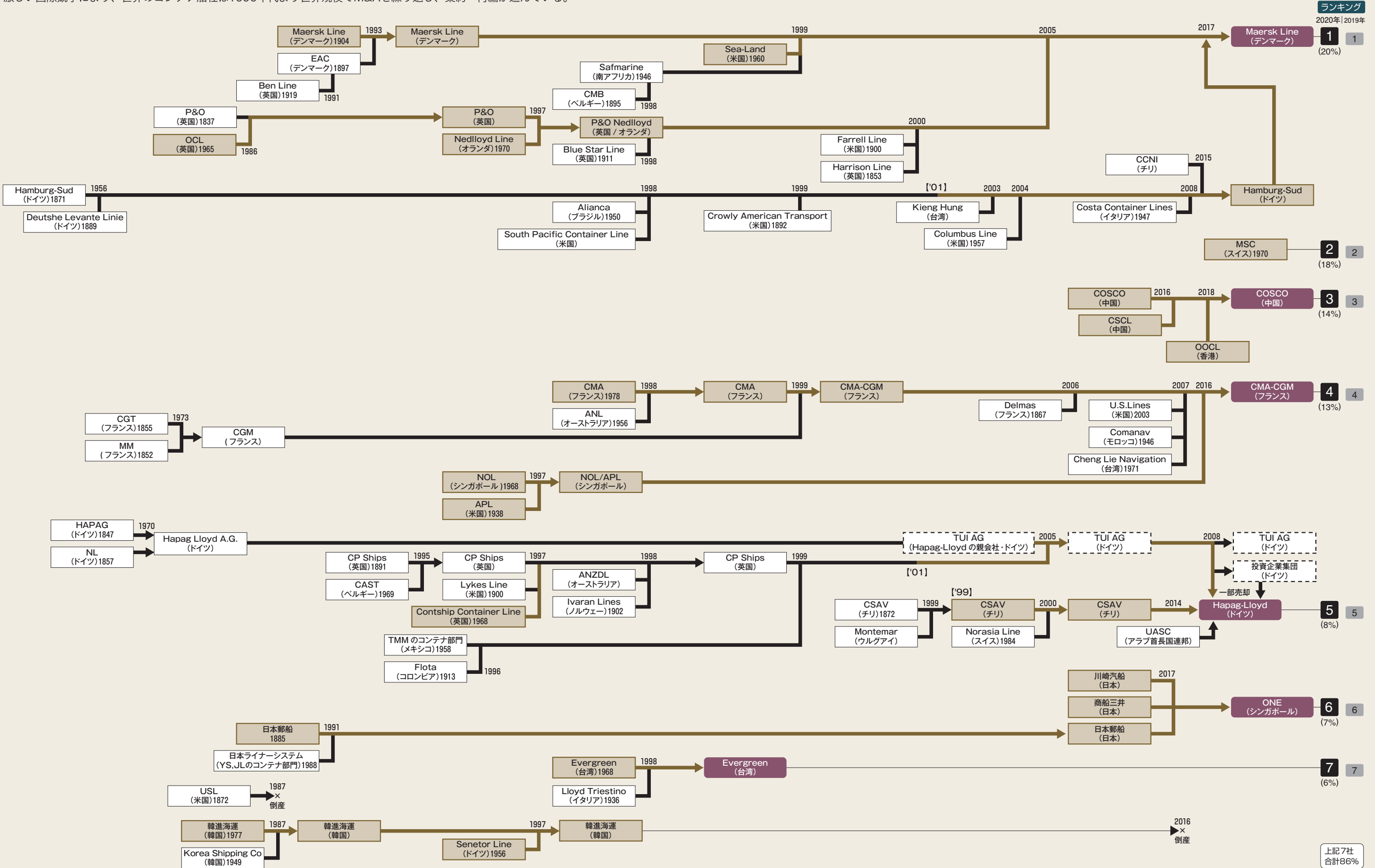
- 1956年** ●Hamburg-Sud(ドイツ)がDeutsche Levante Linie(ドイツ)を吸収合併
- 1970年** ●HAPAG(Hamburg-Amerikanische Packetfahrt Aktien-Gesellschaft：ドイツ)とNord Lloyd(ドイツ)が合併
Hapag Lloyd A.G(ドイツ)となる
- 1973年** ●CGT(Compagnie Generale Transatlantique：フランス)とMM(Messageries Maritimes：フランス)が合併
- 1986年** ●P&O(英国)がOCL(Overseas Containers Ltd(P&O、Alfred Holt、British Commonwealth Shipping、Furness Withyの合併企業：いずれも英国))を買収
- 1987年** ●韓進海運(韓国)がKorea Shipping Co(韓国)を買収
●USL(United States Line：米国)が倒産
- 1991年** ●EAC(East Asiatic Container：デンマーク)がBen Line(英国)を吸収合併
●日本郵船が日本ライナーシステム(山下新日本汽船、ジャパンラインのコンテナ部門)を吸収合併
- 1993年** ●Maersk Line(デンマーク)がEAC(デンマーク)を吸収合併
- 1995年** ●CP Ships(英国)がCAST(CAST Container Line：ベルギー)を買収
- 1996年** ●TMM(Transportacion Maritima Mexicana国営会社：メキシコ)がFlota(Flota Mercante-Grancolombiana：コロンビア)を買収
- 1997年** ●P&O(英国)とNedlloyd Line(オランダ)が合併
P&O Nedlloydとなる
●CP Ships(英国)がLykes Line(米国)とContship Container Line(英国)を買収
●NOL(Neptune Orient Lines：シンガポール)がAPL(American President Line：米国)を買収
●韓進海運(韓国)がSenator Line(ドイツ)を買収
- 1998年** ●P&O Nedlloyd(英国・オランダ)がBlue Star Line(英国)を買収
●CMA(Compagnie Maritime d'Affretement：フランス)がANL(Australian National Line：オーストラリア)を買収
●Evergreen(台湾)がLloyd Triestino(イタリア)を買収
●CP Ships(英国)がANZDL(Australia-New Zealand Direct Line：オーストラリア)、Ivaran Lines(ノルウェー)を買収
●Hamburg-Sud(ドイツ)がAlianca(ブラジル)、South Pacific Container Line(米国)を買収
●Safmarine(南アフリカ)がCMB(Compagnie Maritime Belge：ベルギー)を買収
- 1999年** ●Maersk Line(デンマーク)がSea-Land(米国)、Safmarine(南アフリカ)を買収

- 1999年** ●CMA(フランス)とCGM(Compagnie Generale Maritime：フランス)が合併
●CP Ships(英国)がTMM(メキシコ)のコンテナ部門を買収
●Hamburg-Sud(ドイツ)がCrowly American Transport(米国)を買収
●CSAV(Compania Sud Americana de Vapores：チリ)がMontemar(ウルグアイ)を買収
- 2000年** ●P&O Nedlloyd(英国・オランダ)がFarrell Line(米国)、Harrison Line(英国)を買収
●CSAV(チリ)がNorasia Line(スイス)を買収
- 2001年** ●朝陽海運(韓国)倒産
- 2003年** ●Hamburg-Sud(ドイツ)がKieng Hung(台湾)を買収
- 2004年** ●Hamburg-Sud(ドイツ)がColumbus Line(米国)を買収
- 2005年** ●Maersk Line(デンマーク)がP&O Nedlloyd(英国・オランダ)を買収。これにより、米国、英国、オランダの大手コンテナ船社は、すべて消滅した
●TUI AG(Hapag-Lloydの親会社・ドイツ)がCP Ships(英国)を買収。CP Shipsの買収した各社が傘下の会社となる
- 2006年** ●CMA-CGM(フランス)がDelmas(フランス)を買収
- 2007年** ●CMA-CGM(フランス)がCheng Lie Navigation(台湾)、U.S.Lines(米国)、Comanav(Compagnie Marocaine de Navigation：モロッコ)を買収
- 2008年** ●TUI AG(ドイツ)がHapag-Lloyd及び傘下のコンテナ各社の株式の一部をドイツの投資企業集団に売却
●Hamburg-Sud(ドイツ)がCosta Container Lines(イタリア)を買収
- 2014年** ●Hapag-Lloyd(ドイツ)とCSAV(チリ)のコンテナ船部門が合併
- 2015年** ●Hamburg-Sud(ドイツ)がCCNI(チリ)のコンテナ船部門を買収
- 2016年** ●CMA-CGM(フランス)がNOL(シンガポール)を合併
●韓進海運(韓国)が法定管理を申請、のち破産
●中国海洋運輸集団(COSCOグループ)と中国海運集団が合併
- 2017年** ●Hapag-Lloyd(ドイツ)がUASC(アラブ首長国連邦)を合併
●Maersk Line(デンマーク)がHamburg Sud(ドイツ)を合併
●川崎汽船、商船三井、日本郵船の大手3社が定期コンテナ船事業統合新会社「Ocean Network Express：ONE」を設立
- 2018年** ●COSCO(中国)がOOCL(香港)を買収

7 大手コンテナ船社の主なM&A等の動き (企業グループ別フローチャート)

作成：(公財)日本海事センター

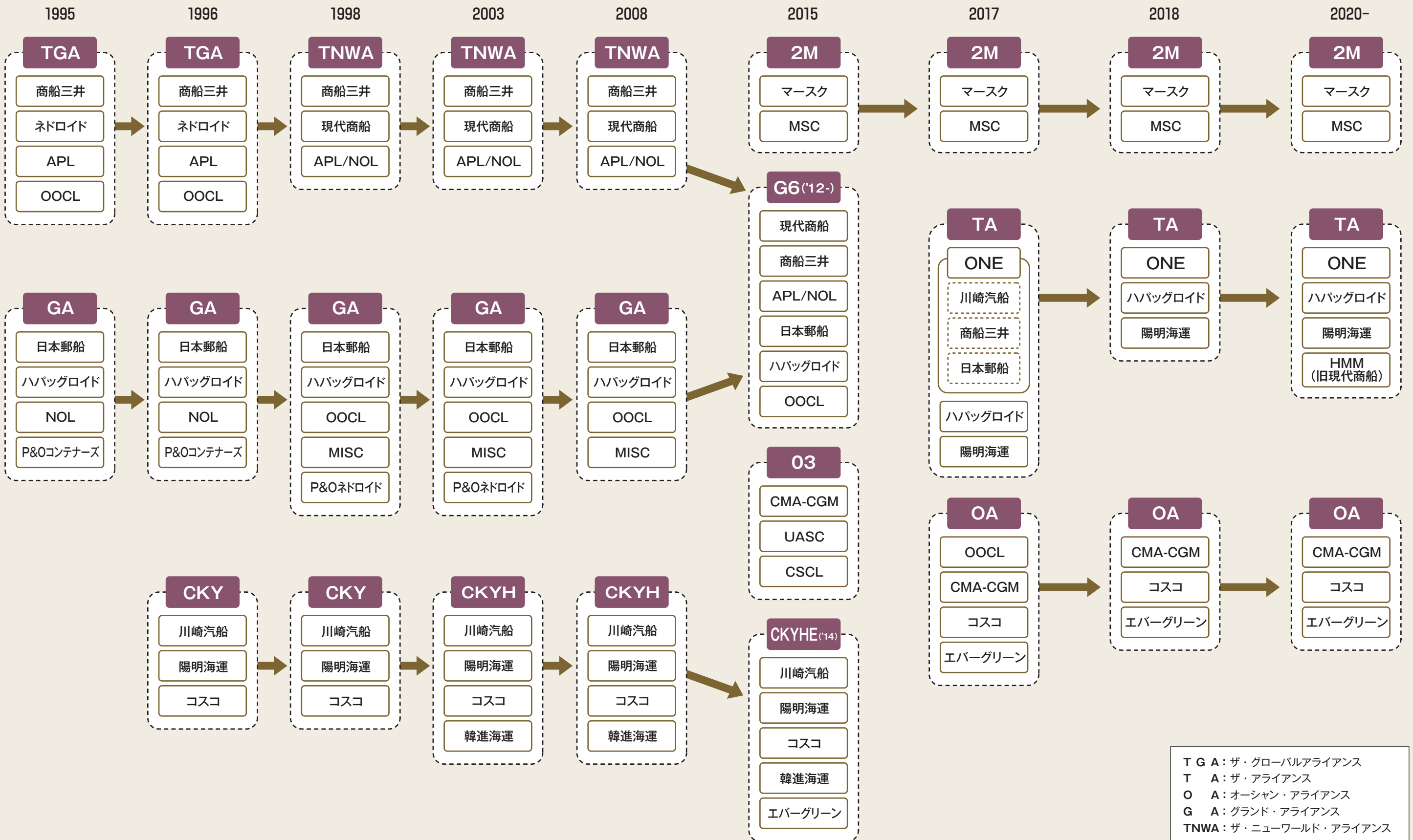
激しい国際競争により、世界のコンテナ船社は1990年代より世界規模でM&Aを繰り返し、集約・再編が進んでいる。



8 コンテナ船社のアライアンスの変遷

世界規模での最適配船、コスト合理化を図るため、コンテナ運航船社間協定による複数の航路やサービスでの協調体制である「アライアンス」が1990年代に誕生。2017年7月に邦船3社が定期コンテナ船事業部門を統合しOcean Network Express (ONE) を設立、2018年4月にサービスを開始した。

作成：(公財)日本海事センター



9 アジア各国の世界に占めるコンテナ取扱量のシェア

アジア各国の世界に占めるコンテナ取扱量(TEU)のシェアは1990年には4割を切っていたが、その後拡大し続け、2018年には57.3%となった。



(注) ①中国、シンガポール、香港、日本、韓国、マレーシア、台湾、インド、インドネシア、タイ、ベトナム、フィリピン、スリランカ、パキスタン、バングラディシュ、ミャンマーのデータ。
②取扱量はContainerisation International推定値。

10 コンテナ取扱量の上位を占めるアジアの港湾

中国を中心にアジア諸国発着のコンテナ貨物が増加したため、世界のコンテナ取扱量上位10港のうち、9港がアジアの港湾であり、そのうち7港を中国の港湾が占めている。

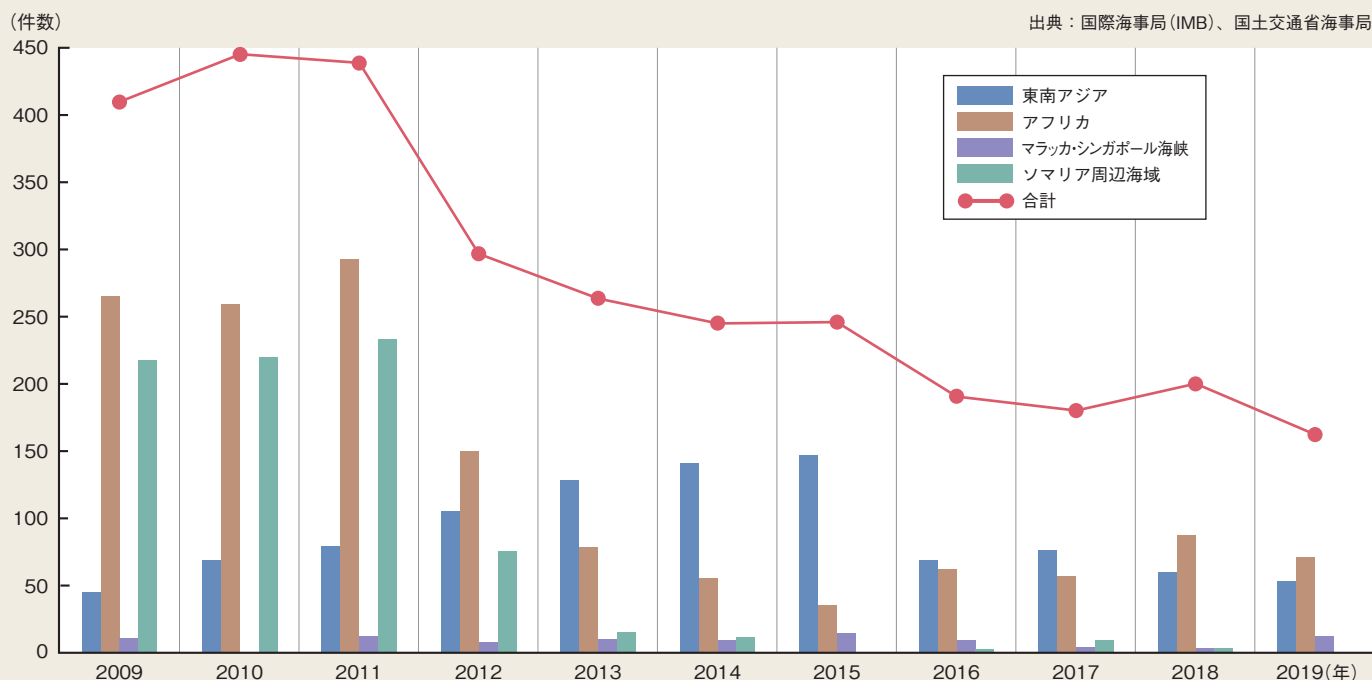
出典：Lloyd's List One Hundred Ports 2019、Containerisation International

港 名(国名)	取扱量の順位								2018年の 取扱量 (千TEU)
	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	
上海(中国)	1	1	1	1	1	1	1	1	42,010
シンガポール(シンガポール)	2	2	2	2	2	2	2	2	36,599
寧波(中国)	6	6	6	5	4	4	4	3	26,351
深圳(中国)	4	4	3	3	3	3	3	4	25,740
広州(中国)	7	7	8	8	7	7	7	5	21,922
釜山(韓国)	5	5	5	6	6	5	6	6	21,663
香港(中国)	3	3	4	4	5	6	5	7	19,596
青島(中国)	9	8	7	7	8	8	8	8	19,315
天津(中国)	11	10	10	10	10	10	10	9	15,972
ドバイ(アラブ首長国連邦)	8	9	9	9	9	9	9	10	14,954

(注)取扱量はThe Top 100 Ports in 2018確定値。

1 最近の海賊等事案の発生状況

ソマリア周辺海域では、わが国の自衛隊派遣を含む各国共同の海賊対策の結果、海賊事案が減少しているものの、東南アジアや西アフリカ等世界各地で、海賊の脅威が依然存在する。

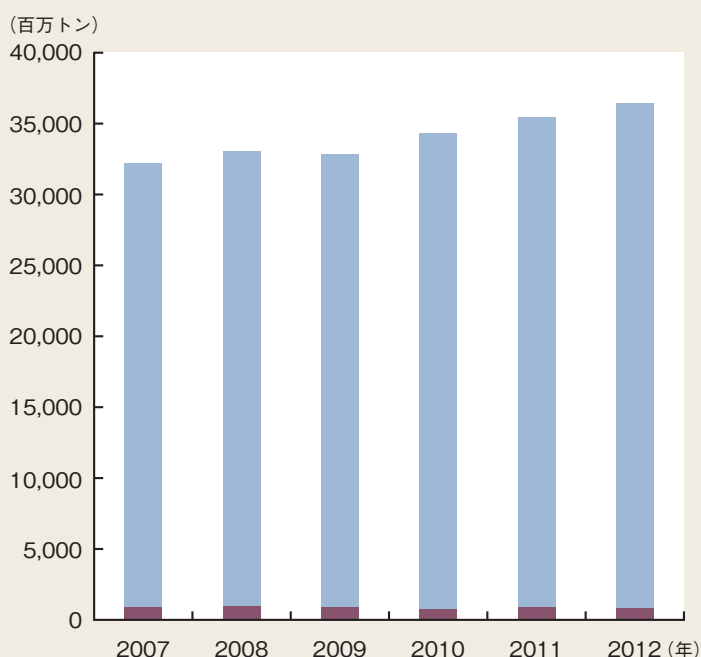


	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
東南アジア	46	70	80	104	128	141	147	68	76	60	53
アフリカ	266	259	293	150	79	55	35	62	57	87	71
マラッカ・シンガポール海峡	11	5	12	8	10	9	14	9	4	3	12
ソマリア周辺海域	218	219	237	75	15	11	0	2	9	3	0
合計	410	445	439	297	264	245	246	191	180	201	162
日本関係船舶	5	15	11	5	9	9	16	10	3	5	4

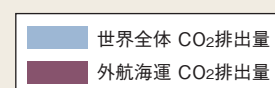
(注) ①数字は全船舶数(国際海事局・IMBの資料による)で、日本関係船舶(日本籍の外航船舶及び日本の船会社の運航する外国籍船)の件数(国土交通省の調査による)
②マ・シ海峡及びソマリア周辺海域の件数はそれぞれ東南アジア、アフリカの内数である。

2 世界全体のCO₂排出量に占める外航海運によるCO₂排出量の割合

2012年の外航海運のCO₂排出量は7億9,600万トン。世界全体の2.23%。



出典：国際海事機関(IMO)
「Third IMO GHG Study 2014-Executive Summary (MEPC 67/8)」



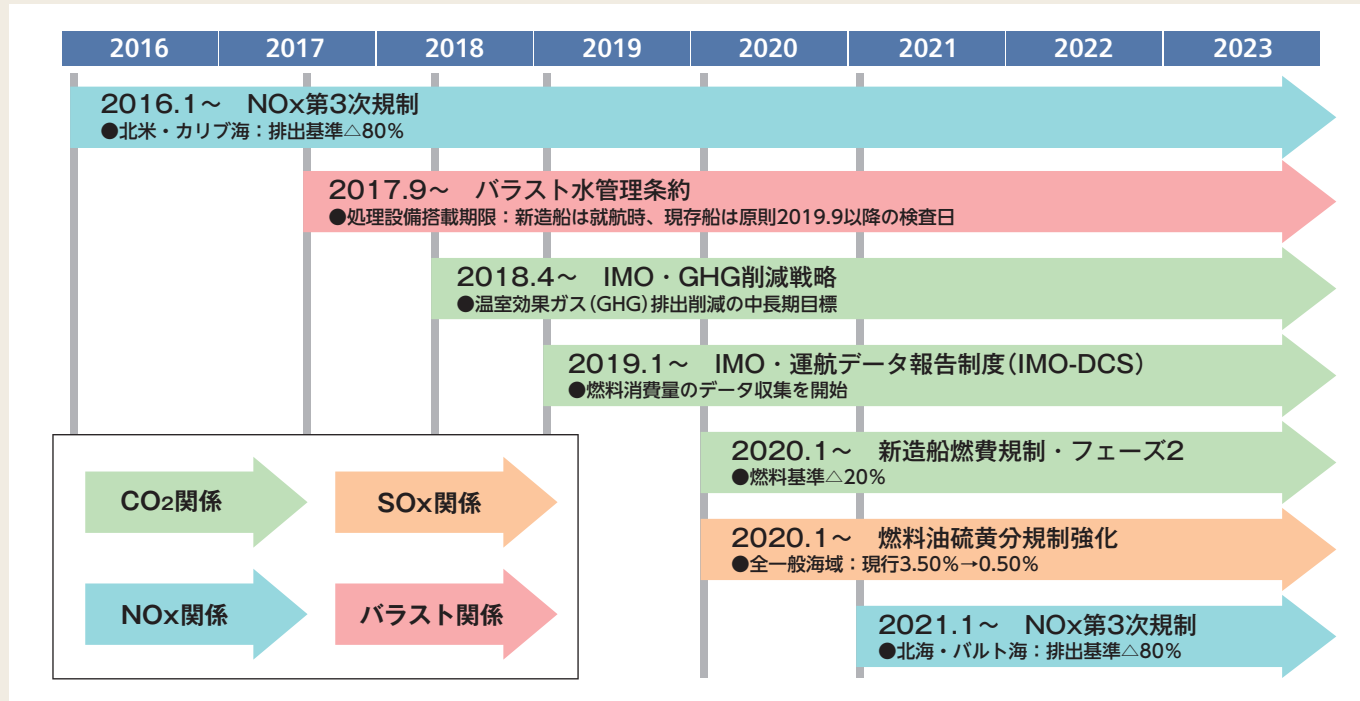
(単位：百万トン)

年	外航海運		世界全体 CO ₂ 排出量
	CO ₂ 排出量	(割合、%)	
2007	885	2.82	31,409
2008	921	2.86	32,204
2009	855	2.67	32,047
2010	771	2.29	33,612
2011	850	2.45	34,723
2012	796	2.23	35,640

3 国際海運における環境規制の動向

国際海事機関(IMO)によって採択された海洋汚染防止条約(MARPOL条約)やバラスト水管理規制条約等を通して、船舶からの温室効果ガス(GHG)及び硫黄酸化物(SOx)・窒素酸化物(NOx)の排出削減、また、バラスト水に含まれる水生生物による生態系破壊・漁業被害対策が統一的に規制されている。

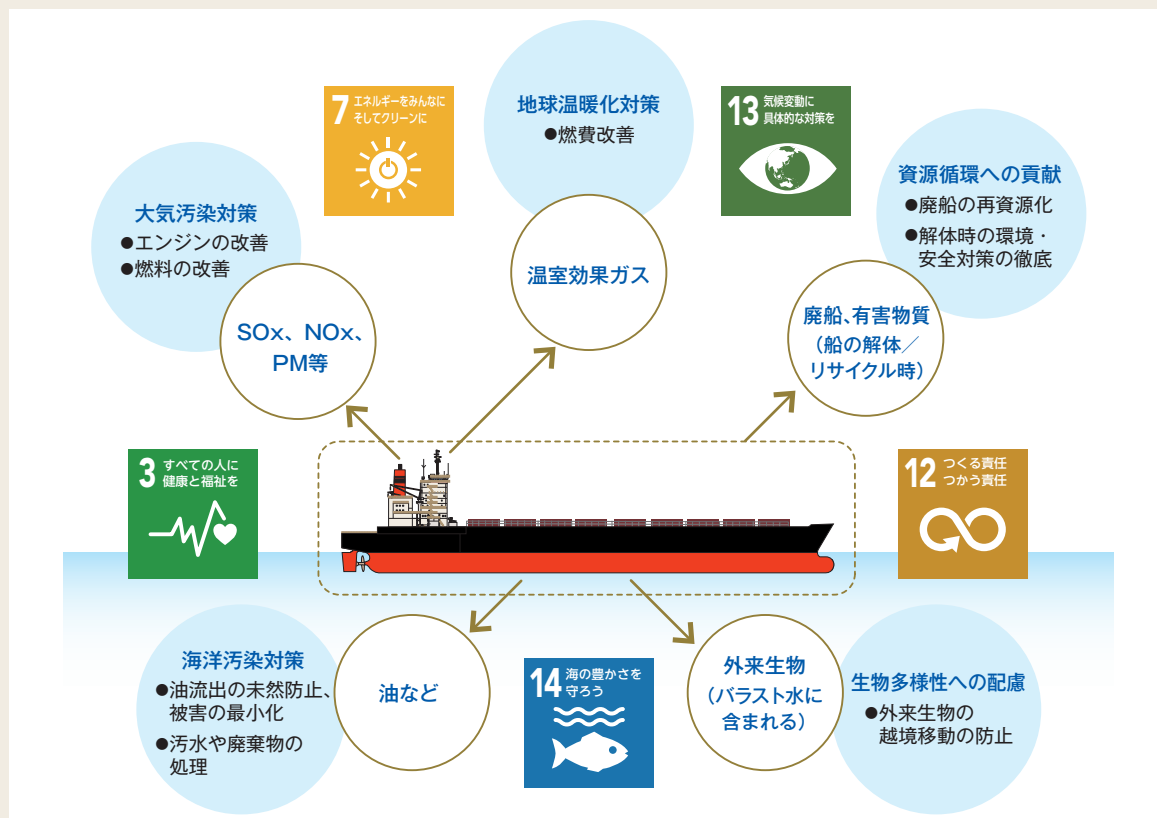
出典：国土交通省海事局



4 わが国海運の環境問題とSDGs

海運界では、事業活動に伴うさまざまな環境負荷を認識し、それらの負荷を小さくするよう対策を講ずるとともに、省エネ運航の改善や技術革新に取り組み、持続可能な開発目標(SDGs)に貢献している。

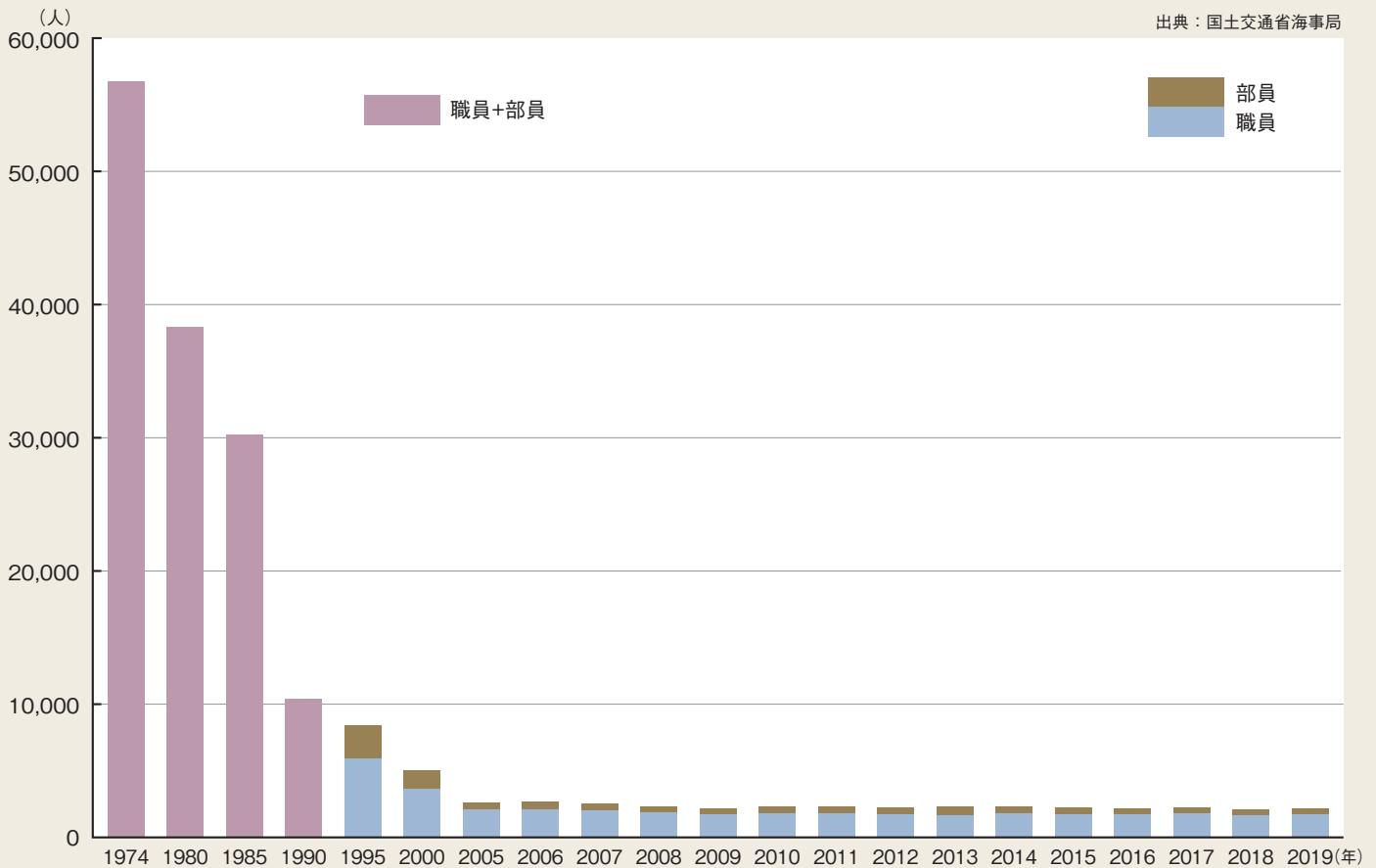
出典：日本船主協会「海運業界の挑戦 ー地球・海洋環境の保全に向けてー」



外航船員

1 外航日本人船員数の推移

外航日本人船員は近年2,100人～2,300人で推移している。



年	外航日本人船員数 (人)	職 員 (人)	部 員 (人)
1974	56,833	—	—
1980	38,425	—	—
1985	30,013	—	—
1990	10,084	—	—
1995	8,438	5,992	2,446
2000	5,030	3,659	1,371
2005	2,625	2,153	472
2006	2,650	2,108	542
2007	2,505	2,021	484
2008	2,315	1,870	445
2009	2,187	1,758	429
2010	2,306	1,834	472
2011	2,325	1,803	522
2012	2,208	1,732	476
2013	2,263	1,665	598
2014	2,271	1,836	435
2015	2,237	1,790	447
2016	2,188	1,765	423
2017	2,221	1,787	434
2018	2,093	1,663	430
2019	2,174	1,750	424

(注) ①1995年～2005年は国土交通省「船員統計」による。

②2006年以降の数値は、国土交通省海事局調べによる。

③1994年以前は、職員・部員の内訳は公表されていない。

1 輸送機関別国内貨物輸送量及び輸送分担率の推移

輸送機関別国内貨物輸送量に占める内航海運のシェアは、輸送量(貨物重量)では8%であるが、輸送活動量(貨物重量×輸送距離)では44%に及んでいる。内航海運は長距離・大量輸送に適した輸送機関であり、2018年度の平均輸送距離でみると505kmで、自動車の約10倍である。

出典：国土交通省海事局

年度	輸 送 量 (万トン)					輸 送 活 動 量 (百万トンキロ)					平 均 輸 送 距 離 (km)			
	内航	自動車	鉄道	航空	計	内航	自動車	鉄道	航空	計	内航	自動車	鉄道	航空
1965	17,965 (6.87)	219,320 (83.83)	24,352 (9.31)	3 (0.00)	261,640 (100)	80,635 (43.42)	48,392 (26.06)	56,678 (30.52)	21 (0.01)	185,726 (100)	449	22	233	700
1970	37,665 (7.17)	462,607 (88.06)	25,036 (4.77)	12 (0.00)	525,319 (100)	151,243 (43.18)	135,916 (38.80)	63,031 (18.00)	74 (0.02)	350,264 (100)	402	29	252	617
1975	45,205 (8.99)	439,286 (87.41)	18,062 (3.59)	19 (0.00)	502,572 (100)	183,579 (50.92)	129,701 (35.98)	47,058 (13.05)	152 (0.04)	360,490 (100)	406	30	261	800
1980	50,026 (8.36)	531,795 (88.91)	16,283 (2.72)	33 (0.01)	598,136 (100)	222,173 (50.63)	178,901 (40.77)	37,428 (8.53)	290 (0.07)	438,792 (100)	444	34	230	879
1985	45,239 (8.08)	504,805 (90.19)	9,629 (1.72)	54 (0.01)	559,726 (100)	205,818 (47.41)	205,941 (47.43)	21,919 (5.05)	482 (0.11)	434,160 (100)	455	41	228	893
1990	57,520 (8.65)	598,479 (90.03)	8,662 (1.30)	87 (0.01)	664,748 (100)	244,546 (44.86)	272,579 (50.00)	27,196 (4.99)	799 (0.15)	545,120 (100)	425	46	314	918
1995	54,854 (8.43)	587,720 (90.37)	7,693 (1.18)	96 (0.01)	650,363 (100)	238,330 (42.76)	293,001 (52.57)	25,101 (4.50)	924 (0.17)	557,356 (100)	434	50	326	963
2000	53,702 (8.60)	564,609 (90.43)	5,927 (0.95)	110 (0.02)	624,348 (100)	241,671 (41.92)	311,559 (54.05)	22,136 (3.84)	1075 (0.19)	576,441 (100)	450	55	373	977
2005	42,615 (8.01)	484,223 (90.99)	5,247 (0.99)	108 (0.02)	532,193 (100)	211,576 (37.18)	333,524 (58.62)	22,813 (4.01)	1,075 (0.19)	568,988 (100)	496	69	435	995
2010	36,673 (7.41)	453,810 (91.69)	4,365 (0.88)	100 (0.02)	494,948 (100)	179,898 (40.20)	246,175 (55.01)	20,398 (4.56)	1,032 (0.23)	447,503 (100)	491	54	467	1,032
2012	36,599 (7.66)	436,593 (91.43)	4,234 (0.89)	98 (0.02)	477,524 (100)	177,791 (43.44)	209,956 (51.30)	20,471 (5.00)	1,017 (0.25)	409,235 (100)	486	48	483	1,038
2013	37,833 (7.93)	434,575 (91.12)	4,410 (0.92)	102 (0.02)	476,920 (100)	184,860 (43.90)	214,092 (50.85)	21,071 (5.00)	1,049 (0.25)	421,072 (100)	489	49	478	1,028
2014	36,930 (7.81)	431,584 (91.25)	4,342 (0.92)	102 (0.02)	472,958 (100)	183,120 (44.10)	210,008 (50.6)	21,029 (5.06)	1,050 (0.25)	415,207 (100)	496	49	484	1,029
2015	36,549 (7.78)	428,900 (91.28)	4,321 (0.92)	101 (0.02)	469,871 (100)	180,381 (44.29)	204,316 (50.17)	21,519 (5.28)	1,056 (0.26)	407,272 (100)	494	48	498	1,046
2016	36,449 (7.61)	437,827 (91.45)	4,409 (0.92)	100 (0.02)	478,785 (100)	180,438 (43.68)	210,316 (50.91)	21,265 (5.15)	1,057 (0.26)	413,076 (100)	495	48	482	1,057
2017	36,013 (7.52)	438,125 (91.51)	4,517 (0.94)	100 (0.02)	478,755 (100)	180,934 (43.65)	210,829 (50.86)	21,663 (5.23)	1,066 (0.26)	414,492 (100)	502	48	480	1,066
2018	35,445 (7.50)	432,978 (91.59)	4,232 (0.90)	92 (0.02)	472,747 (100)	179,089 (43.69)	210,467 (51.35)	19,369 (4.73)	977 (0.24)	409,902 (100)	505	49	458	1,062

(注) ① () は、輸送機関別のシェア(%)である。②航空には超過手荷物、郵便物を含む。③自動車は1990年度より軽自動車を含む数字である(2010年度から自家用貨物軽自動車の数字は除く)。2010年度から調査・統計方法を変更。東日本大震災の影響により、北海道運輸局及び東北運輸局の2011年3月及び4月の数値は含まれない。
④単位未満の端数については四捨五入したため、合計と内計が一致しない場合がある。

2 主要品目別内航貨物輸送量の推移

内航海運が輸送する貨物は、石炭、鉄鋼、セメントなど産業の基礎となる物資が大半を占めるが、この10年間では石炭以外の輸送量は減少している。

出典：国土交通省「内航船舶輸送統計年報」

品 目	輸送トン数(千トン)			輸送トンキロ(百万トンキロ)			平均輸送距離(km)	
	2008年度	2018年度	18/08(%)	2008年度	2018年度	18/08(%)	2008年度	2018年度
石炭	9,675 (2.6)	13,444 (3.8)	139.0	3,373 (1.8)	2,089 (1.2)	61.9	349	155
鉄鋼	46,069 (12.2)	41,611 (11.7)	90.3	23,671 (12.6)	20,150 (11.3)	85.1	514	484
石灰石	33,759 (8.9)	33,636 (9.5)	99.6	12,736 (6.8)	12,943 (7.2)	101.6	377	385
砂利・砂・石材	23,430 (6.2)	20,344 (5.7)	86.8	5,639 (3.0)	6,247 (3.5)	110.8	241	307
セメント	38,837 (10.3)	35,116 (9.9)	90.4	19,718 (10.5)	18,241 (10.2)	92.5	508	519
石油製品	99,201 (26.2)	76,515 (21.6)	77.1	44,005 (23.4)	39,334 (22.0)	89.4	444	514
その他	127,734 (33.7)	133,779 (37.7)	104.7	78,717 (41.9)	80,085 (44.7)	101.7	616	599
合 計	378,705 (100.0)	354,445 (100.0)	93.6	187,859 (100.0)	179,089 (100.0)	95.3	496	505

(注) ① () 内は各品目別シェア(%)である。②単位未満の端数については、四捨五入したため、合計と内計とは一致しない場合がある。

3 船種別内航船腹量の推移

内航船舶は5,225隻、394万1,198総トン。船種別では「貨物船」が一番多く、隻数比67.5%、総トン数比54.4%を占めている。

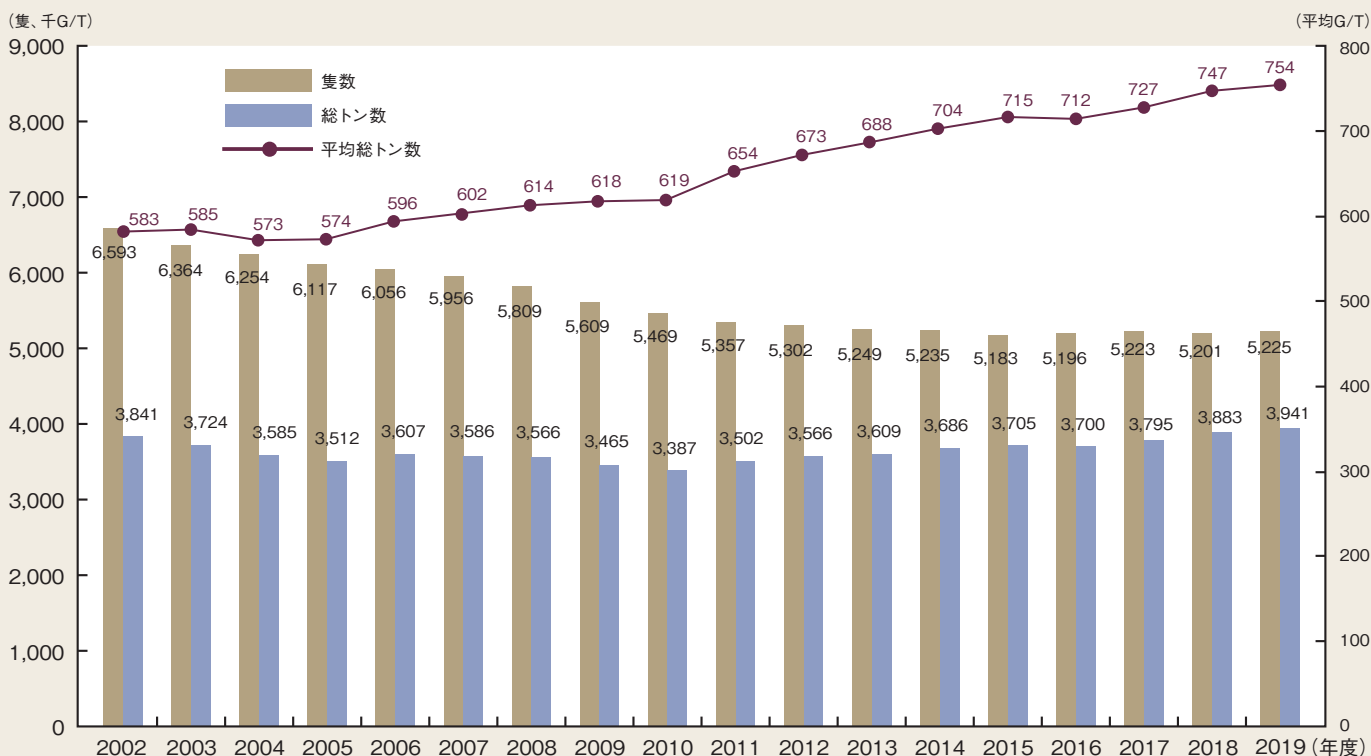
出典：国土交通省海事局

船種	質	2016年3月末		2017年3月末		2018年3月末		2019年3月末		2020年3月末	
		隻数	総トン数	隻数	総トン数	隻数	総トン数	隻数	総トン数	隻数	総トン数
貨物船	木船	546	6,963	541	6,911	543	6,893	540	6,817	395	5,580
	鋼船	2,893	1,812,458	2,919	1,861,829	2,956	1,973,577	2,960	2,089,414	3,131	2,140,085
	計	3,439	1,819,421	3,460	1,868,740	3,499	1,980,470	3,500	2,096,231	3,526	2,145,665
土・砂利・石材専用船	木船	2	39	2	39	2	39	2	39	2	39
	鋼船	351	222,497	348	223,145	344	221,988	331	213,810	323	211,394
	計	353	222,536	350	223,184	346	222,027	333	213,849	325	211,433
セメント専用船	木船	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	鋼船	145	414,547	140	394,740	137	390,155	135	386,967	134	388,963
	計	145	414,547	140	394,740	137	390,155	135	386,967	134	388,963
自動車専用船	木船	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	鋼船	16	73,162	16	72,884	12	54,893	12	49,569	11	45,130
	計	16	73,162	16	72,884	12	54,893	12	49,569	11	45,130
油送船	木船	5	52	5	52	5	52	5	52	3	33
	鋼船	937	977,127	935	944,048	934	949,310	929	938,178	938	950,539
	計	942	977,179	940	944,100	939	949,362	934	938,230	941	950,572
特殊タンク船	木船	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	鋼船	289	197,678	290	196,607	290	198,191	287	198,069	288	199,435
	計	289	197,678	290	196,607	290	198,191	287	198,069	288	199,435
合 計	木船	553	7,054	548	7,002	550	6,984	547	6,908	400	5,652
	鋼船	4,631	3,697,469	4,648	3,693,253	4,673	3,788,114	4,654	3,876,007	4,825	3,935,546
	計	5,184	3,704,523	5,196	3,700,255	5,223	3,795,098	5,201	3,882,915	5,225	3,941,198

4 内航船の隻数の推移と船舶の大型化の傾向

隻数はここ数年5,200隻前後で推移しているが年々大型化が進んでおり、内航船舶全体の平均総トン数は10年前に比べ22.0%増となっている。

出典：国土交通省海事局



5 船型別状況

隻数比で100総トン以上の中に占める499総トン以下は68%、1,000総トン以上は16%を占める。
また船型の大型化が年々進み内航船舶全体の平均総トン数は10年前に比べ21%の大型化がみられる。

出典：国土交通省海事局

船 型	2010年3月31日				2020年3月31日											
	隻数 (構成比%)		総トン数 (構成比%)		油送船(注)				貨物船(注)				合 計			
					隻数 (構成比%)		総トン数 (構成比%)		隻数 (構成比%)		総トン数 (構成比%)		隻数 (構成比%)		総トン数 (構成比%)	
～99G/T	1,821	32.5	50,704	1.5	234	19.1	11,509	1.0	1,550	38.8	32,070	1.2	1,784	34.1	43,579	1.1
100G/T～199G/T	1,093	19.5	190,976	5.5	195	15.9	33,573	2.9	470	11.8	80,355	2.9	665	12.7	113,928	2.9
200G/T～299G/T	264	4.7	67,846	2.0	43	3.5	11,426	1.0	305	7.6	79,351	2.8	348	6.7	90,777	2.3
300G/T～399G/T	202	3.6	70,856	2.0	63	5.1	22,161	1.9	137	3.4	47,615	1.7	200	3.8	69,776	1.8
400G/T～499G/T	1,127	20.1	549,499	15.9	240	19.5	118,112	10.3	842	21.1	413,245	14.8	1,082	20.7	531,357	13.5
500G/T～699G/T	249	4.4	162,892	4.7	40	3.3	25,197	2.2	116	2.9	71,996	2.6	156	3.0	97,193	2.5
700G/T～999G/T	337	6.0	277,385	8.0	227	18.5	189,809	16.5	225	5.6	175,780	6.3	452	8.7	365,589	9.3
1,000G/T～1,999G/T	154	2.7	228,938	6.6	30	2.4	46,495	4.0	98	2.5	139,854	5.0	128	2.4	186,349	4.7
2,000G/T～2,999G/T	85	1.5	231,140	6.7	26	2.1	69,298	6.0	40	1.0	104,376	3.7	66	1.3	173,674	4.4
3,000G/T～4,499G/T	146	2.6	539,359	15.6	123	10.0	454,107	39.5	55	1.4	208,629	7.5	178	3.4	662,736	16.8
4,500G/T～6,499G/T	54	1.0	279,966	8.1	4	0.3	18,107	1.6	55	1.4	286,375	10.3	59	1.1	304,482	7.7
6,500G/T～	77	1.4	815,779	23.5	4	0.3	150,213	13.1	103	2.6	1,151,544	41.3	107	2.0	1,301,757	33.0
合 計	5,609	100.0	3,465,341	100.0	1,229	100.0	1,150,007	100.0	3,996	100.0	2,791,190	100.0	5,225	100.0	3,941,197	100.0
うち100G/T以上	3,788	67.5	3,414,637	98.5	995	81.0	1,138,498	99.0	2,446	61.2	2,759,120	98.9	3,441	65.9	3,897,618	98.9
平均G/T	618				936				698				754			

(注) ①内外航併用船及び港運併用船を含み、通関前の塩の二次輸送船、原油の二次輸送船及び沖縄復帰にかかわる石油製品用許認可船を含まない。 ②20総トン未満の営業船を含む。
③ここでは油送船に油送船、特殊タンク船の数値の合計を、貨物船にセメント専用船、自動車専用船、土・砂利・石材専用船、その他貨物船の数値の合計を計上している。
④単位未満の端数については四捨五入したため、合計と内計が一致しない場合がある。

6 船齢別状況

内航船舶を船齢別にみると7年未満が隻数比16%、総トン数比29%となっている。14年以上の老齢船は隻数比69%、総トン数比47%。

出典：国土交通省海事局

船 齢	隻数(構成比%)						総トン数								
	油送船(注)		貨物船(注)		合 計		油送船(注)			貨物船(注)			合 計		
	隻数	構成比 (%)	隻数	構成比 (%)	隻数	構成比 (%)	総トン数 (千トン)	平均 トン数	構成比 (%)	総トン数 (千トン)	平均 トン数	構成比 (%)	総トン数 (千トン)	平均 トン数	構成比 (%)
新造船	20	1.6	46	1.2	66	1.3	10	480	0.8	57	1,246	2.1	67	1,014	1.7
1～7	227	18.5	547	13.7	774	14.8	253	1,112	22.0	831	1,520	29.8	1,084	1,400	27.5
7～14	280	22.8	479	12.0	759	14.5	469	1,675	40.8	479	999	17.1	948	1,248	24.0
14～	702	57.1	2,924	73.2	3,626	69.4	419	597	36.4	1,424	487	51.0	1,843	508	46.8
合 計	1,229	100.0	3,996	100.0	5,225	100.0	1,150	936	100.0	2,791	698	100.0	3,941	754	100.0

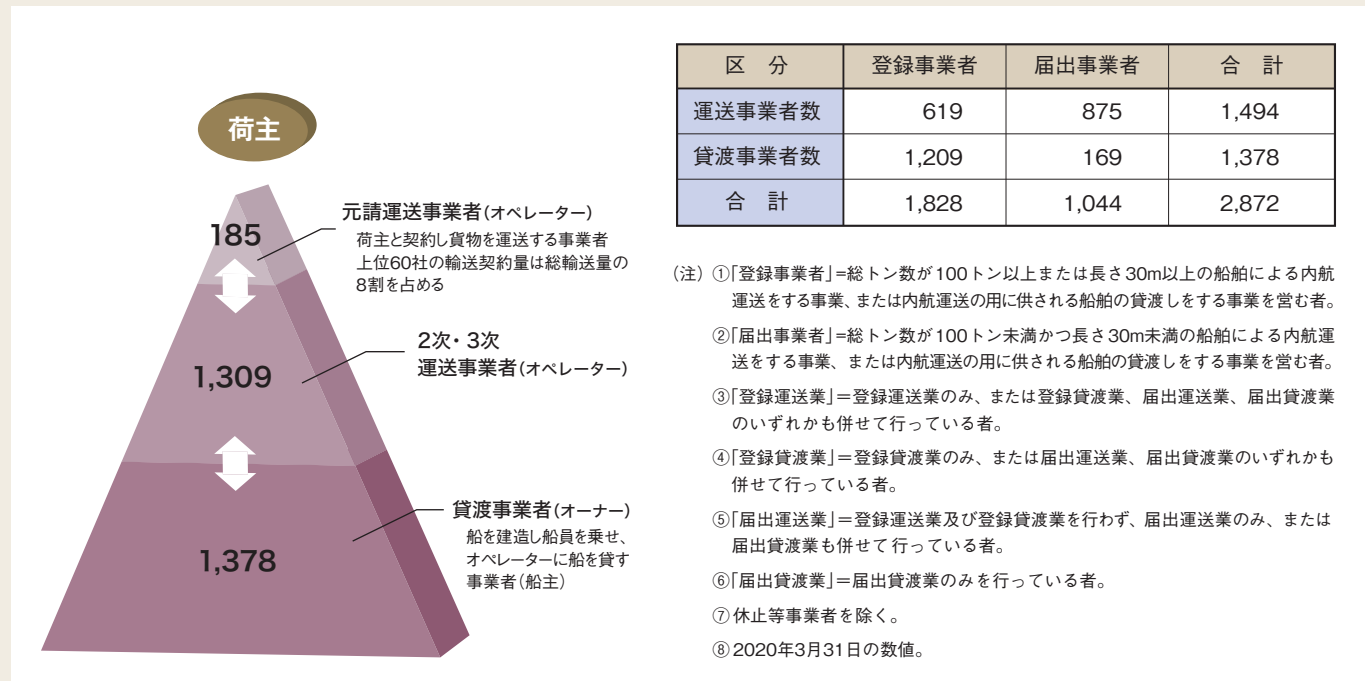
(注) ①内外航併用船及び港運併用船を含み、塩の二次輸送船、原油の二次輸送船及び沖縄復帰にかかわる石油製品用許認可船を含まない。 ②年齢不詳船舶を除く。
③20総トン未満の営業船を含む。 ④ここでは油送船に油送船、特殊タンク船の数値の合計を、貨物船にセメント専用船、自動車専用船、土・砂利・石材専用船、その他貨物船の数値の合計を計上している。 ⑤単位未満の端数については四捨五入したため、合計と内計が一致しない場合がある。 ⑥2020年3月31日現在の数値。

7 内航海運事業者数

事業者数は3,376社。このうち休止等事業者が504、営業事業者は2,872。

内訳は登録事業者数では運送事業者が619、貸渡事業者が1,209の計1,828。届出事業者では、運送事業者が875、貸渡事業者が169の計1,044となっている。

出典：国土交通省海事局、日本内航海運組合総連合会



8 登録事業者数の推移

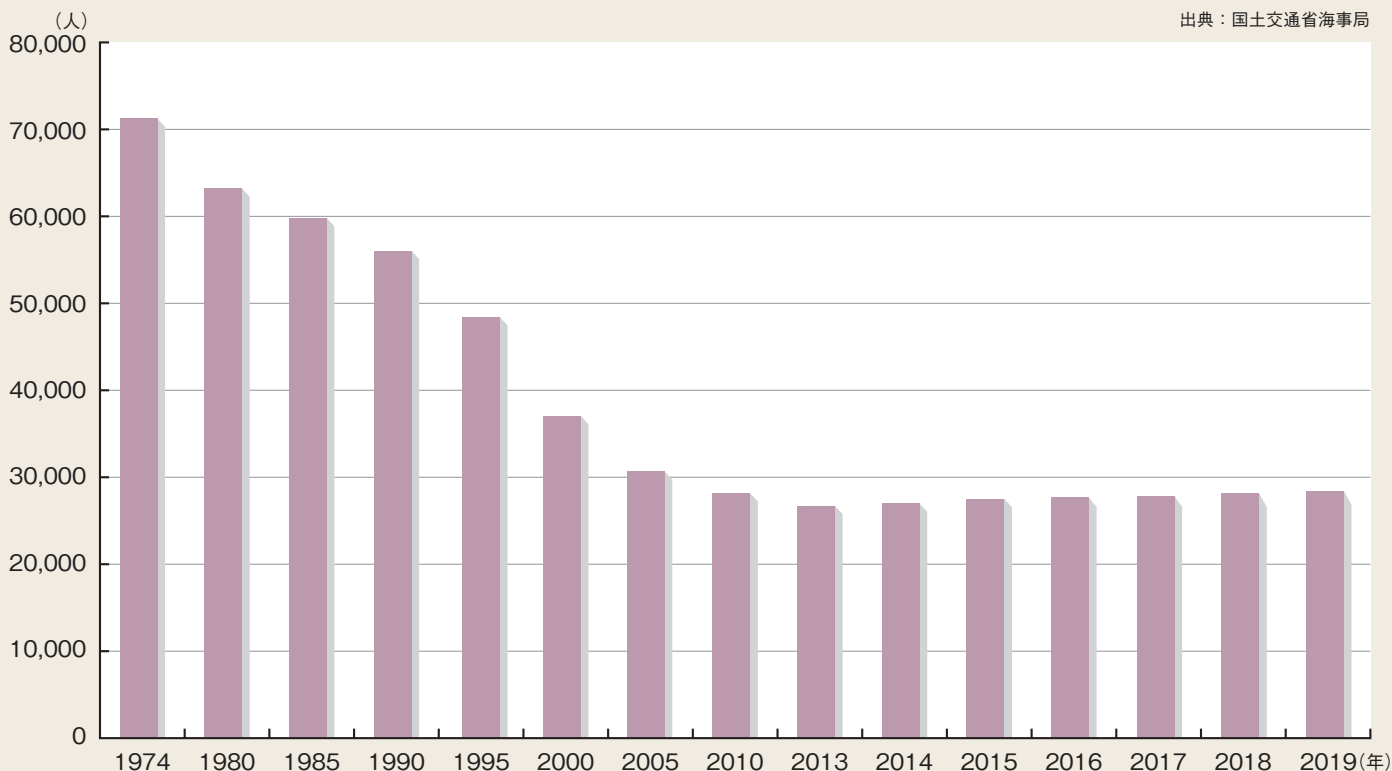
出典：国土交通省海事局

年 月 日	運送事業者数	貸渡事業者数	合 計	備 考
1967年3月31日	9,149	1,792	10,941	1967年4月1日許可制移行
1970年3月31日	1,175	9,129	10,304	1969年10月1日許可制完全実施
1972年3月31日	897	6,057	6,954	1971年8月1日許可対象を100G/T以上に変更
1975年3月31日	901	6,051	6,952	1975年度以降、実事業者数
1980年3月31日	794	5,322	6,116	
1985年3月31日	750	4,868	5,618	
1990年3月31日	725	3,463	4,188	1990年度以降、実事業者数(休止等事業者を除く)
1995年3月31日	712	3,124	3,836	
2000年3月31日	680	2,671	3,351	
2005年3月31日	613	2,206	2,819	2005年4月1日登録制移行
2010年3月31日	701	1,686	2,387	
2015年3月31日	641	1,395	2,036	
2016年3月31日	637	1,344	1,981	
2017年3月31日	633	1,317	1,950	
2018年3月31日	640	1,290	1,930	
2019年3月31日	623	1,239	1,862	
2020年3月31日	619	1,209	1,828	

1 内航船員数の推移

内航船員数は貨物船と旅客船の船員を合わせて、28,435人である。

出典：国土交通省海事局



(単位：人)

年	1974	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
内航船員数	71,269	63,208	59,834	56,100	48,333	37,058	30,762	28,160	26,854	27,073	27,490	27,639	27,844	28,142	28,435

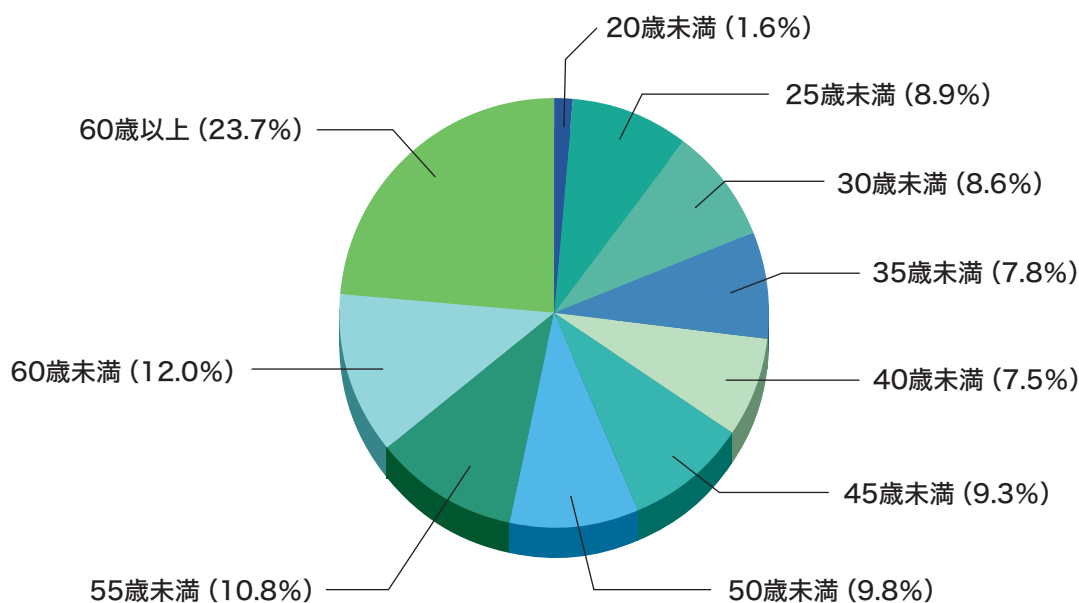
(注) ①海事局調べによる(2005年までは国土交通省「船員統計」による)。

②船員数は乗組員数と予備船員数を合計したものであり、わが国の船舶所有者に雇用されている船員である。

2 内航船員の年齢構成

50歳以上の割合が約46%であるが、30歳未満の若年船員の割合は微増傾向にある。

出典：国土交通省海事局



(注) 2019年10月現在。

1 わが国海事クラスターの構成

海運業は、造船業及び船用工業とともにわが国海事クラスターの中心的存在。

作成：（公財）日本海事センター



2 わが国海事クラスターの規模

わが国海事クラスター全体の付加価値額は3兆7,149億円（GDPの約1%）、売上高は11兆2,737億円、従事者数は34万人。（いずれも2011年の数字）

作成：（公財）日本海事センター

	中核的海事産業	中核的海事産業以外	関連産業	隣接産業等	海事クラスター全体
付加価値額(億円)	26,106	7,963	2,199	882	37,149
売上高(億円)	86,219	15,935	8,902	1,680	112,737
従事者数(人)	220,264	82,643	17,483	19,832	340,223

外航海運年表

西暦		1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	
元号		昭22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	
時代区分		復興金融公庫・船舶公団方式			見返資金融資			朝鮮戦争後不況～スエズブーム				スエズブーム後の長期不況							企業集約再建整備					
外航トピックス		☆第1次(22.9)～第4次(24.2)計画造船(復興金融公庫融資による船舶公団の共有建造方式) ☆日本海運協会解散、日本船主協会創立(海運の民間還元を実現)(22.6) ☆日本船主協会、社団法人として設立認可(23.10) ☆総司令部の司令により、大型タンカー9隻がベルシャ湾岸重油積み取りに出航(戦後初の遠洋不定期航路)(23.4)			☆海上運送法の公布(24.6) ☆海運民営還元(25.4) ☆日本船のパナマ運河通航許可(25.8) ☆日本船の北米諸港向け不定期船配船許可(25.8) ☆大阪商船の南米定期航路開設許可(戦後初の遠洋定期航路)(25.11) ☆第5次(24)～第8次(27)計画造船(米国対日援助見返資金の導入)(27.4.28 独立達成により廃止) ☆船舶特別償却制度創設(26) ☆バンコク、インド、パキスタン、ニューヨーク、シアトル、ラングーン、カルカッタおよび韓国の各定期航路開設許可(26) ☆日本郵船の欧州定期航路開設許可(27)			☆日本開発銀行融資の開始(28～) ☆利子補給制度の開始(28～) ☆三井船舶、東廻り世界一周航路開始(28.3)				☆利子補給制度の停止(32) ☆日本船主協会、国際海運会議所(ICS)(32.4)・国際海運連盟(ISF)に加入(32.5) ☆ロイズ船級協会、1957 年世界造船の進水高実績で日本が第一位と発表(33.1) ☆日本最初の鉱石専用船「新田丸」(照国海運)が竣工 (33.1) ☆日ソ定期航路民間協定調印(33) ☆世界最大のタンカー(当時)「日章丸」(13万重量トン、出光タンカー) 進水(37.7) ☆利子補給制度の復活(35 ～ 49) ☆再建整備二法(海運業の再建整備に関する臨時措置法、外航船舶建造融資利子補給および損失補償法および日本開発銀行に関する外航船舶建造融資利子補給臨時措置法の一部を改正する法律)の公布(38.7) ☆第19次(38年度)計画造船から対象が集約企業のみに限定							☆集約体制の発足(39.4) ☆ニューヨーク航路運営会社発足(39.4) ☆外航中小船主労務協会発足(40.9) ☆世界最大のタンカー(当時)「東京丸」(15万重量トン、東京タンカー) 進水(40.9) ☆全日本海員組合、労働協約改定要求で長期スト(40.11 ～ 41.1.30) ☆海上コンテナ輸送体制決定(41.12) ☆京浜・阪神外貿埠頭公団設立(42.10) ☆邦船コンテナ輸送開始(北米西岸)(43.8) ☆日本初のコンテナ船「箱根丸」(日本郵船)、ロサンゼルスに向け東京港を出航(43.9) ☆シーランド(米国)がフルコンテナ船により欧州航路開始(41)					
日本の外航海運政策 (海運造船合理化審議会答申、交通政策審議会(海事分科会)答申など)					*海運造船合理化審議会「今後の船腹拡充方策如何」、「海運の経営力強化に関する方策如何」、「建造船価の低減に関する方策如何」答申(27.11)							*海運造船合理化審議会「今後における船舶の拡充ならびに海運企業の経営基盤の強化に関する方策について」答申(33.8) *海運造船合理化審議会「わが国海運の国際競争力強化のための具体的方策について」答申(34.11) *海運造船合理化審議会「国民所得倍増計画に基づく経済成長に対応し、外航船腹を飛躍的に拡大する必要があると思われる。日本海運の現状を考慮し、この目標を達成するための具体的方策をうかがいたい」答申(36.11) *海運造船合理化審議会「海運対策について」建議(37.12)							*海運造船合理化審議会「わが国の海上コンテナ輸送体制の整備について」答申(41.9) *海運造船合理化審議会「海運業の再建整備計画期間の終了を控えて今後の海運対策は如何にあるべきか」答申(43.11)					
一般トピックス		★「傾斜生産方式(石炭・鉄鋼重点主義)」の導入(21.12 第1次吉田内閣)			★為替レート設定(1ドル＝360円)(24.4) ★朝鮮戦争勃発(25.6) ★日本開発銀行発足(26.5) ★復興金融公庫解散(27.1)			★朝鮮戦争休戦協定(28.7) ★経済白書「もはや戦後ではない」(31.7) ★スエズ運河閉鎖(31.11)				★スエズ運河再開(32.4) ★「国民所得倍増計画(36 ～ 45年度)」を決定(35.12)							★日本OECD加盟、IMF8条国へ移行(39.4) ★米国、北ベトナム爆撃開始(39.8) ★東海道新幹線開業(39.10) ★東京オリンピック(39.10) ★中東戦争勃発に伴いスエズ運河閉鎖(42.6)					
船舶建造	利子補給(対開銀)	—	—	—	—	—	—	↔		—	—	—	—	←										
	利子補給(対市中)	—	—	—	—	—	—	↔				—	—	—	←									
	計画造船建造量(隻)	51	36	42	35	48	36	37	19	19	34	46	25	19	16	27	13	18	41	65	75	56	57	
	計画造船建造量(千GT)	78	95	275	243	374	293	312	154	184	314	415	257	180	192	548	393	567	1,209	1,825	1,909	2,033	2,308	
	建造実績(隻)			70	76	87	97	122	180	158	297	420	452	503	653	627	564	699	699	699	733	905	1,118	
	建造実績(千GT)			118	232	430	513	731	433	561	1,538	2,309	2,234	1,728	1,839	1,719	2,073	2,269	3,764	4,886	6,495	7,217	8,349	
日本商船隊	日本船(隻)	17	17	16	82	109	254	304	348	371	385	433	523	606	641	683	726	760	767	803	876	963	1,278	
	外国用船(隻)									27	60	88	40	59	120	142	110	94	142	216	227	237	296	
	合計(隻)	17	17	16	82	109	254	304	348	398	445	521	563	665	761	825	836	855	909	1,019	1,103	1,200	1,574	
	合計(千GT)																						19,420	
	合計(千D/W)																						31,624	
輸送活動	海上貿易量(輸出)(百万M/T)	1.8	1.8	2.6	3.1	3.6	5.1	4.0	5.7	7.7	8.2	7.7	8.7	9.5	11.1	11.1	13.2	16.0	17.6	23.4	24.8	24.9	30.4	
	積取比率(輸出)	81.7%	69.2%	33.8%	17.3%	26.6%	31.6%	37.7%	43.3%	43.5%	51.0%	58.5%	64.4%	60.8%	56.3%	58.6%	58.4%	55.7%	57.9%	44.1%	44.2%	47.3%	54.2%	
	海上貿易量(輸入)(百万M/T)	4.5	7.4	12.8	10.5	20.7	23.7	31.3	33.5	36.7	46.5	58.7	49.1	65.0	87.6	115.2	120.7	144.6	173.8	199.4	229.8	284.9	330.4	
	積取比率(輸入)	8.0%	8.4%	11.4%	26.8%	32.6%	45.5%	43.0%	46.7%	52.1%	52.9%	48.0%	61.1%	57.8%	55.9%	50.3%	55.2%	55.6%	54.8%	56.5%	58.2%	57.5%	59.4%	
経済	GDP(対前年比)	10.0%	16.4%	3.9%	12.2%	13.5%	10.5%		3.3%	7.9%	7.5%	7.8%	6.2%	9.4%	13.1%	11.9%	8.6%	8.8%	11.2%	5.7%	10.2%	11.1%	11.9%	
	為替レート(円/ドル)		270.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	360.00	
船社状況	大手船社数(社)														12	12	12	12	6	6	6	6	6	
	売上高(百万円)														161,582	175,573	180,358	202,808	244,811	283,682	336,116	379,919	431,060	
	経常利益(百万円)														3,129	2,021	369	6,727	13,423	14,958	26,744	29,016	26,550	
	配当社数(社)														1	1	0	0	0	3	4	6	6	

(注) 計画造船建造量は海事産業研究所編「続 日本海運戦後助成史」(1985年)、建造実績(100GT以上)はIHS(旧ロイド船級協会)「WORLD FLEET STATISTICS」等による。日本商船隊船腹量は、昭和42年までが3,000総トン以上、同43年以降が2,000総トン以上で、海事産業研究所「前掲文献」及び日本海事広報協会「数字でみる日本の海運・造船」(各年版)等より。輸送活動は日本船主協会「海運統計要覧」より。なお、昭和22年から同30年までの日本商船隊輸送量及び積取比率は日本籍船の数字。GDP(実質)は、経済企画庁「日本の経済統計」及び内閣府「統計情報・調査結果」より。為替レートは、「国際統計要覧」及び「世界の統計」、三菱UFJリサーチ&コンサルティングより。船社状況は、各社「有価証券報告書」より。

外航海運年表

西暦		1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985
元号		44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
時代区分		新海運政策						オイルショック後不況				緊急整備対策			三部門同時不況			
外航トピックス		☆世界最大のタンカー(当時)「日石丸」(37万2,400 重量トン、東京タンカー)進水(46.4) ☆ニューヨークコンテナ航路開始。ニューヨークコンテナ航路の邦船協調5社による第1船「東米丸」(山下新日本汽船)出航(47.8) ☆第25次(44年度)計画造船から非集約会社も融資対象に(集約企業とは融資比率に格差あり) ☆全日本海員組合、労働協約改定要求で長期スト(47.4～7) ☆世界最大のタンカー(当時)「グロブティック・トウキョウ」(48万3,644重量トン)進水(47.10)						☆世界最大のタンカー(当時)「日精丸」(48万4,337 重量トン、東京タンカー) 竣工(50.6) ☆日ソ民間海運会議でシベリア・ランド・ブリッジ (SLB)への日本船参加が実現(50) ☆初の商用海事通信衛星「MARISAT」、大西洋上に打ち上げ(51.2) ☆海洋2法(領海法、漁業水域暫定措置法)成立(52.5) ☆国旗差別対抗法成立(52.5) ☆マラッカ・シンガポール海峡沿岸3カ国、同海峡通航分離方式を策定(52.8) ☆タンカー備蓄(53.10) ☆第31次(50年度)計画造船から集約・非集約企業の融資比率格差廃止 ☆利子補給制度の停止 ☆政府、仕組船買い戻しを含む国際収支円高対策を決定(53.4)				☆船員制度近代化委員会発足(54.4) ☆利子補給制度の復活(54～56) ☆非集約企業も利子補給の対象に(54) ☆新パナマ運河条約発効(54.10) ☆世界初の省エネ帆装商船「新愛徳丸」(1,600重量トン)進水(55.8) ☆スエズ運河拡張第1期工事が完成、15万トンのタンカーが満載航行可能に(55.12) ☆外航二船主団体と全日本海員組合、ペルシャ湾内の北緯29度30分以北の海域への就航を見合わせることを確認(56.2)			☆利子補給制度の打ち切り(57) ☆船員法・船舶職員法の改正(運航士制度の創設)(57.5) ☆INMARSAT、国際海事衛星通信サービスの提供を開始(57.2) ☆第3次国連海洋法会議第11会期を開催、国連海洋法条約を採択(57.3) ☆政府、STCW条約を批准(1993年4月28日発効)(57.5) ☆政府、国連海洋法条約に署名(58.2) ☆日本初のLNG船「尾州丸」(7万重量トン、川崎汽船)就航(58.8) ☆ロンドンの保険業界、船舶戦争保険の基本料率を一挙に4倍引き上げ(58.10) ☆三光汽船倒産(60.8)			
日本の外航海運政策 (海運造船合理化審議会答申、交通政策審議会(海事分科会)答申など)		*海運造船合理化審議会「最近における経済動向及びその将来にわたる見通しに基づくわが国外航海運に関する対策如何」答申(45.11) *海運造船合理化審議会「最近におけるわが国外航海運をめぐる環境の変化にかんがみ、今後の外航海運対策はいかにあるべきか」答申(49.12)						*海運造船合理化審議会海運対策部会小委員会「今後の外航海運政策について」中間報告(53.6)				*海運造船合理化審議会「今後長期にわたる我が国外航海運政策はいかにあるべきか」答申(55.3)			*海運造船合理化審議会「今後の外航海運政策のあり方について」答申(60.6)			
諸外国海運政策		○定期船同盟行動憲章条約の採択(49.4)													○1984年米国海運法の成立(米国)(59) ○マン島における国際船舶制度の導入(英国)(59)			
一般トピックス		★ニクソンショック(46.8) ★スミソニアン協定(1ドル＝360円→308円に設定)(46.12) ★変動為替相場制への移行(48.2) ★オイルショック(第1次石油危機)(48.11)						★ベトナム戦争終結(50.4) ★スエズ運河8年ぶりに再開(50.6) ★第2次石油危機(53秋)				★イラン・イラク紛争(55.9)			★プラザ合意(円高の進行)(60.9)			
船舶建造	利子補給(対開銀)							—	—	—	—				—	—	—	—
	利子補給(対市中)							—	—	—	—				—	—	—	—
	計画造船建造量(隻)	57	45	41	37	25	25	14	10	12	9	32	31	25	16	19	25	17
	計画造船建造量(千GT)	2,474	2,624	3,218	3,304	1,985	1,940	945	165	258	302	1,627	1,839	1,802	679	998	1,565	1,215
	建造実績(隻)	1,113	1,037	992	885	1,080	1,045	930	912	1,107	1,046	993	943	839	800	755	902	817
	建造実績(千GT)	9,168	10,100	11,132	12,857	14,751	16,894	16,991	15,868	11,708	6,307	4,697	6,094	8,400	8,163	6,670	9,711	9,503
日本商船隊	日本船(隻)	1,424	1,508	1,531	1,580	1,506	1,427	1,317	1,274	1,234	1,204	1,188	1,176	1,173	1,175	1,140	1,055	1,028
	外国用船(隻)	236	462	592	655	820	973	1,152	1,142	1,174	190	1,200	1,329	1,232	1,165	1,035	1,080	1,407
	合計(隻)	1,660	1,970	2,123	2,235	2,296	2,400	2,469	2,416	2,408	2,494	2,388	2,505	2,405	2,340	2,175	2,135	2,435
	合計(千GT)	22,926	28,215	34,243	40,508	48,340	54,578	59,488	62,938	62,830	65,317	63,021	65,227	61,940	62,468	57,193	57,015	62,161
	合計(千D/W)	37,803	47,007	57,794	69,051	83,439	94,839	105,100	112,441	111,966	116,840	112,691	115,205	108,478	109,338	99,428	97,759	105,652
輸送活動	海上貿易量(輸出)(百万M/T)	36.8	40.0	50.1	49.6	51.2	63.6	61.1	71.0	73.1	73.5	76.0	76.5	77.3	75.9	83.2	84.0	81.8
	積取比率(輸出)	56.1%	54.6%	52.0%	49.2%	42.7%	48.4%	53.8%	54.5%	52.8%	52.5%	52.3%	54.7%	54.7%	54.0%	51.2%	53.4%	54.0%
	海上貿易量(輸入)(百万M/T)	387.7	467.8	489.2	512.9	601.2	612.5	554.6	576.5	592.7	567.5	618.5	605.6	567.4	559.1	547.4	599.1	593.0
	積取比率(輸入)	60.8%	63.0%	65.2%	62.6%	65.9%	66.4%	73.8%	76.2%	73.9%	72.5%	73.0%	71.6%	69.9%	69.3%	69.8%	66.7%	67.6%
経済	GDP(対前年比)	12.0%	10.3%	4.4%	8.4%	8.0%	－1.2%	3.1%	4.0%	4.4%	5.3%	5.5%	2.8%	2.9%	2.8%	1.6%	3.1%	5.1%
	為替レート(円/ドル)	360.00	360.00	314.80	302.00	280.00	301.00	296.79	292.80	240.00	194.60	219.14	226.75	220.54	249.05	237.51	237.52	238.54
船社状況	大手船社数(社)	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
	売上高(百万円)	503,809	631,599	700,769	712,723	1,050,695	1,528,611	1,512,584	1,690,004	1,590,926	1,366,796	1,784,646	2,102,589	2,234,016	2,128,625	1,935,098	2,066,260	1,927,984
	経常利益(百万円)	20,552	50,213	36,786	21,259	65,574	75,196	－7,528	13,942	－17,826	－8,858	39,870	47,272	66,491	16,392	－2,243	17,016	12,419
	配当社数(社)	6	6	6	5	6	6	5	4	4	4	4	5	5	5	3	2	2

外航海運年表

西暦		1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
元号		61	62	63	平元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
時代区分		円高不況	平成景気				平成不況（バブル崩壊）					M&A・コンソーシアム再編／国際船舶制度						
外航トピックス		☆中村汽船、協成汽船等円高倒産続出(61) ☆特定外航船舶解撤促進臨時措置法(61.3) ☆「特定不況業種、特定不況地域関係労働者の雇用安定に関する特別措置法」に基づく特定不況業種に一般外航海運業(油送船に限る)が指定(1988年には一般外航海運業の全船種に拡大)(61) ☆USL(米国)倒産(61.11)	☆国際競争力回復のため、世界で最も少数精鋭化された船(パイオニアシップ)の実現を目指すことで、官公労使が合意(62) ☆緊急雇用対策実施に伴う離職船員の受け皿機構発足(62.4) ☆海員の1日あたりの労働時間を一律8時間にする等、船員法を一部改正(63) ☆昭和海運が中国を除く定期船部門から撤退(63.7) ☆山下新日本汽船・ジャパンラインが定期船部門を分離、日本ライナーシステム設立(63.7) ☆(旧)専属オーナーの統合(オリオン SHIPPING、国際エネルギー輸送等)(元.4) ☆日本初の本格的な外航クルーズ客船「おせあにつくぐれいす」(昭和海運)ははじめ次々に就航。「クルーズ元年」と言われる(元) ☆山下新日本汽船とジャパンラインが合併、ナビックスライン設立(元.6) ☆新たなマルシップ混乗の開始(ただし新造限定)(2.3) ☆計画造船という用語廃止(2年度より)OECDとの関係 ☆米大統領、タンカーの二重構造義務付けを内容とする Oil Pollution Act 1990(OPA 90)に署名(2.8)				☆日本郵船が日本ライナーシステムを吸収合併(3.10) ☆外航中小船主労務協会解散(4.1) ☆近代化船混乗(5～) ☆邦船5社グループ、カタール液化ガス社(QLGC)と日本向け液化天然ガス(LNG)の海上輸送に合意(5.10) ☆政府のCOMEX緊急輸入によるCOMEX輸送実施(5) ☆政府、油濁2条約(69CLC／71FC)を改正する92年議定書を批准(6.8) ☆国際海上人命安全条約(SOLAS)締約国会議をロンドンで開催、国際安全管理コード(ISMコード)等を採択(6) ☆祝日法改正(1996年7月20日から「海の日」が14番目の国民の祝日に)(7.2)					☆国際船舶制度導入(8～) ☆国際コンテナ輸送における世界的コンソーシアムの再編(8.1、10.2) ☆ナホトカ号沈没(9.1)、ダイヤモンド・グレース号原油流出事故(9.7) ☆米国連邦海事委員会(FMC)制裁発動(9.9)、邦船3社が課徴金150万ドルを支払う(9.10) ☆カタールLNGプロジェクト第1船「アルズバーラ」(大阪商船三井船舶)が中部電力・川越基地に入港(9.1) ☆船舶職員法改正：外国人船員承認制度(日本人船長・機関長2名配乗体制が可能)導入(10.5) ☆アロンドラ・レインボー号ハイジャック事件発生(11.10)、エリカ号フランス沖で折損沈没、油濁事故発生(11.12) ☆外航労務協会の業務を日本船主協会(外航労務部会)に移管(13.1) ☆TAJIMA号事件発生(14.4) ☆日本郵船が昭和海運を吸収合併(10.10) ☆大阪商船三井船舶とナビックスラインが合併、商船三井発足(11.4)						
日本の外航海運政策 (海運造船合理化審議会答申、交通政策審議会(海事分科会)答申など)			*海運造船合理化審議会海運対策部会WG中間報告(62.1) *海運造船合理化審議会海運対策部会WG報告(北米定航問題)(63.6) *海運造船合理化審議会海運対策部会WG「フラッグینگ・アウトの防止策について」報告(63.12)				*運輸政策審議会国際部会国際物流小委員会「国際化時代における外航海運のあり方について」答申(3.5) *船員制度近代化委員会「今後の船員制度近代化のあり方」提言(4.6) *外航海運・船員問題懇談会「国際船舶制度創設の提言」報告(7.5)					*海運造船合理化審議会海運対策部会「新たな経済環境に対応した外航海運のあり方」報告(9.5)						
諸外国海運政策			○国際船舶制度の導入(ノルウェー)(62)、(デンマーク)(63)、(ドイツ)(元)									○トン数標準税制の導入(オランダ、ノルウェー)(8)、(ドイツ)(11)、(英国)(12)、(デンマーク)(13)、(フィンランド、アイルランド)(14) ○自国籍船員の社会保険料軽減、自国籍船員の所得税減免(オランダ)(8) ○1998年外航海運改革法の成立(米国)(11) ○済州特別船舶登録制度(韓国)(14) ○船員の社会保障費軽減(ドイツ)(14)						
一般トピックス			★イラン・イラク紛争停戦(63.8) ★湾岸戦争勃発(2.8)				★湾岸戦争終結(3.2) ★阪神・淡路大震災が発生、神戸港の機能停止(7.1)											
船舶建造	計画造船建造量(隻)	16	1	2	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	計画造船建造量(千GT)	1,280	51	166	574	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	建造実績(隻)	648	710	711	789	760	706	692	714	692	717	687	650	601	446	457	462	397
	建造実績(千GT)	8,178	5,749	4,023	5,613	6,663	7,315	7,853	8,932	8,648	9,311	10,149	9,883	10,272	11,052	12,020	12,024	11,957
日本商船隊	日本船(隻)	957	816	640	532	449	419	376	340	280	218	191	182	168	154	134	117	110
	外国用船(隻)	1,292	1,266	1,487	1,470	1,543	1,641	1,637	1,708	1,710	1,781	1,816	1,839	1,802	1,842	1,905	1,983	1,878
	合計(隻)	2,249	2,082	2,127	2,002	1,992	2,060	2,013	2,048	1,990	1,999	2,007	2,021	1,970	1,996	2,039	2,100	1,988
	合計(千GT)	55,474	54,514	55,369	55,168	57,316	59,914	61,666	62,907	61,050	64,363	65,115	67,381	66,250	67,270	69,138	72,166	69,785
	合計(千D/W)	91,691	88,736	89,054	87,937	91,200	95,470	93,056	97,511	93,897	98,739	98,523	103,121	98,989	100,750	102,527	107,673	101,859
輸送活動	海上貿易量(輸出)(百万M/T)	75.7	71.2	70.7	70.5	70.4	74.8	85.6	91.0	95.3	97.4	94.8	101.9	100.9	102.0	101.7	107.0	119.4
	積取比率(輸出)	48.9%	48.5%	48.7%	46.9%	46.8%	46.3%	46.4%	42.7%	42.7%	39.8%	40.3%	39.4%	43.4%	38.4%	34.4%	31.6%	30.4%
	海上貿易量(輸入)(百万M/T)	584.1	603.9	660.7	684.7	699.3	714.5	699.9	704.9	733.1	756.8	757.9	775.9	730.2	748.9	788.0	773.0	762.3
	積取比率(輸入)	69.1%	65.3%	66.8%	67.5%	67.2%	70.6%	71.5%	71.8%	70.1%	70.0%	70.4%	70.2%	71.8%	70.8%	68.4%	66.6%	66.4%
経済	GDP(対前年比)	3.0%	3.8%	6.8%	5.3%	5.2%	3.4%	1.0%	0.2%	1.1%	2.7%	3.1%	1.1%	-1.1%	-0.3%	2.8%	0.4%	0.1%
	為替レート(円/ドル)	168.52	144.64	128.15	137.96	144.79	134.71	126.65	111.20	102.20	94.06	108.78	120.99	130.91	113.91	107.77	121.53	125.39
船社状況	大手船社数(社)	6	6	6	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	3	3	3	3
	売上高(百万円)	1,419,486	1,410,447	1,399,561	1,503,985	1,631,660	1,698,421	1,664,610	1,524,999	1,501,787	1,542,604	1,679,000	1,795,760	1,781,558	1,697,456	1,835,318	1,892,002	1,910,095
	経常利益(百万円)	-26,837	-1,315	40,031	42,933	28,993	28,474	23,584	4,745	11,086	32,281	35,777	45,770	46,812	73,481	119,012	81,386	88,173
	配当社数(社)	1	1	1	2	2	2	2	1	1	1	1	3	3	3	3	3	3

外航海運年表

西暦		2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
元号		15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31(令和)
時代区分		外航海運好景気						世界金融危機による不況		EU経済危機、世界的船腹過剰		世界的に船腹過剰が続く／環境規制の強化						
外航トピックス		☆国際海運会議所(ICS)と国際海運連盟(ISF)総会、兵庫県淡路島で開催(アジア初)(15.5) ☆TAJIMA号事件に端を発し、日本国外において日本国民が被害者となった犯罪に対処するための刑法の一部を改正する法律が施行(15.8) ☆バラスト水管理条約が採択(16.2) ☆テロ防止対策に関するSOLAS条約(海上人命安全条約)発効、船舶と港湾施設の国際保安コード(ISPSコード)が実施(16.7) ☆改正油濁損害賠償保障法施行(17.3) ☆輸出入および港湾手続き簡素化のためのFAL条約を締結(17.9) ☆与党税制改正大綱(トン数標準税制については、20年度税制改正において具体的に検討する。)(18.12) ☆水先制度の抜本改革の実現化に向けて改正水先法が施行(19.4) ☆海洋基本法が施行(19.7) ☆与党税制改正大綱(日本籍船に係るトン数標準税制を創設する。)(19.12) ☆トン数標準税制の実施を内容とする海上運送法の一部改正法成立(20.5) ☆外国人全乗の日本籍船が誕生(20) ☆ソマリア周辺海域で海賊襲撃事件が頻発(20)						☆外航海運企業10社に対しトン数標準税制実施(21.4) ☆香港にて、シップリサイクル条約採択(21.5) ☆海賊行為の処罰及び海賊行為への対処に関する法律成立(21.6)		☆新和海运と日鉄海运が合併、NSユニテッド海運設立(22.10) ☆改正 STCW 条約発効(24.1) ☆国際海運におけるCO ₂ 排出規制(世界一律の規制としては他分野に先駆けて初めて。)を導入するための海洋汚染防止条約(MARPOL条約)改正案採択(23.7) ☆外国人船舶職員承認制度に機関承認制度を導入(23.8) ☆三光汽船倒産(24.7) ☆海上運送法の改正(海外子会社が所有する一定の外国船舶を準日本船舶として認定)(24.9)		☆拡充トン数標準税制(準日本船舶制度を導入)施行(25.4) ☆2006年のILO海上の労働に関する条約(海上労働条約)批准(25.8)、日本について発効(26.8) ☆海賊多発海域における日本船舶の警備に関する特別措置法(民間武装警備員乗船制度導入)施行(25.11) ☆海洋汚染及び海上災害の防止に関する法律を改正(26.6)し、バラスト水管理条約に加入(26.10) ☆JX 日鉱日石タンカーと JX 日鉱日石 SHIPPING が合併、JX オーシャン設立(26.4) ☆船主責任制限法の改正が成立(27.6) ☆日本船主協会『「新外航海運政策」の早期実現に向けた提言」を公表(27.7) ☆スエズ運河の拡張工事完了(27.8) ☆第一中央汽船が民事再生手続を申請(27.9) ☆パナマ運河で新開門開通、LNG船含む大型船通航可能に(28.6) ☆「MARPOL条約付属書VI規制」によるSO _x (硫黄酸化物)に対する規制強化の開始時期が2020年に決定(28.10) ☆平成29年度与党税制改正大綱(トン数標準税制について準日本船舶の対象として日本の船主の海外子会社保有船を追加)(28.12) ☆改正 STCW条約(マニラ改正)完全実施(29.1) ☆川崎汽船、商船三井、日本郵船の大手3社が定期コンテナ船事業統合新会社、オーシャン ネットワーク エクスプレスを設立(29.7) ☆船舶バラスト水規制管理条約が発効(29.9) ☆準日本船舶が適用対象となった、新たなトン数標準税制が開始(30.4) ☆第3期海洋基本計画が閣議決定(30.5) ☆運送や海商に関する規定「商法及び国際海上物品運送法の一部を改正する法律」が成立(30.5) ☆米中貿易摩擦により、中国発コンテナ荷動きの落ち込み拡大等海運業界への影響が広がる(元) ☆防衛省設置法に基づく「調査・研究」を目的とした、中東地域への自衛隊派遣を閣議決定(元.12)						
		*交通政策審議会「水先制度の抜本改革」答申(17.11) *自民党海運・造船対策特別委員会「外航海運税制について」中間とりまとめ(18.6) *新外航海運政策検討会「今後の外航海運政策」とりまとめ(18.6) *交通政策審議会海事分科会国際海上輸送部会「安定的な国際海上輸送の確保のための海事政策のあり方について」答申(19.12)								*国土交通省 成長戦略発表「日本商船隊の国際競争力強化ートン数標準税制の拡大等ー」(22.5)								
		○トン数標準税制の導入(フランス、スペイン、ベルギー)(15)、(米国)(16)、(韓国、イタリア、インド)(17) ○フランス新国際船舶制度の導入(17) ○トン数標準税制の導入(ポーランド)(18)、(リトアニア)(19)								○トン数標準税制の導入(キプロス)(22)、(台湾)(23)		○トン数標準税制の導入(スウェーデン)(29)、(ポルトガル)(30)						
		★イラク戦争勃発(15.3)★原油価格高騰(15.3) ★リーマンショック(20.9)						★政権交代・民主体政権成立(21.9)		★東日本大震災発生(23.3) ★IMO事務局長選挙において日本人で初めて関水氏が当選(23.6) ★政権交代・自公連立政権成立(24.12) ★第2次安倍内閣は、金融政策・財政政策・成長戦略の「三本の矢」(いわゆるアベノミクス)の経済政策を推進(24.12)		★COP21「パリ協定」採択(27.12) ★米大統領選でトランプ氏が勝利(28.12) ★史上初の米朝首脳会談(30.6) ★EU、英国離脱協定案を正式決定(30.11) ★中華人民共和国湖北省武漢市において、新型コロナウイルス関連肺炎の発生が報告(元.12)						
		船舶建造	建造実績(隻)	405	430	469	534	543	562	576	580	593	586	540	522	520	514	493
建造実績(千GT)	12,688		14,515	16,434	18,176	17,525	18,656	18,972	20,218	19,367	17,426	14,588	13,421	13,005	13,309	13,074	14,526	16,215
日本船(隻)	103		99	95	95	92	98	107	119	136	150	159	184	197	219	237	261	273
外国用船(隻)	1,770		1,797	1,914	2,128	2,214	2,555	2,428	2,623	2,672	2,698	2,450	2,382	2,364	2,192	2,221	2,235	2,138
合計(隻)	1,873		1,896	2,009	2,223	2,306	2,653	2,535	2,742	2,808	2,848	2,609	2,566	2,561	2,411	2,458	2,496	2,411
合計(千GT)	68,973		70,536	80,676	88,880	93,094	104,987	108,797	118,399	120,338	129,153	118,694	119,899	121,998	117,403	119,425	124,501	123,533
日本商船隊	合計(千D/W)	101,597	103,263	117,662	128,445	136,189	151,754	150,318	166,799	178,565	190,785	171,934	173,695	175,965	167,590	173,285	180,254	174,451
	海上貿易量(輸出)(百万M/T)	120.7	129.9	134.4	144.4	150.2	153.9	143.6	156.4	149.8	161.1	167.3	163.2	169.0	167.7	165.2	161.6	159.7
	積取比率(輸出)	32.2%	32.3%	33.8%	37.9%	37.7%	31.0%	31.3%	28.6%	34.6%	31.3%	31.1%	35.8%	36.0%	39.3%	41.6%	48.7%	40.5%
	海上貿易量(輸入)(百万M/T)	796.1	811.9	815.6	814.6	813.8	816.2	688.9	759.0	752.7	799.0	806.1	795.4	777.7	767.6	767.9	758.2	737.9
	積取比率(輸入)	69.7%	67.4%	64.9%	61.8%	64.8%	67.1%	66.5%	61.4%	71.2%	66.4%	67.1%	67.3%	70.0%	66.9%	66.5%	70.7%	68.0%
	輸送活動	GDP(対前年比)	1.5%	2.2%	1.7%	1.4%	1.7%	-1.1%	-5.4%	4.2%	-0.1%	1.5%	2.0%	0.4%	1.2%	0.5%	2.2%	0.3%
為替レート(円/ドル)		115.93	108.19	110.22	116.30	117.75	103.36	93.57	87.78	79.81	79.79	97.60	105.94	121.04	108.79	112.17	110.43	109.05
経済	大手船社数(社)	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
	売上高(百万円)	2,125,908	2,442,838	2,798,582	3,171,444	3,964,819	3,728,830	2,479,557	2,931,226	2,718,334	2,944,076	3,353,523	3,600,961	3,388,969	2,799,341	3,231,036	2,049,652	1,868,926
	経常利益(百万円)	189,027	339,237	271,727	213,354	454,736	306,940	-68,193	200,097	-131,568	-2,452	89,275	145,949	64,046	-71,141	88,440	29,290	78,394
	配当社数(社)	3	3	3	3	3	3	2	3	2	2	3	3	3	1	2	2	2

日本の海運 SHIPPING NOW 2020-2021

協力

(一社)日本船主協会

www.jsanet.or.jp

(公財)日本海事センター

www.jpmac.or.jp

編集・発行

(公財)日本海事広報協会

www.kaijipr.or.jp

〒104-0043 東京都中央区湊2-12-6

TEL 03-3552-5033 FAX 03-3553-6580